

差の鎗持の樵右衛門へ二百の方にとられたを。お身様もまつて居るじやアねへか仲間
 ホンニそらうぶ。エ、コリアおのれ打はたそやつなれど。ゆるしてくれう早く行彌次
 イヤ行めへサア切〜トつ、かゝる。皆々此喧嘩のおかしがり。エ、そらぬかしや
 ア了簡があらぬ突殺してなとくれふ。ト引抜てつきよ掛る竹光を彌次郎仲間ヤアレ
 人殺し〜ト此内早殿様のお立と見。カッチ〜。そりやお供崩へど。さびぎ立
 とある彌次郎も是れ幸に北八も彌次、〜大笑ひの喧嘩た
 る共こゝをのがれて足早へ行過。脇差の抜身の竹と見ゆれ共。喧嘩にふ〜のあくて目出たし
 夫より此宿を出て。たどり行よ。早くも大岩小岩を打過岩穴の観音を。ふしおがみて
 行掛の駄賃よおがむ観音も。尻くらゐと岩穴の内
 げにも旅のきさんじの差合くらせ。高聲よ咄物まで行うちにも。さどがよ退屈の欠
 びまながら北八ア、草臥たちつと斗りの風呂敷包や紙合羽も。中〜邪入成物だ。
 コウ彌次さんお目への荷と目つちの荷を一所よして。坊主持おしよじやアねへか

彌次 コリヤア面白へさいはひ爰にい、竹が捨て有。トひろる取て二人りの荷物彌次
 サア〜北八手前へから持てこい。北八年役よ。お目へ始めさつせへ。彌次そんなら狐
 拳でやるふサアこい。ヒイフウミイ。おつとびた。北八エ、いめへましひ。トひつかた
 から来る旅僧の僧だぶ〜。だぶたぶだぶ〜。フコヤ〜。だぶ〜
 法華宗とみねて。北八ソリヤ彌次さんわたしたぞ。彌次チット請取たりや。其次の坊様はどう
 だ早來れい、よ。ト又向よりくる。乗掛馬の鈴乃音。シヤン〜。馬士歌。高る山から谷底見れ
 る。お方かはいや。布さらそサアエとら〜。彌次きたぞ〜。お衛符は勅願所ソレ
 馬の上よ御出家由か。北八あんまり早いな。ト請取てひつかつ。いざり。御らんの通り
 足のかきはぬ。ゐざりに御はうしや。北八イヤアこいつ坊主だ。澄文やれ。彌次前のら見。
 ると坊主のようだが。後を見やぼんの糞も毛が有。北八おさやがれハ〜。此
 跡より。びくよが三人つれにてゆび。唄。身をやつす賤が思ひを夢程様よまらせたや。
 につけま管をあらしてうたひくる。身をやつす賤が思ひを夢程様よまらせたや。
 ぬいそりや。夢程様よしらせたやサアサさんから〜。北八あぶやの赤聲がとる。ト

り歸^りヒヤア比丘尼^{ひくに}ごくさア彌次^{やじ}三^{さん}渡^{わた}
 老^らやと彌次^{やじ}エ、いめへまゝい北八^{きたはち}人^{ひと}よ荷^に
 を持^もせたるい。中^{なか}くい、物^{もの}だ。是^{これ}でお供^{とも}
 を連^{つれ}た心持^{こころもち}だ。ヤアくこいつらアまん
 ざらでもねへ。彌次^{やじ}さん見^みねへこちらら
 比丘尼^{ひくに}がおれを見て。アレいつそ。よこ
 く。愛敬^{あいけい}がこぼれるようだ畜類^{ちくるい}め彌
 次^{やじ}愛敬^{あいけい}のい、のじやアねへ。アリヤア顔^{かほ}
 にままりのねへのだ。北八^{きたはち}悪^{わる}く云^いせ。此^こ
 内跡^{うちあと}になり先にあり行く比丘尼^{ひくに}はまた年
 も廿二^{にじふに}三^{さん}今^{いま}ひとりはどしま十一^{じふいち}二^にの小比
 丘^{おのこ}と共に三人^{さんにん}連^{れん}。中^{なか}にも若^{わか}ひ
 比丘尼^{ひくに}が北八^{きたはち}のそばへよりて。若^{わか}あなた。
 火^かのお座^ざりませぬか。北八^{きたはち}アイく今折^{いままつ}て



わけやせう。ト摺火打^{すりびたい}を出し北八^{きたはち}サアあがり。時^{とき}にお前方^{まへかた}アどけへ行^いなさる。比丘
 尼^に名古屋^{なごや}の方^{ほう}へ参^{まゐ}り升^{まゐ}。北八^{きたはち}今夜^{こんや}一所^{いっしょ}泊^{とま}りてへの。何^{なん}と赤坂^{あかさか}迄^{まで}行^いなせへ。一所^{いっしょ}にーや
 せう。比丘^{ひくに}夫^{おつと}の有^{あり}がたうお座^ざり升^{まゐ}。モシどらうお煙草^{たばこ}粉^{こな}を一^{いっ}ふッく下^{くだ}さりませ。とんと
 買^かいのを忘^{わす}れまえた。北八^{きたはち}サアく煙草^{たばこ}入^{いれ}を出^だしな皆^{みな}な上^{あが}よふ。比丘^{ひくに}夫^{おつと}でいあなた。おこま
 りでお座^ざりませよ。北八^{きたはち}ナニエつちやア。由^{よし}ど時^{とき}もお目^めへ方^{かた}のような。うつくし顔^{かほ}で
 なせ髪^{かみ}を剃^そぎさつた。はんにそうして置^おはおしし物^{もの}だ。比丘^{ひくに}ナニわたしらが。たどへ
 髪^{かみ}が有^あたとして。誰^{たれ}も構^{かま}人^{ひと}のお座^ざりませぬ。北八^{きたはち}有^あるごんか。わつちらア。一番^{いちばん}に構^{かま}氣^きだ。何^{なん}
 とかまはしてくんなさらんか。比丘^{ひくに}ヲホ、くく。北八^{きたはち}早く一所^{いっしょ}泊^{とま}りてへ彌次^{やじ}さん
 此^{この}先の宿^{しゆく}へ最^と泊^{とま}るふじやアねへか。彌次^{やじ}馬鹿^{ばか}ア。ぬかせ。わやよく坊主^{ぼうちう}のくるが。と
 ぎれた。茶^{ちや}屋^やに至^{いた}ると此^{この}所^{ところ}より比丘尼^{ひくに}のわき道^{みち}へ這^は入^いる。北八^{きたはち}コレくれめへたちや
 アどこへ行^いく。そつちじやア有^あるめへ。比丘^{ひくに}ハイ是^{これ}のらお分^{わか}れ申^ま升^{まゐ}。とし共^{とも}に此^{この}在^{ざい}郷^{きやう}へ廻^まて
 参^{まゐ}り升^{まゐ}から。ト野道^{のちだう}をさつくと行^い過^かる。北八^{きたはち}あきれ。ハ、くく。北八^{きたはち}手^てめへ今日^{けふ}

○有^あ無^な
 限^{かぎ}餘^{あま}情^{なさけ}

の大分つけがわりいせ 北八 エ、とんだ目も逢た。こうはらな トうのかりして居る後
往來)北八 アイタ、くくく目も明て通れ。たれた 見れば旅僧 彌次 ヲット荷物渡ま
た〜 北八 コリヤはじまらねへ げ行儘も頓て吉田の宿に至る

旅人をまねく薄のほくちか。爰も吉田の宿のよねたち

此宿はつれより遠國同者とい見ゆれ共少しきむたふう。まやべる手合五六人高聲よ
咄て行を聞は。中よも目引の立編よ肩の所編がら替りたる切を當たる裕を引張風呂
敷包と糸だてを脊おひし男 子、イ源九郎義經ヤアイ〜早く来さいのく ト呼聲
跡のやうをふりかへりて 郎北八おかしく此義經と呼をばる、男を見れば紺の紋付の廣袖袷に 彌次
是も包と糸だてを脊おひ顔は大あばたよて少〜片小びんはげたる男 龜井兄なアや。
片岡兄あア。早くと足が達者だアのし。うらア。わくとのあのされアへ。石ころがつ

、ばるつて。あるかれ申さぬ 静御前 どうぞさつたアのし 義經 ヤレ 借開さる
る。跡の建場で静御前が持病の疝氣アおこつたと金玉ノサ釣上て。うつ死べんと。
西風。東風よ。さばさやることよ。夫よハア 六代御前が。牡丹餅ア三十斗も。うち喰
ふげで食傷のウして。きたん。ばたん。切なかりやる。まんだ夫よ辨慶の。團子のくし

○ 徐御 膳所ニ以

後

さアで咽喉のウ。つゝいたと涙ア翻きて。なきやつたけで。うらな 家友盛殿が三人
のウ。介抱して。やらやつと跡がら連んで来やそ。主たちやア。何もしらすまうつ走
つて仕合せだアのし 彌次郎此咄をおか〜 お目へ方ア何所へ行なさる 義經 お伊勢
様へ参りやそは 彌次 先けから聞べお目へ方ア義經だの。辨慶だのと云なさるが。どう
云こつたね 義經 ハアそんな衆の聞やつたら。わかしかんべる。コリヤハアわし共が國
さアつん出て来るまへは祭禮が有やて。千本櫻といふ芝居のウしやたから。夫でハ
ア義經だア辨慶だアのど。狂言さア。おつ初めた時。忘れなひ様よと其名を。やつべし
云つけ。くせさア。今でも戯けに云のでおざる 彌次 聞へやした。そんならお目へ
義經よ成た。お方と見へる 義經 そうでおざる其前にし共が國さアへ。江戸芝居が来
て天神様の狂言のウまやたが。聞おさる。玉けた理屈よ。あまがハア時平とやら五兵
衛とやら云悪人殿が。ざん言のウせられたけで。天神様の島流にならしやませ時。興
よ乗てお出やると。あまがハア見物のウしておる婆ア様立も噂様立も。ヤレ〜

しほいこんごと。涙ア翻して。御門跡様の通らしやまも様に。米だアの。銭だアのと。舞臺さアへ。時ちらかいて。悲ーがりやる。そこでハア見物の中から博勞の與五左と云づない人が舞臺さアへ。駈だいて。いやるにやア此芝やアならないぞ。あせ天神様ア島流しにせるのだ最前お出やつた長樂寺様のるんま様ア見る様なお公家殿が悪人だア。おにも天神様ふ科アあひ。いがふ芝やだアとつて。ふとを馬鹿よしたこんだア。天神様の尻やア。此博勞の與五左が持。時平殿はうらが相手だ。あまハア御年貢米の二俵べしも。さしやアける力の有せなアだんて。誰もうつたまげて。挨拶のウせる人アな。見物もくちやうく。與五左殿そうだ其時平とやらアしよびさ出してぶつた。けど。あまハア村中の若いふとたちが樂屋さアへ刃込で。らんごくと遣ると思ひなさる。そうせると江戸役者の時平殿は。コリヤさまらさいと。尻のウおつはしよつて。つん逃やた。夫からハア名主殿へ寄合付て。最ふ此村へ江戸役者ア入るると談合のウして。わし共其跡の芝やアで狂言のウおはじめ申たが。江戸



芝やよりかア。ぶち割る程流行申た。いのはつて。とはきかたり自慢くしく咄もつて行ま。よ。いつの間よかは大雲寺に至る。此所ハ醴酒の名物なればかの人々ハ打連て此茶屋に休む彌次郎兵衛北八ハ急ぎこゝを打過るとて。いや高き御寺の前の名物の。是も佛よなれし移まさせ。斯て此渡りより早日も傾き暮に近ければ。いざや急んどて草臥し足を早めてたどり行道とから北八。どうだ彌次さん持が明かねへの彌次大さよ草臥た。北八。何と夕べの泊りの中位の宿で有たが今夜ハこうしやせう。赤坂迄。わつちが先へ行てい宿を

取やせう。お目へ草臥たから。跡のら徐かよ來あせへ。宿から向ひの人を出させて置やせう彌次。夫よかるふ。まかし宿のどうでもい、から。たばの有さう幸内ふしやれ北八。吞込山。ト此所より駈ぬけて先へ行彌次郎跡よりたどり行よ。程なく御油をかぶりたる如く塗立たるが袖を引てうるさければ彌次郎兵衛やうくと振切行過るとて其顔で泊だてあさば宿の名の御油るされいと逃て行ばや

○狐話

無氣則
常話耳

彌次郎兵衛。余り草臥ければ。先此所。はづれの茶店よ腰を掛たるよ主の婆々アイ茶ア参りませ。彌次。モシ赤坂迄の最う少しだの。ぼ。アイたんご十六丁お座るが。おまへ一人りなら。此宿よ泊せやりませ。此先の松原へ。わるる狐が出あつて。旅人衆が能化され申。彌次。そりやア氣のねへ咄だ。まかし爰へ泊りたくても。連が先へ行から仕方がねへ。エ、氣つゝこたアねへ。やらかしてくれよ。アイおせ。ト茶代とを立出行し聞さの聞し薄氣味悪く眉毛に唾をつ。彌次。ワリヤ啼やアがる。おのれけちから行くはるか向よて狐の啼聲コン引く。トりさみかへつて。たとり行程よ。北八も先へ駈ぬけ。此出て見る。打殺してくれう。ト所迄來りし。是もこへ狐が出ると云咄しを聞てもし

○見股
間尻尾
是馬か鯨

も化されていつまらぬと彌次郎を持合せ連立行んと。北八。チイ。彌次さんか。彌次。思ひ土手に腰を掛け煙草吞居りけるが夫と見るより。ト云よ彌次郎心付。こいつ。さやつめが北八。彌次。くそをく。ト云よ。一所へ行と思て持合せた。よ化たなど思ひければ態とよをみませ。ト云よ。らへそんちで行のじやアねへ。北八。チヤお前何を云ふとして腹が減たるふ餅を買て來から喰なせ。彌次。馬鹿ア拔せ。馬糞が。くらはれる物か。北八。ハ、ハ、ハ、コレおれだ。い。彌次。おれたもすさまじい北八。其ま、よ能化やアがつたちく生め。北八。アイク、彌次さん。コリヤどふと。彌次。何をももんか。打殺そのだ。トうつかりた所を。彌次郎その上へ乗。北八。あいたく。彌次。いたかア性体をあらせ。北八。アレサ尻へ手をやつてどうする。彌次。どうするもんか。尻尾を出せ出さばこらする。ト三尺手。北八が手を後へ廻てまをる。北八。彌次。サア。先へ立てあるけ。ト北八をく。おのまわくわざとしばられてゐると。赤坂の宿よ至る。早何れの旅屋にも客を留て門立。北八。居る女も見へ。彌次郎の宿から向ひの人が最早出そふなものとうろつく内。ト北八。コウ彌次さんい、おげんに解てくん外聞のわるい。人がさよろく見てわりい。

とをおつしやり升 北八 そんなら先へ這入やせう
 へ申上升。今晚の私方少し祝事がお坐り升から。御酒を一ッ上ませう
 肴持彌次 ね構ひ成るお何ぞお目出度とかの 亭主 ハイおさやうでお坐り升。私の甥め
 出る 嫁と貰ひました。今晚婚禮を致させ升のらおやのまきうお坐りましよ
 八風呂よ 北八 何だおごり掛る 彌次 この内に婚禮が有と云とだ。コリヤ彌々。さや
 り上り つめが。はぐらかすよ。さばまつた。もう水風呂へも這入めへワへ 北八 エ、お前も
 かなんよしな。ざりとの執念深へこつた 彌次 ヤイくめつたよ油断のあらぬ。此硯
 ふたも。こんなな味とう見へても性の馬の糞や犬の糞だろふ 北八 ホンニ。そうだろ
 ふから。おめへの見て居させへこいつの有がてへ。おじぎあしよやらかしやせう
 八手酌よてさつくと呑掛る彌次郎れるのいじ 彌次 いめへましい氣を。わるくさ
 がきたなくさどが見ても居られまじくして
 やアがる 北八 さづけへね。一盃呑させへ 彌次 イヤく馬の小便だろふ。ドレにや
 ひをか、して見せや。ムウくこりやアほんどうの様だ。どうもこちらへられぬア、ま

彌次 奮發

よやらかせ ト一盃ついで。呑 酒だくドレく肴ア。ラット此玉子のどうも色相
 が氣にくはねへ海老よしよふ。カリくこいつの本とうの海老だく ト引かけ
 つ。おさるつ。さつくと呑掛る此内勝手の方のわんぐの音。かたびしどさわ 四海
 ぐしく取込さい中別座敷の早婚禮の盃事始りしと見へてうたひのこるさる 浪静にて國も治る時津風枝をならさぬ御代なれや。相又相生の松こそ目出たかりけ
 れ 北八 ヤンヤア 彌次 コウやかましひわへ 北八 やかましひい、が。お目へ先刻から
 盃をはあさねへ。ちつとこつちへ廻しき。ホンニ馬の糞だの小便だのと云かと思や
 ア聞くも一人で喰やつさハ、く 彌次 おらア正直化された氣に成て居たが。今思や
 ア。そうでもねへ。とんだ苦勞をさせやアがつた 北八 エ、お目への苦勞したよりのア
 おらア縛きて變ちまきめに合たハ、 此内勝手より膳も出彼是する 千代も替はら
 じ幾千代も榮え榮ふる松梅の二葉の竹の夜をこめて老と成迄と結ぶたのしかるける。
 目出たひく三國一の嫁を取まゐた。しやんく ト手を打た、さ。め。あな
 た方最ふお床をとりましよか 彌次 そんなとにしやせう 北八 コレ女中祝言は最ふ濟や

○ 嫁 遠
目 彌 次
窺 見 遊

またか。定めて嫁このうつくしかる宿女 アイサ。むこ様もよい男。嫁ご様もゑらゐ
 きりやう由でお座り升。お氣の毒さこのあちらの坐敷に寝やしやり升のら。むつ事が
 開へましよ。彌次 何だそんな手合と割床のあやまる。北八 こいつの大變く。宿女 モウね
 しづまりなさぬませ。ト出て行。二人も其ま、寐かけると早ふすまひとへ隣の座敷よ
 色事よて貰ひし嫁と見へて中く初たい面との見へせぶつたりつめつた。彌次 エ、
 とんだめに合しやアがる。北八 ホンニわりい宿を取た。人の心も知らせよ。何んだかお
 そろしくむつましる畜生め。彌次 サア咄聲がやんだからむつかしい。ト段々布團か
 の様子を聞耳立て。寐られぬまに彌次郎をつとあき立。ふ。北八 コウ彌次さん嫁は
 うつくまひか。かいらよもちつと見せてくんさ。彌次 コリヤ静にして肝心の所た。北八
 トレく見ねへ。彌次 コレサ引張な。北八 夫でもちつと退させへ。ト彌次郎が夢中に成
 けんと引張どものかじといぢばるはづみよ。ばつたりまそまがあちらの間へたをれ
 ると二人も共よふそまの上へころげる。むこも嫁もおしよたれてさをもつぶし
 むこ あいたく、コリヤとやつじやいせんせ唐紙を打こかいた。トはねおきた所かへ
 行燈もひつくりかへ

して。真くら開彌次郎は。ちやつとよけておのが寢所へ這。北八 御免なせへ。手水も行
 込。北八まごくしてかひむこまつかまりせん方なく。 夜座敷のまん中へ行
 どつて。ツイ戸まどひをしやした。せんてへ愛の女中かわりい。夜座敷のまん中へ行
 焼を置から夫よけつまついてお氣の毒だ。ア、小便がもるようだ鳥渡行て来やせう
 こ、をばあしてくんなせへ。むこ いや早あされたお人達じや。夜着も布團も油たらけ
 になつた。コリヤおさんく。だれぞ早う。おこしてくれぬか。ト呼たつる聲よ勝手よ
 来りそあら片づけるよ。北八も手持あくはづれしから紙をはめて引立やう
 く。にことはり云て。元の寢床ろへ歸りまごくと寐掛る彌次郎おかしく
 寐て聞心をやたらおかしや唐紙と。共よはづれしおこの掛かね
 北八も夜着打かむりながら

聾嫁の寐屋をむせうよのささがし。我を面目らしきひしとて
 斯打興じて。夜も更け行ま、よ。双方静まり。只るびきの聲のみ高くありぬ。鶏の聲
 万戸よ響きて。引つる、謀役の馬の嘶きいとましく。すでよ夜明ければ。彌次郎兵衛
 北八もおき出。あら増に支度と、のへ。早くも赤坂の宿を立出けるよ。此の宿の出端



より跡はなり先よりなり行三人連の旅人。是も江戸者と見えて。少し勇み肌の巻舌よて咄行と聞ば一人の男 コウタベの泊はおかしかつたなア 今一人 ソレヨ何だか奥の間よ泊て居た。やつらアさのきのねへ野郎共だ。宿よ婚禮が有を羨ましがりやアがつて襖の間から覗き居て夢中に成。とうく襖をぶつこかしやアがつた。大笑ひな。べら棒共。今一人 夫から其聲ふわやまるごまア。あの騒ぎでおいらもろくに寝られなんだるめへましいい 一人の男 をしてアノ一人の野郎め何だか宵に宿の亭主を呼やア

○赤耻

自首

○彌次
敗軍

がつて。この家の亂塔場じやアねへかと云やアがつたが。あのべら棒めいどうでも気が觸て居ると見へる。ト此手やい夕へ彌次郎北八が泊し家へ一所よ泊たど見へてを彌次 コレ貴様達やア先刻からだまつて聞てわりやア。おぬらがことをべら棒だア何のこつた 先の男 ナニこんな衆のとじやアねへこつちのとだ。彌次 こつちのとと云とがあるもんか夕への宿でのととぬかどなるふ其襖をぶつこかしたべら棒と云たアおれがとだ。旅人 ハアこんな其べら棒か 彌次 ヲ、其べら棒だ 旅人 ハ、べら棒だから。べら棒と云たがいひじやアねへか 彌次 イヤ。こいつ見るくしやれやアがる 旅人 糞を喰へ 彌次 何だ糞を喰コリヤ面白へ喰べひから持てうしやアがれ。ト彌次郎。眞黒されと合手の杖の先よ掛け。サア持てきたからくらへ。彌次 イヤ馬の糞のきらひだ 旅人 きらひと云とが有物か是非喰せよやアおがぬ。ト三人掛て彌次郎と手込這北八 イヤ最う御免おせへ。これとも同前で御座りやす。三人 ハ、かんよしてやる。ト行過る彌次郎逆も叶はぬと。此内桐の木。中柴を打過山中に至る。爰の麻の網袋ふ見て只口内よぶつくさく。ト此内桐の木。中柴を打過山中に至る。爰の麻の網袋

早繩などを商賣ふなれば北八

御佛乃誓ひと見へて寶藏寺。南無阿彌袋のこの名物

斯て藤川に至る。棒鼻の茶屋。軒毎生肴をつるし大平皿鉢見世先並へ立て旅人の足をと、む彌次郎兵衛

湯で蛸のむらさきいろの軒毎にぶらりと下る藤川の宿

夫より此宿を打過。出はなれのあやしげなる茶見世に休みて北八。何だか業てまよ。虫

がかぶる。婆アさん素湯の有めへか。婆はハア素湯の御座らぬ。氷をえんせませうか。北

八。薬を呑のび。コリヤたまらなく成た。時に雪隠の何所よある。彌次。何所よどつ

て。そんなよお家と見廻しても。雪隠か疊の上よ有物か裏へいかつし北八。ヒヤアつと

あたりよ見へる。ト表へ出。雪隠へ行。しばらく用達て出てあたりを見れば此

だるるを共中の上しろ物。只一人居る様子。北八。北八。モシ御無心ながら。水を一

ッ。ト手を洗ふ肉娘の北八。コウ姉さんお目へ何を笑ひさるそして一人爰よ居るさ

○北八
腰間之
緊龍可
想像

るのか無用心なトあたりを見れば其外よ人のなへ。さみの里りい何を見て笑ひささ

るコレサ何を笑ふのだよウ。ト娘の手を取て引張よさそが振切もせせ。やつぱり笑て

寄る。トつの間よ。ワアイ。わの人の氣違と色事をせる。ヤアハ。ト。大聲を上げて笑

びつくりしてよげのかんとする。娘。エ、此男め。はあさん。北八。是は情けあ。ト

りよ引放さんとどる所。コリヤ我徒の若いお女子をとらねて何せるのじや。北八。イヤ

へ此娘の親父立歸りて。せんものが。何条女一人ある内へ遣入らつせ。コリヤ承知なら

んわい。北八。ナニサ今用達にいつて。ツイ水を貰た斗。親父。インニヤあれを氣違で御

坐る。こあさん氣の違つたものをどらねて。あぐさみ掛さつせへた。違ひはあらい

北八。ナアニとんだとを。親父。インニヤ。とまん。氣違どあどつて。ひゆつとこなさ

んが。やりからかぬた。違やしよまい兎角云つせる。此分てはすまんぞ。トわめ

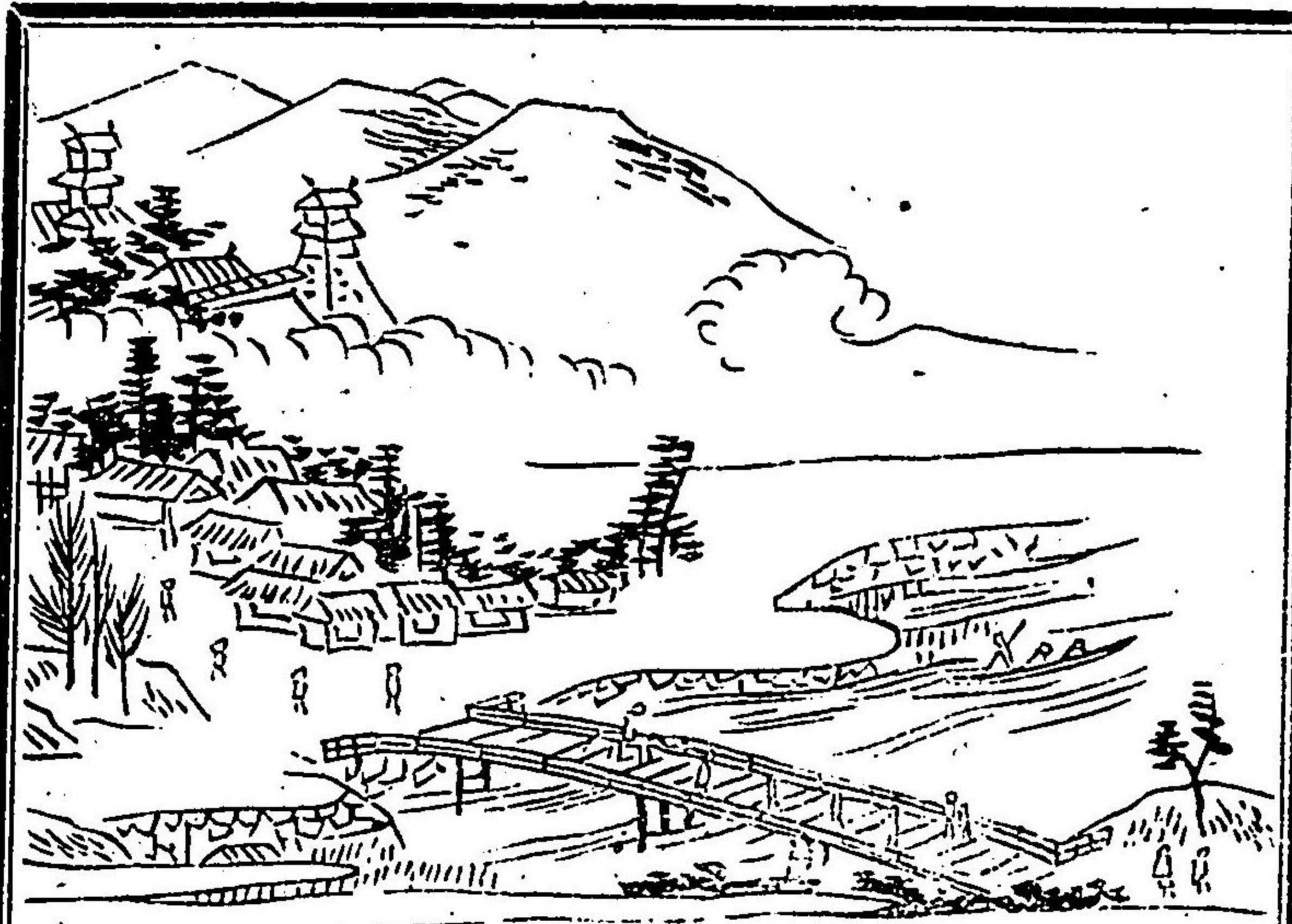
かし大さむぎをやらか。此内彌次郎表の茶見世。待居たり。北八。手水に行て歸

れせし。かしも。出掛けて。彌次。御免せせ。わつちやアこの男の連の者だがいさる聞

○北八
之氣與
紫龍一癖

やした。こいつめもあのよう見ぬても有やうのちつと気がふれて居やす。了簡一
てくんなせへ。エ、此野郎め能世話をやかせる。アノ顔はよアレ見なせへきよろく
くそる顔が證據。娘子は女丈夫だしも。イヤモ此氣違にはこまりはてやと。觀父イ
ヤくそらうではわらまい。ナニあの人が氣違者か。彌次ハテサあの顔付を見なせへ
。アリヤくあの通りだ。北八なん。何だおれを氣違へだ。コリヤ面白い。ハ、ア降のく。
アレく。花のふぶきが散やたらり。うんさんたらり。かんたんちり、ちりか、るよ
ふで。おいとしゆて寝られぬト、ヤアそこよ居の女房共か。イヤ好女房じやよ
く。コリヤのほひは、ひ。さんなわろのゐなヤンヤア。彌次アレ御ろうじろ。あの通
り其くせあの面で色氣違。夫だから女と見るとびろくとして。ほんよ恥を云ひよヤ
ア理が聞へやせぬが。こいつめは。わしか弟でイヤモこんが因果あこたア御座りや
せん。親父ハアこなさんが。そう云はせるとわしもかきしひ。見さつせる通りたんご一
人の娘が此病でわし。わつさな苦患で御座る。彌次さつしてとり舛。エ、此馬鹿野

郎め。何とげらく笑のだ。時に親父さん。おやかまきう御座りやした。親父マツ茶で
も呑で御坐らつせへ。彌次。最うめへりやせう。サア氣違めうせおれ。ト彌次郎がちやら
納まり。彌次郎北八を連れてこ、を
のがれ出掛け。果の大笑ひと成て
言釋たる娘のほんの氣違ひに。こちや間違ひとありし目違ひ
斯打興じて。こ、を立出行道すがら。彌次コウ北八手めへもとんだ者だ。氣の違た娘
をとらめへて。どうしよう。と思て業さらしな男だ。北八へ、面目次第もねへ。まのし
わつち迄を氣違ひとば彌次さんわりやアお前へ一生の出来だせ。彌次酒出も買ひやれ
時よ夫に附て咄が有る丁度手めへのような氣問くれ者が。氣違ひの女をとらへて。ま
やらつさ掛ると其女の親父が見附て腹を立。ヤイ此野郎め人の内へとはり。なまよ
牛込やアがつて。娘をちよろまかそうとか。ソリヤア赤坂へいだいへト云と。手めへ
もまけぬ氣よ成。イヤうぬ何た口ばしを。とんがらかして四谷鷺のようだと。茶かそ
と先の親父がチ、おれが四ッ谷鷺なりやア。うぬ八幡様の鳩だと云ふコリヤおか



是のら又鳴海のお鶴さんやねませんかい
 太仁ハ、くくサアいからまるか 茶や
 女御機嫌よふトそれくは挨拶する。内二
 暇乞して乗出。女郎送り出て櫓のし
 やれもあれ共零。彌次郎北八まばし此の
 ていを見て女郎買の輕尻馬て
 歸るもおかしひと打笑ながら
 三味線の駒に打乗還るなり

岡崎女郎衆買來れを

斯て二人も此所を立出宿外れの松葉川を打
 越矢矧の橋に至る

欄干の弓の如くに反橋や

是も矢矧の川も渡せば

夫よりうたふ坂町尾崎の郷。今村の建場

○北八
 三文智
 惠叩底
 而出

つく茶やば、名物砂とう餅お召なさりまアしお休みなさりまアしく 北八 ナイ此餅
 の幾ら宛だ餅や 三文でお座り舛 北八 こいつの安。まちらのうづら焼のいくらだ亭
 主夫も三文 北八 イヤ是は三文では高ひようだ。ナント御亭主こうしおせへ。是を二
 文もまけてくんおせへ。其替りそちの丸の餅の四文も買やせう 亭主こいつのへんち
 どちらよめても亭主 ハイようお座り升お取さりませ 北八烟草入から 四文わ
 んのいかな事故 錢貳文取出去て 打喰らひ乍ら行く
 らば。丸のいを買ふと思つたが三文有から此うづら焼ましやせう
 彌次ハ、こいつの北八出かした。さどかの亭主も肝はかりつぶして居やアがつた 北
 ナントちゑいすさまじかるう 彌次へ、べら棒め。おれも其位のを仕兼るのも
 かハ、くくく
 わづかでも欲より耽る鶏焼き。三文程のちゑをふるいて
 かく興じ笑ひ連て西田海道より半里斗北の方名にしお八橋の舊跡を思ひて
 八橋の古跡を讀もわれくダ。およばぬ恥を杜若なれ。

程なく池鯉鮒の驛に至る馬士宮で泊ろうかお龜よしやうかなア。但まや岡崎能女郎衆ナヤドウ〜彌次 いめへましの草鞋で足をいためた。ちつとの間た草履で行ふ。モシ〜此草履のいくらだね亭主 アイ〜十六文でお升彌次 こいつの安いこの勢者にて商なひ〜亭主 アイお安うれますはひな。わたし所のぞうりの。ひゆつと丈夫の功者あり

で。ねのらさりや致しませぬ 北八 根からア切めへが。先のやうから切るだるふ 亭主 イヤおはきなされていたまらまいが。ままつて置なると。いつ迄もあまどわいを彌次 そうだろふとして手前への所のぞうりの鼻緒が有て重寶だ 北八 鼻緒のねへぞうりが何所有物だ 彌次 何にしる。安い物だ トつるして有ぞうり イヤ此草履は。ちんばだえへかた〜の大き〜つて。こつちらはちんばいようだ。コリヤ八文宛よしちやア大きき方安ひが。ちんばな方の高ひ物だ。ナント御亭主片つばの大ききほうの九文に買やせうから。こつちらを七文又まけてくんあせへ 亭主 アイようお升ね召あされ 彌次 南無さん錢がたりない。一足買ふと思つたが。たつた七文計さやアねへから。アノ

こつちらの片々の方をばかり。買やせう 北八 ハ、〜こいつの大笑ひだ。おいらがまねをしようと思つても餅な〜い、がぞうり片々が何なるものだ 亭主 お左様でお升。一足お召あさりませ。どうも片々はな〜ての上げられませんといな 彌次 ナニ片方のうられねへか。さすがの田舎文。物が不自由だ 北八 エ、江戸だつて。ナニぞうりを片々賣る物が有もんか 亭主 何あら是はなさりませ。是じやと一足で七文又まて上ませうわいを 彌次 エ、馬のくつがえかれるものか人じらしる 北八 一足買なお目へ片ツ方買て。どうするつもりだ 彌次 又先よ行て片方買ふ 亭主 ハ、〜十四文又致しませう一足お召なされ 彌次 貴様とつくよそう云はひ、

トやうよとのとよてぞうりをとゆ 斯て此宿を打過早くも八丁繩手佐名毛明神をふしちがみ。今岡村の建場に至る。此所の。妹川と云面類の名物いたつて風味よま〜と聞て

名物のまゐるしなりけり往來の客をもつあぐ妹かはの蕎麥夫より穴生村。落合村を過行て。有松に至り見れば名よしおふ絞りの名物色〜の

染地家毎よつるし。りざり立て商賣賣ふ。兩側の見世より旅人を見掛てお這入く。あかたか這入。名物有松絞りお召なさせサアサア是へくお這入く。彌次エ、やかまじひやつらだ。

ほしむもの有松染よ人の身の油絞りに金に替ても。

北八

ナン、彌次さん浴衣でも買のねへか。彌次 おも入。見たをして。やろふじやアねへ

が北八 よかるふ。たんと買う顔をまて。なぐさんでやろう。トあちこちと見廻す内。此

なれ共染地色々表に彌次 コレ此絞のいくらしまと。ト云よ此内の亭主と見へて將基

つるしある内へ這入。ト云よ此内の亭主と見へて將基を差て居るがよねんなくうてう

てんと亭主 サアままつた時にお手の何ぞやいな。彌次 コレサ。こりやアいくらだと云

きりて。トすこしこの高に云。ハイく夫かお。彌次 いくらく。亭主 コウトあたいくらだと

とおつしやる。そこでのやうよ。致そかい。彌次 エ、小ぢれつてへ。コレ賣らねへのか。

直段のいくらたと云よ。亭主 ハテ儲やかましい人ぞや。そちらの方へ引替して符牒を

見せおされ。た、しれる物じやあいわるの。彌次 こいつのとんだ。商人だ符牒よ。ウの

見せおされ。た、しれる物じやあいわるの。彌次 こいつのとんだ。商人だ符牒よ。ウの

○亭主

眼光照

得兩個

之囊中

シとエの字が書て有亭主。サ、そうじやあろ。コウト三分五厘切ちや。彌次 高いくま

けなせへ。亭主 ナニ。まけいイヤあらまら。此手下將基に。將基の。治兵さんマア商あひ

をまよまぬか。あかた方が持て御座らつせる。亭主 好はいれ逆も敵等ひよう買やしよ

まいハテ買ひたうても金銀のわらまい。ない筈じや。わしが手よおはしまとじやて

彌次 何だべら棒め金銀が有まい人を見くびつたことを云アがる有から買ふ是のふん

どし丈て幾等だへ。亭主 何ぞやふんとし買ふ。イヤぶしつけせんばんお。彌次 こいつの

かいらを。てうしやアがる。賣物買物よ無駄も何もいる物か鼻つたらしめが。ト大死

る。亭主はつと心付そう。へい。是の粗相申ました。何なとまけて上ませせよ。お

召下されませ。北八 そう云あさりやア。しこまた買つて上せり。彌次さんお前へお袋

や。かみ様への土産に。あれがよかるふ。いくらだの。亭主 へい十四匁八分でお升。彌

次 ツレそつちらのは。亭主 是の十五匁。彌次 もつとい、のはねへの。亭主 あり升共へい。是

があるア甘壹匁づ、こちらが甘貳匁。下のが十九匁宛てね坐り舛。彌次 もつと是より

い、のがほえぬ 亭主 イヤ最う皆かやうな物でお座り升 彌次、そんなら大事な事なぞ
 つて置な誰が買ひやしやうわつちやアいつち初手に見ておるた。此三分切を手拭
 丈切てくんなせへ 亭主 へイ左様かな ト肝を潰し二尺五寸切て出せ どんだやつらだ
 そでにいひ三太郎にしようとしやアかつた。肝をつぶさるハ、時よ六分道くさを
 した。ちと急るでやり掛よふ ト是より道を早め行程よ早
 旅人のいそげ七汗に 鳴海濱。こゝも絞りの名物なれば
 斯よみ興きて田ばた橋を打渡り笠寺観音堂に至る。笠をいた、さ賜ふ木像なる故よ
 此名有とかや

執着の涙の雨ふぬれととや。笠をめぐしたる観音の像
 夫より戸部村山崎橋仙人塚を打過。やうやく宮の宿よ到りし頃。早日暮前よて。
 棒鼻より家毎又客をと、むる出女の聲姦し。あまた方アお泊じやおませんか。お湯も
 ちんと涌ておます。お合客のれません。お泊りおされませく 彌次 泊の何方しよう。

銭屋か。瓢たん屋の 北八 向ふの内何だ鍵屋か 女 モシお泊りかな 北八 ナイ泊やせう
 旅籠のいくらだ 女 ナホ、くくくようおます。お泊りおされませ 北八 何だいひか。只で泊
 るか 彌次 虫のい、ト笠を取て這 ね湯をわけうす。お足がよされて。なけらよや直に
 お風呂へお召なされませ ト荷物而坐敷へ運ぶ。此内彌次郎北 お茶あがりませ 按摩
 お療治をさされませぬか 北八 療治もしてへが。マア腹がへつた 彌次 うどんでも喰て
 きや。こゝの名物だ わんま 左様から後に來ませせ 立て行跡より二三人連 ハイお
 泊でお坐り舩か是の當驛の御は子様。手水鉢建立お心ざしをお頼み申 彌次 ハイ北
 八。そけへ上てくりや 北八 是の少しながら ト銭八文出してやると帳に ハイ私ハ六
 十六部で石碑を建舩。お心持次第お施主よ。つかつせへて下されませ 彌次 何だ石塔
 の施主よ附。いめいましお事を云て來る。ソレ持て行なせへ ト同八文をうり出して
 亭主 ひよくり 彌次 へ、又八文か貴様の何の建立だ 亭主 イヤ明日のお船で。お座り升
 顔を出せば 又佐屋廻をさされ升か 北八 直よ愛から船にしやせう 彌次 船の好が。おいらア。ど

うも船でいなせか小便をさるがこはくて。ぞしてねつから出ねへよこまる。七里乗
と云もんたから。こらへてい居られせ。どうし物だるふ。佐屋へ廻るふかノウ北八
亭主 イヤ夫よよい物をわけうせ。左様のお方にい私しぐいつも竹の筒を切て上
から。夫でお小便をさるがようお坐りませ。彌次 そんなら夫をお頼みやと。亭主ハ
イ〜先御膳をわけう。ト立て行。此内女膳を持て来る。こ、よても色〜旦那方致
ましよかいた彌次 サアやらかしてくんなせへ。ト是より彌次郎あんまにもませる。此
さみよ三味線を出して。花もうつろふ仇人のうはさも戀と岩代の結び服紗のときを
伊勢音頭を唄ふ聲をさる。花もうつろふ仇人のうはさも戀と岩代の結び服紗のときを
解ハリヤサ 能〜能どなア。ツテ。北八 イヤ。こい。い。聲だナントあ
まさんわし。踊が上手だお前へ目が見ぬるとあの唄で。一ッ踊ッてみせてへも
だがなア あんま わしもときだがなア。おどらッせる。音をさかアせ。一ッやらつし
やらまいか 北八 やるい。やるふが。ほめて貰いにア張やいがねへから。こうしやせ
う。わしが踊りままつた所でお前への頭りをちよんと。撫ようから。夫をさつ掛に。や

○ 蘭 討

んやアどはめてくんな由かくツレ踊ぞ
隣の唄 解ぬ思ひの二ッ箱三ッ四ッいつも。
泊船夫が苦界ひの行違ひ。ハリヤサ。三
味線よ合せて北八手を。北八能。三
た。き踊るまねをして。北八能。三
能ヤさア。ト踊仕舞座頭の頭をちよ。ヤン
ヤアゑらい。ハ、ハ、ハ。北八能。何と面
白かるもう一ッやろるか。又隣。差手引手
に私何所迄も浪の浮寐の梶枕。北八能。ヤンヤ
よいやなア。ト又足て座頭。按摩。ヤンヤ
北八 ハ、ア面白。ト此内。宿の女。お湯よお
召なされ升。北八 彌次さん最ふまめへか。
まめへなら。湯よ入なせへ。按摩さんが踊



○ 仇討

とほめて呉さ替りよ。是からわつちも。もんでをらふ。彌次ドレそんなら這入てこよ
 ふ。ト彌次郎の湯入入に行。跡又あんま。時旦那方のちと當宿のお鶴でもお呼さ
 れ。北八イヤ夫よりかア。隣りの三味この、の娘か何人だの。あんま。われは二三日前の
 ら爰の内泊りて居る替女でお舛が。能登だなもし。まかしまんだわしがじんくを
 旦那方へ聞せたい。北八コリヤ善るふ。やらかしねへ。あんま。其替りもしもわめてが
 けらにや。張合があい。唄ひしまつたら旦那やめて下さるか。北八ナット承知く
 あんま。ドレやりからかさふ。ト北八がつむりをもみながら。あんま。ジャンくエ、
 く酔たくく。五夕の酒は壹合呑たら様またよかる。ト唄ひさして北八が耳中の
 こいつがさい前。我が頭を足げよひろいだ。そつげ野郎め。かつたい野郎め。うぬがよ
 赤野郎のろくでい行まい揚くの果よの首でも釣じやろ。ト云さして耳の穴よりおび
 あんま。やとさのせく。北八耳の穴をふさがれてうぬが。北八。ヤンヤく。あんま。ジャ
 くジャンく。ト拍子と係つて北八が頭とびし。面白く。わんま。最一ツやろうか

○ 色無
眼兩個
替女何

○ 是豆
盗人

ぬな 北八 イヤモウ御免だ頭がたまらぬ。わんま。ハ、くろふ面白かつた。此内彌次
 り揚り此の様彌次。和尚もつとやらのしねへ。北八。イヤおいらいもう湯は這入て。こよ
 うあんまさん。最ういひよよ。トいひそて風呂場へ行。わんまの暇乞して歸ると。宿の
 かける此内北八風。女床を取来り布團を敷て勝手へ行彌次郎の早其儘ね
 呂場より歸り来て。チャ彌次さんもう寝掛たの。時にお前へ隣り座敷のしる物を見た
 かとんだうつくしい替女だ。彌次。替女なる眼があるめへ。北八。眼のねへが。まんざらじ
 やアねへ。今湯から揚つてくる時。一人の替女めが手氷場にまこつて居たから小
 當りよゆたつて置た。中くやばでねへしる物。彌次。ドレく。ト這起て乗出し襖
 ハ、ア後ろ姿の中くいきな風俗だコリヤア。此ま、でいおかれぬはへ。北八。イヤそ
 ういならぬ。トい、つ、夜着を引かふり心は内よ。おのれ今又這掛てやろうし。わ
 二人の替女も寐た様子夜も。コナン。ト彌次郎そつとおき上り見をば北八の本と
 玄んくど更渡り後夜の鐘。コナン。ト彌次郎そつとおき上り見をば北八の本と
 襖をそつと明て隣座敷へ這入見れば。替女二人の前後もしらき寝入はあ。彌次郎ど
 ぜのふどころ這入らんとせしよ。さすがの眼のみる物とて用心きびしく風呂敷
 包を両手よまつかり抱て寝て居るゆゑ是がじやまよ成て這入よく、彌次郎そろく
 此風呂敷包を取のけようとする。替女目を覺し片手に包を抱へ片手よて彌次が手を

くつとごせぬと盗人よ〜ね宿の衆〜トわめきちらされ。彌次郎のあてか違ひ橋畔捕へて。女が手をた、きはちして早々にこあたの座敷へ歸り。夜着をかぶりそしらぬよりして警て寝て入。北八のどくより目を覺しくつ〜と笑て居ると此内勝手より亭主かけつ。警女様どうさつせへましたごせ。わしが此抱て居る包をいんま。たれやらどろふとしかりました。雨戸でも明て有か見てくきなされ。亭主イヤ何所明ていひありませぬごせ。夫でもいんまの盗人の何所から来りましたらうか。亭主ハ、ア襖か明て有モシ〜お隣のお客様方およつて御座らつせるか。彌次ア、ウ、ムニヤ〜亭主ハ、アこに落て有の何じヤ。イヤふんどまじやそらな。モシお客様方はいあなた方のでいお座りませんか。ト大きき聲するよ。彌次郎のはつと思ひ。そのと頭を上げて見れば。わ故おかしさもおかしく。さすがおれがのた共云はれ。我枕元迄長く成て落て居るまもじ〜して居ると北八態とみぢ悪くおき上り。何だへそらぞらしぬ。ふんどしが落て有のドレ〜。夫かコリヤ彌次さんお前へのふんどしじやアねへか。彌次エ、あざけあいとをぬかしやアがる。ト北八が夜着の袖を引。亭主もさてい。イヤ最ふ旅のどでおざり丹から。おたがひよお氣を付て御用心さるがよい。警女様。もうお

休なされごせ。さみがわるくて寐つかれませぬ。よふめて行て下さりませ。亭主左様あら。トそこら立廻して出て行。彌次郎をつと手をのほし。てふんどしをたぐり寄と北八わかく吹出しなから。警女どのと思ひ込し。是もまた。戀よ目のなき人よこそあれ。すでに夜もいたく更渡れば皆〜ようやく一すゐの夢を結あかつきの風樹木をならし浪の音枕よ響て。つさ出ず鐘よおどろき目覺て見れば。早明方の烏カア〜馬のヒイン〜長持人坂ハなア照々ナンエ鈴鹿のくもる。ナアレ〜どつこひ〜船出を呼。舟が出るヤアイ〜。此時宿屋の女。モシいんま一番舟でお升。御膳を上ケまふ聲。彌次。ナイ〜北八サアおきや。ト二人のあき出て手水遣ふ内膳も。お支度いようしよ。おざりませるか。船場へ御案内致しませ。北八。夫の御苦勞サア彌次さん出掛やせう。トこ〜に支度えて表の方。御機嫌よう又お下りに。彌次アイお世話又成やした。ト暇乞へ出掛る宿の女房。女。愛迄送り来り。船頭衆お二人様じや頼み升を。彌次時よ忘れた御亭主さん夕べか約束の彼小便の竹の筒。亭主。ホンニ。ちんときらして置ましたよ。ドリヤ取て参りしよかい

れたれ。船はつゝ、がなく桑名へきた目出たいく〜ト皆く是より上りて此宿
よよろこびの酒汲かはしぬ

○五編

宮重太根の。太老く建し宮柱は。風呂吹の熱田の神の慈眼す。七里の渡し浪のたか
よして來往の渡舟。おんなく桑名に着たる。悦びの余り。名物の焼蛤に酒汲替して。
かの彌次郎兵衛喜多八なるもの頓て爰を立出。たどり行程よ。此頃旅人のうたふを
聞けり。流行唄。時雨蛤士産にさんせ。宮のお龜が情所ヤレコリヤよチしくよし馬
士コレ旦那衆戻り馬。のらんせんか彌次よチしよ老馬士安ひに。たんだ百五十でやら
まいか彌次よヲしよし北八せうろく四文で乗べいが馬士其様よチせよせ馬ヒイ
長持人足舟のナア追手帆掛て走るナンエ早くサア熱田泊りたやナン。アエ
八兵衛どうした馬でも呑だ。何ごのはらねアどつこるく北八何と彌次さん何も
なくさみだ。こうまようじやアあいか。おめへの荷物どわまがのを一ツ所にまて
人か引のついで。半日替り旦那と家來の。まうちりどうぞう彌次コリヤ面白へ

夫よかるふ先己らから旦那を始めるぞ北

八そりやアい、が今日は最ふ入ッぶから

七ツ替りにしやせう。勿論旦那と供のわ

しらひは。たがひよ番くるのせなしよや

らかしやせうせ彌次おれたとよト云つ

り又竹壹本をさいかくし。彌次郎が北八

荷物と北八が包を兩方に縛り付て

先づ年役よお前へ旦那よ。おいらは上下

と云もので出掛よふ。ナントよつやど氣

がきひて居るだらうト跡から荷を北八

モシ旦那へ彌次何だ北八能天氣で御座り

升彌次チ、其風がなごで暖たかだ北八左
様で御座り升トのりにまをうの。如く打
かたりつ。行程よ早くも



○彌次
之白粉
好今不
始温飽
粉尙愛
之

大福村。安中村を打過て。町屋川よ
差が、れば。彌次郎兵衛取あへせ
旅人を茶屋の暖簾に招かせて。登り下りを待屋川かき
斯打興じて。名尾村おふけ村よだどり着。此邊りも蛤の名物旅人を見掛て火鉢の
灰を。あふぎ立く女。お這入さざりませ。諸白もお飯も御座りませ。お支度ささ
りませく。駕いかまひかひな。是から二里半の長丁場じや。安うして召ぬか
い彌次イヤ駕の入りぬ。駕の親方旦那を乗せ申して下んせ。戻りじや。やすめよ。北八
旦那。おひろるがおすきだ。駕。そふ云々と。モン旦那安うしてやらまるかひや。彌次
安くてのいやだ。高くやるから乗やせう。駕。したら高うして三百もただきましよか
いな。彌次。いやだくもちつと高くやらねへか。駕。ハアさんだ安なるなら三百五十で彌
次。壹貫五百斗あら乗てやるふが。駕。エ、めつそふな。わしとも、商賈冥利。そあるよ。
やつと。いた、かれませぬ。せめて五百で召て下んせん。彌次。夫でも安ぬから
いやだ。駕。ナア。安ぬこんでいあらま。そまたら別れよ七百くだんせ。彌次。イヤく

○此邊
安房習
嫉妬何

面倒だ。何かさ壹貫五百よりまからぬ。駕。はて惜こまつたもんじや。夫よりち
つともまからまいか。彌次。まからぬ。駕。エ、何の事じや。駕。かきの方から。直下る
と云いぬ。ま、よ。棒組壹貫五百でやらまるか。サア旦那召ませ。彌次
夫で好か高く乗てやる替りに酒手をこつちへ貰はよやらぬ。合点か。駕。上ませ
とも。彌次。そんなら先へ行て壹貫四百五十文こつちへ酒手に差引て残五十の駕賃だ。
夫で承知かどうだ。駕。エ、そんなこんで。あらせ。どひやうもあい。彌次。そこで先線切だ
ハ、北八。こいつ旦那が出来た。旅人を乗るつもりで駕のきの。高の直段よかつがれに計利
斯て朝飼川松寺を打過。富田の建場に至りけるに。爰に殊な焼蛤の名物。兩側よ
茶屋軒を並へ往來と呼立る聲も引れて。茶屋よ立寄腰を掛ると女。お早やう御座りま
した。茶を二ツ汲て来る。彌次郎へ差出す。彌次郎旦那の。北八。支度、好か。北八
東あれば供の。宜しう御座りませう。コレ女中お飯を二膳出してくん。女。ハイ。蛤

でお上りなされやぞか 彌次 イヤ箸で喰やせう女チホ、
 笠をつかみ込め 彌次 コウ酒の好のが有かの。まかし諸白でいなくて片白よそこ交る。
 をぎ立て焼く内 彌次 として江戸じやア厚味へ物の喰飽して居る體だから。道中の物の。ねつから喰ぬ馬に
 乗ハ浮雲し駕り頭がつかえる。店の者共がね宿の駕をお釣らせなさるがよふ。御座
 り升と。言居たが。成程そうすればよつた。ぶせうして乗ば乗もの。もふく道
 中駕より。あさはてた。北八 是からあるて行く善草履があらば買てくりや。はき
 つけぬ草鞋でコレ見や。足中が豆だらけよ成た 北八 ほんよなア今日初て草鞋を。お
 はきなさつたなら古ひあかききか再發した 彌次 とんだとを云是のあんまり足が。や
 はらかたのら草鞋の紐が喰へ込だの。ヤ時よ 蛤を女 ハイ只今上ケ升 大皿又焼
 さねて出い飯を二 北八 コウ彌次さん見させへ色男の違つたもんだらう。コレく
 膳持来てすえる。この娘がお前への飯の些と盛ておるらがの。此通り山盛。餓免道の一里塚と。云も
 んだ。ア、厚味く 彌次 へ、べらぼうめアノ娘が杓子當りの能の。やれたのだと

うれしがるもおかしい。ソリヤア手めへを。やどくどるのだい 北八 なせく 彌次
 べて此街道では上下の者や供の者への飯を山盛にして出すと云とだ。夫だから誰が
 目よもわれは旦那手めへはれ供と見へるから 北八 ハアそうか。いめへましい 彌次
 、、蛤を持とくんなせへ女 ハイ 又焼立の蛤大 彌次 お前の 蛤ならなを
 味のろふ ト女の尻をち女 チホ、、旦那様。ようやたへてじや 北八 おれもほた
 へよふ ト同じ尻をつめ女 コレよさんせとかぬ人さんじや 北八 どふでもおいらをを
 安くしやアがる。 たり寺の鐘かコラン。 北八 女中あれは何時だへ 最ふ七ツで
 御座り升 北八 しめたく約束の通り。是からあれが旦那様だコリヤく 彌次郎兵衛
 おれは最ふ馬よも駕よも乗あさた。是からそろくひろぬせう。い、草履と買て
 来やれ。はき付ぬ草鞋でコレ見や。豆中が足だらけだ 彌次 馬鹿を云。成程手めへは
 足だらけだ。一つの足がくつよも割て居るから 北八 イヤ旦那に向つて手前へとは
 何の事だ。此荷物もそつちにやろふ 彌次 ハテ現金ある男だ。マアそつちよ置やれ 北八

○自_二蛤_一
方_二入_三千
懷_二彌_一次
雖_レ貝_ト悅_ヒ
可_レ知_ル



イヤそうのならぬ。トつきつけるを。彌次
みよ蛤を盛てある血をひつくり翻と様子
よ。焼蛤が彌次郎兵衛のふところへひよ
いとほ。彌次アツ、く、く、蛤の汁が翻
てアツ、く、北八ドレ、く、ト懐中へ手
摺北八アツ、ト取落せば。蛤臍の下へ
股引の上から金玉彌次ア、アツ、コ
と蛤を一所摺む。ト云うち
リヤどうする。金玉がこげらア、
股引の前の合せ目を廣げ北八ハ、ハ、
ると蛤ははつたりと落る。彌次
先の御安産でお目でい。彌次まやれ所じ
やアねへ。とんだめあつた女おけがは
御座りませぬ。彌次けがはせぬが。まだ
腹の内がびりくする北八ハ、ハ、ハ、ハ、

膏藥はまだ入らねども 蛤の焼ども附てよむたはれ歌

夫より此所を立出。初村八幡を打過。七ツ家わくら川に至りし頃。四日市の宿引出
向ひて是はおはよう御座り升私しお宿をお頼みヤ上升彌次。とつちらア帶屋へ行やそ
宿引 イヤ今夕にお大名様。お二頭お泊で帶屋を兩家共。お差合ひで御座り升から。私
方にお泊下さりませ。ト云い。うそ也御小身様のお泊で下宿い。わづかあれ共夫を云た
と思。彌次。そんなら貴様の所い。くらで泊る。宿引。ハイ夫い。かやう共。彌次。夕へい宮
の斧屋よ泊つたが。とんだ町寧ました。百五十で燭臺を附て飯を喰せるが。そして酒
も菓子も出したから。コリヤアだまつても居られめへと別茶代を二百遣るつもり
の所。やつ張やらんだから大きよ安かつた。貴様の所も其つもりで馳走をるが。ハ、
宿引。かしてまりました。ト段々咄あがら打連て行ともなし。四。サア是で御座り舛。
コレお泊様。女房。ればやうお着なさいました。ト挨拶の内。二人の草鞋をどきな

よ合また北八 なせく 彌次 湯に入あがら最ふ女が来るか〜と思てあんまり長湯を
 またから北八 夫で湯氣よ揚つたかハ、〜ちる乃ねへ咄した彌次 手めへのおかけで
 まだ足がひよろ〜する北八 ハ、〜こいついおかし。サア立あ〜トやう〜
 せ。北八が肩よ引掛け座敷よ連て歸る彌次 ア、〜今少しはつきりした北八 おめへ
 と。其ま、たをれてさモ力あさそうよ〜
 も。とんだ者だ、かげんにわがれをい、よ彌次 イヤおれも手めへの云たとほり大
 方女めが。来るだろふと待た程よ向ふの流しよ彼年増らしいやつが。何か洗つて居
 るから。コレ脊中を流して下せへと云ら。ハイト云て六十ばかりの婆、アめが。
 たわしを持って来やアがつてお脊中を洗ひませうかと。ぬかしやアがる北八 こいつい
 い、ト夢中よありねはらをついていながら。足のゆびよて跡の方よねあろんで居る田
 舎者の耳を引張たり向かして。もちやとびにする此田舎者どんだ氣のい、男よ
 へ頭をよけると。北八 夫からどうした彌次 聞てくれ。おれもあんまりおう腹だか
 ら。いまく〜しい婆、アめだ。たわしを持ってどうしやアがると云た。ハイト〜と
 ぬかして引込だ。頓て又庖丁の折たのを持ってうしやアがつた。是でお脊中の垢を

こそげおとして上ヶませうかと。おれを鍋か釜のようよ思つていやアがるそうない
 まく〜しい北八 ハ、〜こいついなかした〜ト夢中になつて又田舎者の頭を足よ
 へ兼て北八 田舎 コレ〜最前うらだまつておれを。なんせ此足でわしが耳をあぶ
 り者よさつせへたト云はれてハ、イ是の御免なせへ 田舎 インニヤ情御免では承知あ
 らまいわい。夫もこなさんが夢中よならつせへて咄しさつせる。手そぶりよやアわ
 らまいとでもあいが。こつちで頭を除ようどとると。又足で探回いて。なぶり
 ものによつせる。なんせ人の頭ア土足に。つ、掛さつへせた。そまない〜彌次
 リヤお氣の毒なとた御免なせへ。此ようよお合宿するも他生の縁とやら。どうぞ了
 簡してやつて下さりませ 田舎 こんだが、そふ云はつせりやア。聞かまい者でもないが。
 あんまり人を馬鹿よさつせるから北八 イヤ最ふ生酔だから。堪にえてくんなせへ 田
 舎 イヤまんだ。こちさんわしとをも馬鹿によつせる。最前から見てをるに酒も吞さ
 いで生酔ひとを猶しやうちあらいわい北八 はてわつちは。酒を吞やせぬが。此足

〇一休
問答ニ曰
上足ヲ曰
下戸ノ足
如何

が生酔だから田舎ナニ足が酒を呑もんか。馬鹿アつくさつせるか。北八 おめへ大分わつく成の。足が酔たと云は先刻焼酎を吹掛たから。夫よ此足めが酔くさつて。ソレ御らうじろ。ひよろりく。アレまだお前への頭よからかをふとする。コリヤくく田舎本よこなさんの足は悪い酒じや。北八 左様さ足は下戸の足が能う御坐りやぞ。こつちのまともこまらばてる。田舎 そんなら能う御座る。最ふ寐せらまいか。女中く寐床ろを頼舛ト此内女さたり夫くよ床を取寐かそと田舎者二人は。そこへころげ當る文句も様々有と。此所と飯時の洒落のつとははまよ。北八 實に手めへ先刻の女と約束をしたが。北八 されたとよ然しこつちへい來ぬつもりだ。此つぎの間の壁をつたわつて行と。いさ當つた所の襖をわけろ。そこに寝て居ると云居たのら。今よ行ぬならぬ。彌次 おまが先へ行てやらう。北八 そねままど。早くねなせへト後ろを振向る。彌次郎も北八がじやまをして遣らんと。寝入し振して考へて居る内二人共。旅づかれよや思ひまどやくと一ト寝入し。しばらくすると。彌次郎ふと目を覺し見ればあんどろ消て真くらがり。あたりもひつそり。しづまりたるに。自分はよしとぬけかけし北八は鼻ゆかせんと。そつと起き立。さし足よて次の間よ出。兼て聞置たる通。



ハ
〇
ハ
ハ
ハ
ハ

さぐりく壁をつたひて行内。彌次郎兵衛余りよ手を上へのぼしたるよや。釣たる棚板よ手がつかへると。どうしたはづみやら。がたりといつて棚がはなれたると見く彌次郎大。こいつはへんちさだ。あんなまりおれが手をのをしたから棚板がはづれたそうな。手をはなしたら。落るであろふし。何かからくたタ。しと玉わけてある様子落たら皆なが目を覺そろふ。こいつの難義が目よ合たト両手を棚よて居てもねからつまらさ。手をはあせば棚が落る。襦袢一ツて寒は成るま。コリヤなさけなる目よ合たどうぞ仕様は無いかと。立はだのつて考て居内。斯く共知を北八も目を覺しおき出。是も段々壁をつたひくる様を彌次郎。夫と透し見て小聲よ成。北八のく。北八 誰だ彌次さんだの彌

次 コリヤ静しづかま〜早くこ、へ来てくれ 北八きたはち 何なに〜 彌次やじ 是こゝを鳥渡持とりわたてくれ。こ、だ
 く 北八きたはち ドレ〜 ト手を延のして。何かいぢら落おか、つた棚たなの下したをおさへると。彌
 次やじ 郎らうのそつと手てをはなし北八きたはちも持もせて脇わきへばづしたるに 北八きたはち か
 きき〜 コリヤ 彌次やじさん せうするのだ ト手てをはさしそらよする 北八きたはち ヤアヤア
 コリヤ情なさけなぬめに合あせる〜 コレ 彌次やじさん。何所どこへ行いア、手てがだるく成なコリヤ最もふせう
 する〜 トらろ〜 去いて居ゐる。彌次やじ郎らうはくらまぎれそろ〜と先まの方かたへ。ゆぢこま
 て。見みればかの行當さだの傍そば一人寐ねて居ゐる者ものあるも。儲たくわへ北八きたはちが約束やくそくの代物しろもの
 人ひとたをれ居ゐり。さなら生なたる者もの共ども見みへせ。是こゝはいかに石いしの如ごとくひへこをりま
 こもよくるみて有ある。彌次やじ郎らうはつとどろきにはかゝ氣きみが悪わるく成なて。がた〜と
 ふるぬ出でしやう〜。北八きたはちが居ゐる。彌次やじ 北八きたはちまだそこよの 北八きたはち 彌次やじさんおめ
 へ何所どこへ行いた。コウ鳥渡とりわたる、へ 彌次やじ イヤそこ所ところではあゝそこに死しんだ者ものへ掛か掛か
 て有あから最もふ〜うと氣きの悪わるるひ内うちだ 北八きたはち ヤ、とんだとを云いふ 彌次やじ ナコサ本ほんどう
 に。アレあそこにア、とんだ内うちに泊とまり合あはせたとおそろしや〜 トそにう〜 北八きたはち 是
 々〜おれをこ、よ置おてどうするエ、夫それよとんだとを云いアがつて。どうやら氣きみが

○石佛
 持込色
 氣一所謂
 地藏馬
 者

悪わるく成なつたコリヤたまらぬ〜 トがた〜 振ふる拍子はつしに。手てがゆるみて上の棚たながく
 るたへて戸かどまどひを去い。一向いっわからせまどつく内うち。此物このもの音ねは勝手かたてより、亭主ていしゆの聲こゑと
 してわんど提ひて出でくる様子ようす。奥おくの間まより田舎者いんやものか出でてくるていゆえ。愈々いよいようる
 たへ。見みせの方かたへ這は出る。手元てもとに一枚まい有ありしとさいはい引ひのぶり。ヤア〜 コリ
 て息いきをこるし、みゐると。亭主ていしゆあかりを持もち出でてきもをつぶさ。ヤア〜 コリ
 ヤあんせ棚たなが落おた。膳箱ぜんばこも何なにもらりこくたんに成なつた。トそこら取片とりかた付つる内うち。何事なにごとやら
 てヤレるらる音ねがせると思おもふた。道理道理こそ。コリヤ地藏じざい様の傍そばに迄箱までばこ共どもが飛とちつて
 おるが。ヤアヤア〜 お鼻はなが打うちかけてしもうた。今いま一人ひとりの田舎いんやもの トリヤ〜 本
 に地藏じざい様の鼻はなア。なくならかひた。そこらよやなるか。イヤこ、よ寐ねて居ゐる。だれ
 しやい。ト扱あをまくれば北八きたはちのはつと斗とり。顔かほを上うて見みよとばよいこもふ包ふくし石地藏いしじざい
 八はちを〜 有りあり情なさけの彌次やじ郎らうか死した者ものの有あしと云いひ此地藏このじざいならんと思おもひ居ゐる内うち。亭主ていしゆ北
 八はちを〜 ヤアこなさんい。こちへ泊とまらせへたお客きやくじやないか。夫それよ今時いまとき分ぶん。かんせ此様このよう
 見みて。コリヤ合点がてんがいかんわい。どうじややら。こなさんたちの。ありとぶり。
 うさん臭くさむと思おもひおつさ。もしや護ごの灰はいやあるか。何なんぞま。まよしめるつも
 りか。有あり様よう云いつせへ 田舎いんや イヤ夫斗そればかしじや御座ごらる。大方おほかこなさんが。此棚このたなを落おし

たもんで。なんせ地藏様のお鼻ア打かいたコリヤわしともぐ村で今度建立せる。地藏様じや。さんのふ石屋殿から請取て翌日の早々長澤寺様へ納めにやならぬがお鼻



てうめんの旅人だ 田舎 インチ。そうぎやあらまい。又夫であけらにやア。なんせ今時分そこよ寐て居さつせへた 北八 イヤ是のウ手水に行どつて 亭主 戯けたとどつく

か打かけての持て行れぬ。元の通りまどわつせへ。是の近在の人々村のお寺よ納所おそなはりゆゑ。今宵の爰よ泊せ。ど見へたり亭主彌々やつきとあり。地藏様のお鼻もお鼻じやが。お前方のお荷物何ぞなくなりなせないか。どうでもがてんのいのぬやつらじや。有様よ云おりまいか 北八 イヤわしらんそんな者じやアぬへ。めつたあとと云おさんな。しらす

さまい。手水場は座敷の椽先よある物を定めし。宵にもいたでゆるよ。そあいな間似合の喰せんわい 北八 そう云れちやア。わつちも面目赤ぬが恥を云よやア。理が聞へぬ。有体よ云やせう 亭主 ヲ、サ。云ぬでどうせるもんじや 北八 イヤどうもおぼつかしいが。今頃わつちがこ、よまご附でおつたと。云ふわけの。ツイ夜道にきて此棚の落た。うろたへたので御座りやと 田舎 ナニ夜道よきた。イヤ早こなさんへたわけ者じや。何所の國よの石地藏様の所へ夜道よ来てどうせる積りじや 亭主 云ば云程ろくなとばぬのしおらぬ 北八 コリヤとんだ災難お合とだ彌次三〜ト呼び立る。先の立聞して。腹すじをよりの。たりけるが最ふい、時と立出。コリヤア何方もお氣の毒な。ありやアおつちが請合。うろんな者じやア御座りやせぬ。了簡して遣てくんなせへ。又地藏様の鼻とやぶがかがげたと云あさるか。どうぞおつちよ面じて跡では何共致しやせう。ト色〜茶らくら亭主も今の詮方なくさなから悪者共見へぬ手合。一ト通の云た者の今になつとくまて濟しければ。這かけえ地藏の顔も三度笠。またかぶりたる首尾の見るさよ

斯即吟の彌次郎兵衛が。狂哥に各々どつと笑ひを催ふし。やうくいさくさ納まりけるにぞ。いまだ夜の明るより。程もあらんと各々寐所へ這入りたるが。まばらく有て早一番鶏の告げ渡る聲々馬のいさき。表に聞へ彌次郎北八急ぎおき出て支度調へ頼て此宿を立出るとて

やうくと東海道も是からり。花の都の四日市なり
夫より。濱田村と打過。赤坂は差掛りたるよ。往來殊も賑はま。男女大勢こ、かまこふつどる集まりたる何とよやと彌次郎兵衛北八も片寄り行つ、ある親仁は向ひて彌次。モシ、何で御座りやす。親父。何れ見さつせへ。北八喧嘩でも御座りやその親父。イン子天蓋寺の蛸薬師様が桑名へ開帳に行しやるので。今こ、を通らせるから。彌次ハ、アなるやと向へ見へる。ト此内段々人足繁くなり。講中とおぼまき真先よて講中。なアまアだア。北八。蛸薬師様ア湯でたのむやアねへ生たと見へる。講中。なアまアだア。彌次のぼりを持って行くやつ顔ア見さしつ知恵のね顔だせ。講中。お賽銭

は是へく是の海中より芋畑へ出現んま給ふ所の天蓋寺蛸薬師如來御信心の方へ心持次第上さつしやりませう。サア、お心持の能ふ御坐り升かな。北八。今朝程に中がさで三膳程たべました。彌次。ソリヤ蛸殿が御座つた。ト此内みせしよ入たる。薬師如蓋寺の和尚。乗物にて來るとこ、かしこに。若侍。お十念。ト云と乗物をれろと。あつまりぬる婆々喚共十念をねかいけるよ。若侍。若侍。若侍の戸を引わければ和尚の湯で蛸の如き赤ら顔よて。大ゆをた。なむあみ。皆々。南無阿彌。和尚。南無阿彌。皆々。南無阿彌。ト云と皆々十念の跡ゆえ。皆々。ハアくつしやみ。和尙。ハアくつしやみ。是も口まねとる事と心得。ハアくつしやみ。聲にて。糞をくらへ。彌次。ハ、ハ、とんだ十念だ。ア、和尚。ハ、ハ、講中。あアまアだア。トさ、て行過る彌次郎北八いおのしく跡見送りながら。

十念をもふしあがらの口慰の。有たふ口ふ風を引せし
斯よみ捨て打興と行程に。早くも追分に至る。此所の茶屋まんぢうの名物あり。茶や女。お休みなさりませ。名物まんぢうの。ぬくといのを上りませ。おぞう煮も御座



りまアす 北八 右側の娘が美しいの 彌次
 屋の小ぢよくめらも相きやうらしい 茶
 屋に這入 女 お茶上りませ 彌次 まん 中も
 腰を掛る 女 今土ませう 盆 頓て
 やらかして見よふ 女 今土ませう 盆 頓て
 て来る此内金比羅参りと見へて布子の上
 よ白き單の半天を引張たる男同く此茶屋
 よ休み煮餅を喰掛る彌 次郎まん中を喰仕舞ひ
 幾位でも這入よふだ 北八 イヤお前へも雨
 風どうらんよ能かげんよしなせへし 金比
 羅 わなた方アお江戸かな 北八 左様さ 金比
 羅 私 もお江戸へ行ふ時 本町の鳥飼の
 まんぢうを掛とく迄て廿八喰たことが御
 座りましたが。又格別な物じや 彌次 鳥飼

い。わつちららが町内だから。前日茶受よ五六拾宛喰やと 金比羅 夫のゑらいおときと
 や。私しも餅ずきで御らうじませ。此がう煮をいさ無え五膳たべまえた 彌次 じつち
 やア今この、のまんぢうを十四五も喰たろうが。まだ其位にいけるだろふ。ねつから喰
 たらぬ様だへ 金比羅 イヤ然し悪あまひ物の最う其様にい上られ升まい。十四五もあ
 かりやア開の山に彌次 ナニまだ喰やと 金比羅 どう迄てくあなた口でいそうかつし
 やるが其様じ喰ぬ物じやて 彌次 ナニ喰ぬとが有ものだ。まかし費たのら喰やせぬ
 が誰ぞ喰せると。まだくいくらでも這入やす 金比羅 コレハ面白ハモシ無職乍ら何
 ど私しかお振舞やませう。もう夫丈上つて御らうじませぬか 彌次 喰やせう共 金比羅
 實し上らぬと。あきたのおたをれじやが能ふ御座り升か 彌次 そりやしれたとさ かつ
 乗てまんぢうを取寄て喰掛りしが十斗り喰て跡にもふおくびよ出る位さ 彌次 コリヤた
 れどおのれ金比羅鼻明せてやらんとむりよ押込み皆喰て仕舞ふ金比羅参 彌次 コリヤた
 まらぬゑらいくもうく私迄の。かないませぬ 彌次 れめへもやらかして見させへ。
 こんなちいさな。物のいくらでも喰れる 金比羅 イヤそうも参りませぬ。然し私しも余

り残念ぢ。十を斗と喰て見ませう彌次 ナニ十位二十喰なせへ。其替り一ツも残ぢ
 と喰ぢつたならい。まんぢうの代に勿論外は百文金比羅様へお初穂を上やせう金
 比羅 そりや有難てんばの皮遣て見ませう トまんぢう廿取寄せ只も玄く見て斗
 十を斗喰て仕舞跡のいやそうを顔付にてや ンりぬたりけるが頼て喰掛るとはつりく
 うくど残らす喰て仕舞彌次あてが違ひ コリヤ恐れる 金比羅 お約束の通饅
 頭代に差引てお初穂の百文下さませ 彌次 今上やせう。然しあんまり見ごとだから
 もう二十喰なせへ。今度のお初穂の三百文あげやせう其替り喰ねへと。こつちへ三百
 取つてだかどうだく 金比羅 面白い 何も故徳腹のさける迄遣て見ませう 彌次
 ア 今度の現錢だ。御前へも貳百さけへ出して置ませう ト彌次郎二百文をつき出し。
 百文は利を附て取氣ななり。よもや。もう喰のれめへと思ひ込で。饅頭をまたく二
 十取り寄せ金比羅へさめゆるやいや。此度の何のくとなくたちまち二十喰て仕舞
 ひ早くかの三百 金比羅 是の有難い饅頭の代も宜しくお頼申升。ハ、ハ、ハ、思ひ掛な
 るおざうさ預りました。ハイゆるりと是よ トお神酒箱を脊なよれひ。跡をも見
 て居北八 ハ、大方こんなとよあるうと思つた 彌次 いま〜しい。目も合やアが

○伊勢
 参預金
 比羅利
 生

つた。初めの百がおしく成て上乘をした。どう腹な ト此内下の方より駕 旦那方にお
 駕いらしやりませぬか 彌次 總所じやアねへ。ゑらぬめよ合た饅頭の喰ごつこをし
 て。錢三百只取られた 駕 今度の金比羅めじやな。てさめはあないぢ。ふうを
 してあるさあるが。アリヤ大津の釜七と云ゑらる手づま違ひじやげな。今中も坂の
 したて餅の喰くらで。七十八とやら喰たど見せて錢の人は拂はせ餅をば皆を袂へさ
 らひ込でうせおつたど云こんだが旦那も一盃はめられさつせへたのハ、 此咄の内
 の子供二人饅頭を三ツ四ツ宛手 一ハ旦那様ぬけ参り御はうしや 北八 コレ手めへた
 よ持て喰ながら此門口よ來り 一ハ旦那様ぬけ参り御はうしや 北八 コレ手めへた
 ちやア其饅頭を誰よ貰た伊勢参 一ハコリヤ此跡で金比羅参の人が袂から出してくれ
 ました 彌次 エ、そんならあいつめが。喰らつたど見せやアがつて。おいらをたま
 らかしやアがつたか。いま〜しい。おつかけて打のめをふか 北八 能いなおいふも
 神参りだ。かんよして遣りなせへ。皆あこつちか間ぬけだからよ。ハ、ハ、ハ、 彌次 夫
 だどつて。あんまり業が煮へかへる 北八 夕べの泊でわれをゑらいめよ合した其報い

だと思ひあせへ。ほんに能くうさらしだ

盗人又追分かれや饅頭の。あんの外なる初穂とられて

彌次 エ、面白くもねへ。洒落やんな。もしくまんぢうの代にいくらだね女ハイ

残りまで貳百三十三文で御座り舛彌次 せうとがねへトふせうくは錢巨那まん

直しに安く召て下さりませ 彌次 いやく 駕のさか 酒手で参りませう 彌次 資様酒を呑の

駕かさ ハイ酒のさきで一舛酒を下さり舛 彌次 又酒の呑くらしようと思つてか。もう

いやだくサア 北八で 出掛よふト是より伊勢 参宮道へ道人 神風や伊勢と都の分れ道ある。追分

の建場より左りの方の町をはなれて。野道をたどり行程よ。向ふより来る農業の馬

又横乗したる男肝張聲にて 見てもぬくとそふさコお方と寝たりや。ナア手織布

子一枚ねつこよつんぬけたア、エ 彌次 コ見さつしアノ向から乗て来る馬士を

おろして見せよふかト脇差をぐつとぬき出して差し。合羽の袖を前の方へ折て刀の

行 彌次 ナントどうだく 又向より横 晩泊りよヨ。いことをやめたナアなんせ行

乗の馬士

やらぬ裸でお方よ達りよかへナア、エ 彌次 こいつもおろしてやろうエヘン 馬士 シッ

トよはかようろ 彌次 北八どうだ奇妙か 北八 二本差を見ると乗打の出来ねへこ

たア皆まつて居らア 彌次 夫ざからおれを侍だと思ひかつて 北八 馬鹿ア云せ跡を見

あせへ侍か二人り参るから 彌次 エ、やんよかトふりかへる拍子 彌次 ハイ是の御免

なさいやし。神戸へい最ふどればと御座りやとぞ 此侍衆の此邊のソレ向ふの堤か

らぞつと空へあがらせると。もふ半道もわらせよ 彌次 ハイ有難御座りやと 北八 堤

よ

拔参りあらばぶさをも宇都部川。渡しの錢も假橋よして

夫より高岡川を打渡り。早くも神戸の宿に至る。入口は寶珠山火除地藏堂有り

安隠ふ火除地藏の守るらん。爰のあつさも冬の神戸も

○馬士
奈此鬼
鹿毛

斯て此宿端れある茶見せよ寄て休居たるに 馬士 モシお前方アおまよ乗て下んせん
 彌次 いか様戻りなら乗べい 馬士 上野迄戻る。おまよやせい。荷を付けて貳百五十下
 んせ 北八 二方荒神で百五十遣るべい 馬士 今日、梓を持ってあんわいの。爰から上野迄
 三里の所ぞや。白子へ登里半替りやつて乗ていかんせ 彌次 二人乗れよやア。いやだア
 馬士 したらお二人共。おまの鞍へく、し付けていこまぬか。此細でしめりや氣遣
 ひのあいがる 北八 どんたどと云。夫じやア煙草も吞れぬ 彌次 そんなら替りく乗ふ
 百五十でやるか 馬士 ま、よかし。やらかしましたよ
 彌次 たらアそろく先へ行ろ。ッレ 北八 右の方へかしぐ様ぞ 馬士 ヒイン 鈴の音しや
 んくくく 此内向よりきたる男。紺縞乃せんたくしたる引廻しを着て錢壹貫斗
 ヤア主やアぬし上野の長太じやないか。今主がとこへ行た戻りじや。えいとこて行合
 た 馬方 長太 ハア權平治様かいある。コリヤ扱わしや面目があるがな 權平 あろまいく。わ
 る筈があるわい。晦日くよ戻と筈ぞ。まんだ。びたせん壹文もいこさんぐあ。とふ

しさるのじや。ソレ聞はい 馬長 マアくこちへ来て下んせ 此馬士借金のとわりと
 の能き所へ伴なる。れのきも馬士長 そなるよ業煮らかいて。くだんすな。マア爰へ
 土手の上よゆうくと腰打掛 腰掛けさんせ。イヤそこのねさに。犬の糞がある今日おいでると。まじ居つたら。
 そうぢして。おこものコリヤく權平様へ茶など上んか。酒かふてこいと云所じや
 だ。こ、は大道中で夫もでけぬかい 北八 コリヤどうする早くやらぬか 馬士 ハテせは
 しい。些どまたんせ。いんま大事のお客がある。儲マア聞いて下んせ。去年の冬か
 ら肉の喰めが病氣を煩らひあつて。かき共よは。せちがはれる。雜役よさへ出やせん
 者を何じやろと。こうきてくだんせ。四五日の内よは。ひゆつとこちのらもて參が
 な 權平 イヤまやうちならんわい。そないに云ふても能ふ戻しやまよまいがな。大事
 無く最ふ三年越と云もの貸た錢じや利よ利か喰て二十貫余りと云ふもんじやも
 の。んことなく。その替りわのおまを。取ぬのかい。ハテまよかの時ハ。のしがあ
 まを渡すと証文に書たじやないか。したら云ひ分ありやしよまいがな。サアく

おまの上る旦那様いんま開んと通りじや
 借錢の替りよ。受け取つたおまじや。ど
 うぞこ、からありさんせ氣の毒なから 北
 ハアおいらも先刻まのら。じれつ度て
 あらなんだ。ひよんち馬よ乗合せたり。こ
 つちの不仕合然ままだ錢は遣らど。是迄
 乗を徳よしてドレたりて行やしやうか
 〔トかの權平よ口を取らせて馬〕モシ早那
 〔からありると馬士かけよつて〕
 お前がかりては此お馬を取れる。マア乗
 て居て下んせ 權平 イヤならんじい 馬士ハ
 テどきいにもするわいの。旦那をおろし
 ての氣の毒な。サアサア召て下んせ 北ハ



又乗のかまつかり頼むト北ハ又馬よ乗ばコリヤ〜長太どうしとるのじや旦那
 ありて下んせ 北ハ エ、又あるすのか。イヤ貴様たちやアおれをい、ちやうど棒よ
 する。おろしたり。のせたり。足も腰も草臥はてた 權平 夫じやて。わしがおまじや。ど
 ふぞかえ。ありて下んせ 北ハ エ、面どうだト小じれがきで馬士長 そて借下さんせ
 せど能がさ。コレ權平様こうして下んせ。わしも途中じや。よまことがある。せめて
 内へいぬまで待て下んせ。其替り。あ、で此布子を渡すよ 權平 そしたらいんでわけ
 つけるか 馬士長 もう能はいサア旦那召ぬかい 北ハ ナニ又乗かもふ堪忍してくれ。お
 らア是から歩行て行ふ。何ちら少々錢と出しても乗とアいやだ 馬士長 其云んせせ
 と乗て下んせもう能かなサア〜ト馬の口を取てぞ、ひるゆ 權平 サア約束乃布子
 脱まいか 馬士長 イヤそまいよ云たもの是も内へいぬまで待て下んせ 權平 イヤあの
 れ。もう了簡あらんわい。サア〜旦那又ありて下んせ 北ハ エ、此唐人めらア。又
 下りろとぬかしやアがるか。もういやだ。サア早くやらねへか。どうしやアがるの

馬士長 旦那そらのはやく。ありせと能。權平 イヤありせとゑいと何でぬかそ。眞
 黒にあり馬は取つきかける所を馬士つきのけて。馬の尻を思ふさまた ヤアイくた
 とき立ると。馬の一さん掛出せば北八上よて眞青なり大聲揚て
 そけてくれ。コリヤとふとる。權平 馬をよがしていならんヲ、イ
 大事は馬の鞍は取付ても馬のやみくもよ走るゆゑ北八飛あり
 様として鞍の繩は足が引掛りまつ逆さまは落腰の骨を打 ア、いたる。だれ
 ぞ来てくれ アイタ、ト一人もがきてくるしむている モシ旦那あけがら
 のかな トリヤ ト手を取て引おこす内。權平の馬をどらんとかけぬける馬 北
 八、イまちやアがれ。おれをばひとめめに合しやアかつた ト小言を云ひながら
 詮方なく。おつかけんより足腰がいたみ。やうくの事よて踏しめく。とたどり行きッ、
 借錢をおふたる馬に乗合せ。ひんそりやとんどれとされにけり
 行程なく矢場瀬村と云よ至る。彌次郎兵衛の神戸の宿端れより先へ來たるが。あの
 馬のいさくさをも。露しらす余程先へあつたるを。ふぎぎと思ひこ、よ待合はせたり
 たるか。夫と見るより 彌次 ヲヤ、北八其形はどうしたのた 北八 イヤもう咄よもな

らぬ飛ために合た トさいせんよりの一五一十を咄せば。彌次郎おかま。さいはひ
 權五郎ならねど馬士のいつさんにおつ掛てもく掛取の海
 夫より玉垣を打過。白子の町に至り。福德天王をふし拜みつ。子安観音の。わかれ道
 よて

風を孕心沖の白帆は観音の。加護よやすく海渡るらん
 此宿を過て磯山と云よ着。此所は吹矢の色々飾り付けたる。小見世の親父往來
 を見掛てサア、おあぐさみにやてかんせ。外題は忠臣藏十一段つ、き。ソレ吹か
 んせ。ヤレふかんせ。お當なるとたちまち替る。新板の上細工の是じや、北
 八、ア何だ勘平おゐる。魂膽夢のまくら。イヤこいつは。やらかして見よふ ト吹矢
 入ッウ、引カチリ 彌次 何だゑらい松茸が出たコリヤおかしい。ハ、ハ、ハ、與市兵
 衛子ゆゑの闇の夜。何が出るさう。フツ、引カチリ ヒヤア見越入道
 ハ、ハ、ハ、向ふの何だ。北八彼方へ寄や ト引のける拍子ふ足元よ、犬キヤアン、彌
 兼て居る犬の足を踏む、キヤアン



次此畜生のト吹矢の筒までくらはし逃
 彌次 アイタ、うぬ打ころぞどくろはづ
 みよ。どつさりところげ彌次ころんて
 たそばは落て有煙草入トひるぬ
 も損のいかぬ。こ、に煙草入がに掛るど
 向側に居る子供が糸を引とエ、いさ
 煙草入のぞるくくくエ、いさ
 くしは一番はぐらかしやアがつた子供
 あはうよッハ、北八こいつの能業晒し
 だ。サア行やせうト吹矢の錢を拂ひ出掛
 落て有北八ン彌次三又拾はねへか彌
 次イヤもふ其手ば喰ぬ。アレ跡からくる
 親父がひるゐるだるふ。ト行過てふり
 よりくる親父。かのさせるを拾ゐて彌次
 ふどころに押込さつくと行過る

ハアだまきでもなかつたそうな北八ハ、お前へおうさよ問が悪いせト打笑ひ筒。
 上野の宿に至るこ、よ此邊の人と見へ羽織ばつちにて小卒爾ながらあきた方アお
 野郎を供よ連たる男跡より來たりて彌次郎兵衛にかけ付
 江戸で御座り升か彌次アイ左様さかの男私しハ白子の先から。あきた方のね跡につ
 いて参じたか。道々の御狂詠を承りましておよばせながら。感心致ました面白いと
 で御座り升彌次ナニサ。皆出放体で御座りやす男イヤ驚き入りました。先達てお江戸
 の尙左堂俊滿先生など當地へおゐて、御座りまえた彌次ハア成程左様く男あなた
 の御狂名の彌次わつちヤア十返舎一九とヤやす男ハ、ア。御高名受賜はり及びまし
 た。十返舎先生で御座り升か。私しハ南瓜の胡广汁とヤ升。儲くよい所でお目に
 掛りました。此度の御参宮で御座り升か彌次左様さ彼の膝栗毛とヤ著述の事よつ
 て態々出掛ました胡广汁いか様あれは御妙作で御座り升。是へお越さる道すから
 も。吉田岡崎名古屋邊御連中方。御出會で御座りましたる彌次イヤ東海道ハ宿々
 残りぞ立寄所か御座れ共参ると引留られまきて。響應よあひまするが氣の毒で御座

るから。皆とゞ通りに致しました夫ゆゑ御らんの通り態で鹿服を着く致して。やはり
 同者の旅行同様よ心安く何でも氣まかせよ。風雅を第一と出掛ました胡魔汁 夫のお
 樂みで御座り升。私し宅の雪津で御座り升が。どうぞお供致したい 彌次 おぼし召有
 がたい 胡魔汁 まとも御珍客近所の社中共へお引合せ下さい。何れ御一宿をお願ひま
 せう。マアくふしぎの御縁でよい所でお目よ掛た。時よこ、が小川とヤとこる饅
 頭の名物一ぶく上りませんか 彌次 イヤ饅頭よはこりはてた直よ参りませう 〔ト打連
 を行過
 る逆〕

か、尻の味の味い名代を旅人に喰附せんと賣れる饅頭
 是から行程多く、津の町に至る前よ高田の彦堂右の方よ見ゆる石井殿といふ是なり
 おまさ板直しよ鯉のひれ振へ。これ佐用姫の石井殿のも
 津の入口左りの方の。如意輪観音堂あり。又かうの阿彌陀といへるもあり此所へ上方
 筋より参宮の人。落合ふ所よて往來殊よ賑をしく中にも都方の若き人々。小袖の上は

揃への浴衣をひつぱり藝者めきたる男女打交りて飾り立たるつ、ら馬をひきながら
 唄、チ、チ、チン、 彦座れ都の名どころ見せん。させん清水やれ音羽山ヤア、とこ
 なア。ヨウイヤア。ありや、こりや、。コノ何んでもせエ引。 〔チ、チ、チン、〕 エイ、
 引。ちしゆの櫻よまく打廻し。霞かくれよものおもはさる。ヤアとこなア。ヨウイヤ
 さア。ありや、こりや、。コノ何んでもせエ引 彌次 コウ北八見や。こらさよ美しくし
 ひたばが見える。胡麻汁 アリヤ皆京都の衆者あいに。りつばよしておでやつても。ね
 つから錢のつかわせんが。京人 無心ながら火一ツ貸ておくせんか 胡麻汁 サア、
 おつけるさい 〔トくはへたさせるを差し〕京人 パツ、 胡麻汁 まんぶ附んか
 いな 京人 ヤツ、 胡麻汁 何じやお前のさせるよや。煙草がついでないが。あ。
 ハ、アきこへた。吸ひ付る振て。人の煙草をのむのじやあ。モウよさんせ。ノウ
 お江戸の先生京の衆りあいに。者ひのねつこじや。 〔ト、ト、ト、ト〕 時よ先生もう一
 ぶく下さりませ 彌次 京の者を。まはひと云ふが。あめへも先刻よがら。わしが煙草斗

り呑て居るごま汁 イヤ私し烟草入と持やせんもの 彌次 忘て出なされたのか 胡麻汁
 ナニわそれもせんが。有様の全体が。なののじやわいあ。其わけり。私し。ゑらい烟
 草まき。一日に拾々でいたらぬ位じやゆる。コリヤ自分でかふて呑ではたまらんと思
 ふて夫から烟草入のやめて。させる斗り。もて歩行さかり升 彌次 そこで人の斗り呑
 ざるのだな 胡麻汁 さよぢやわい 彌次 そりや京の人へ。輻輪掛けておめへが。わだぢけ
 ねへと云もんだ 胡麻汁 ハアそふかいあ
 此邊より鳥の宮へ參る道あると聞て
 照渡る秋の月本さらはいま。うの色參らん鳥御前よ
 斯て雲津に至り南瓜胡麻汁。おのが家よ案内するよ是もはたを屋と見ゆれど折ふし
 相容もあく。奥の間よ請じいれ彼れ是ともてなしけれを。彌次郎兵衛をわらぬ名を
 いつわり掛る目よあふも一興なりと北八もろとも心の内よあうしく。頓て湯も入
 仕舞ひゆうくと座し居たるに。亭主胡麻汁出てコレハお草臥て侈座りましよ。よ



ふこそ。お入り下されました。然し折悪敷此頃は。まけで何もお肴が侈座りません。
 夫ゆゑ何も御馳走がでけぬくひが。當所は至つてこんよやくがよおざり舂から。ムア
 是でも上ましよと存じてや付おきました
 彌次 もうわかまひなされな。イヤ御主人
 此者のいまだおちか付にならぬげあ 胡麻
 汁 いか様あきたは 北八 私し十返舎の秘
 藏弟子一片舎南錠と舂。ふーぎを御縁
 でごやつかいに預かり舂。胡麻汁 ナサド
 つとねから。わかまひはアさんじやて。イ
 ヤ先生ちとあかつろぎをされまいの 女御
 膳がよ御座り升 胡麻汁 早う上んがい。御ゆるりと召上りませ
 へて 彌次 まんざらでもねへの 北八 い、女だ然して、じやアお前へも先生かふだ。ね
 行

ト亭主は勝手へ立て行。
 女膳を持って彌次郎へも

となまぐせざアあるめへト此内又十一二斗りの小ぢよく膳を持。北八よそへる。両福餅の大ききの如き黒き物のせて出せり。膳の向に平めある皿の中よ大よやくを盛。味噌は別よ小皿に有り彌次郎小聲よてトナント北八。此皿よある丸る物は何だろ。北八。されば何であるよかト箸よてつゝ見るよ至てかた。はさめ共つぶト北八。コリヤ石だト彌次。ナニ石なモのか。ノウ女中女。夫は石で御座り升。北八。夫見なせト女。こんよやくをお替なさりませ。彌次。いか様も少しトひらを出して女。彌次。コウ何と馬鹿トしい。どうして石が喰れるモのか。北八。イヤ夫でも喰れる仕法がわらやアこそ。出したであるよ。先刻き當所の名物を上ませうと云たア何でも此石の事だ。彌次。夫だどつて。ついで咄しにも聞ねト北八。イヤ待なよ。江戸で團子のとを石ト云から。大方コリア團子であるら。彌次。ハ、ア成程そこもあるよもや本トウの石じやア有ま。ト又箸をもつてつゝ見るよ。やはり石也是のふしト彌次。どうでも石だトコリヤどうして喰物だと聞もどうはらだ。どうもねつから合点がいかにト此内亭主勝。是の何も御坐りませません。宜しう石上りませ。イヤ石がさめい致し手より出て

○喰ヲ美
味ヲ賞斷
曰フ於石ト
語始ニ于
此ニ

せんか。コリヤトぬくとる石を替て上らせト云れて二人共吃驚せしか如何よしてうはらと彌次郎兵衛トイヤもうおかまいなさるな。石ももはや宜しう御座る。儲々珍らしい物を賞断致しました。江戸表あどで折ふし小砂利を唐がらし醬油で煎つけるか又ハ煮豆あどの様よ致してたべるとが汚座り升。夫に又石塔あども嫁をいじる。えうと婆などよ。喰せたが藥だと申してたべ升るが。私も随分好物で御坐り升。今度府中で逗留致した時。馬蹄石を泥龜煮よして。振るまはれましたが。ツイ私し四ツ五ツたべました所にお聞なさい腹がおもく成て起ふとした所が一向たれせ。仕方なしよ兩方の手を棒しばりの様に致してかついて。貰つてやうト手水に行やした。汚當所の石ころい。かくべつ風味も能く座りやすから。又たべ過たらは汚やつかいよ成るだろふと存してお氣の毒で汚座りや。胡麻汁。ナニ其石を上りましたか。彌次。たべました段か。胡麻汁。イヤ夫のめつそよかいな。石を喰ると云いけしからんお齒のお達者あどで御坐り升。然し焼どのあさりませんかい。彌次。夫のなせな。胡麻汁。イヤあ

○石喰
報し掻シ赤
恥一

の石の焼石で汚座り升。そべてこんよやくといふ物の。水氣の取れぬ物で汚座り升か
ら。あの焼石よて。おた、きなさると水氣がときてかくべつ風味がよござり升。其
爲の焼石で汚座り升。あがるので汚座りませんわい。彌次ハ、ア成程く聞へま
した。胡麻汁 マアそうしてあがつて汚覽なされ。コレお鍋よ石かぬくとなつたら持て
こんのい早うく。ト此内皿に石の焼たるに乗て女持出ひき替て行く彌次郎北八亭
シウ引と云て水氣取れたる處を味増を付てくらふ風味。彌次 まよ珍らしひか料理
かくべつかるくしていはん方おければ大きよかんじて。汚仕法かんしん致しました。そしてかやうよ同じ様お石が早速よ能く揃ひました。胡
麻汁 イヤ夫の兼てたくわへ置升。れ目よかけませう。ト勝手よかけ入吸物椀。御らん
下されませ。こなるに二十人前の所持致してあり升と。かの箱を見ざるふたりのおか
てあるゆゑよんで見ればこんよやくのた、き石二十。御免下さりませ。胡麻汁 ヤ是の
人前と書付たり此内近所の狂哥よみおひく來りて。小鬘長元成様サアく。どあたも是へくハ、イ。是の十返舎先生。始てお目よ掛り
舛た。私しそ。富田茶賀丸と申升。次の反齒日屋呂。水鼻垂安。金玉の嘉雪。尙れもか

○此、一
九一、一
不出

見まり下さりませ。胡麻汁 時よ先生ねやのましう御坐りませうが。おむつゝのまかるふ
しうといふ。扇面短冊あど願ひやたいが何成共お持合せのお歌をお認め下さりま
國言葉あり。ト扇子短冊をつき付られ彌次郎しかつべらしくどりあげて何の開放体やらかし
せ。て暮んと色々考てもわがよみし哥よ。是がといふ哥もなく早速よ思ひ付もあけ
れば是まで聞おほへ居たりし人の哥を。是の有難う御座り升お哥の時鳥自由自在よ
書て差出せば胡麻汁是をいふ。さ見て。さく里の。酒屋へ三里豆腐屋へ二里。ハ、アあるほど。どうか開た様お哥だ。さぬ
くのなさけをしらば今一つ。うそをもつけやわけ六ツの鐘。イヤ是の千秋菴大人の
お哥ての御座りませんか。彌次 ナニ私かよみ哥。然も江戸中大評判の哥。たきしらぬ者
の御座らぬ。胡麻汁 イヤさよじやあろうが。先年私しお江戸へ参じたとき。三陀羅大人
芍薬亭大人などよも。お目よ掛りまして。すなはちお短冊もいただみて歸りましたが。
御らんなさき其屏風に張て御座り升。トいふゆる彌次郎ふりかへりて見れば成程屏
の毒な。イヤ私しの先生。そ、つかしひが。くせで人の哥だの我哥だのと云。しやべ
つの一。向御座りやせぬ。コウ彌次さんイヤ先生是迄道中筋でよみなさつた。お前の

哥を書きされば能よ
も手持るけれを張
交せの屏風を見て
ト氣を付られて彌次郎面目をけれと。押のつよる男あれば。い
けえやア〜として跡の短冊への道中筋の哥をかき此内北八
戀川春町の畫が有る。モシあの畫の上にある賛の何でお座



り升 胡麻汁 イヤあれの詩でお座り升 北八
こちらの布袋の畫の上に有の詩と見へ升
が誰が致したので座り升 胡麻汁 イヤあ
れの語で座り升。澤庵和尚の「北八心
の内にていついまくしひやつた。さん
かど云へは。詩たと云。詩かど云は語たど
云何でも此度の一ツよけるに云て麻
胡つかせてやるふとそこら見廻し
八 モシれ掛物の畫の上に書て有の大方六
で座りませうか 胡麻汁 六か何かしりま
せぬが。あれの質に取たので御坐り升
升た 胡麻汁 ドレ〜何じや有な
ト此手紙をひらきて
手紙 鳥渡中上は只今東都十返

○吐無
六語又
喰八北
八之九
可想

舎一丸先生。私宅へ御着有之。勿論名古屋連中並。吉田大竹も書狀参り。早
速貴公御贈も致置ゆ。追付貴宅へ。同道参上可致候間。右御案内申入置以上。胡
麻汁 コリヤどうじやいな。とんと。合点のいかぬ。ノウ先生只今朋友共からかやう
申越ました。定めてこやつ尊公のお名前をかたつて参つた者と見へるさいはる。
追付是へ参るとあれば。ナントお逢あされて。なぐさんでやろうじや御坐りませぬか
彌次 儲々。大變なことだ。いや早横着あやつも。あれば。有ものだ。然し私し。ほひま
とまい 胡麻汁 なんせ〜 彌次 イヤどうか先刻から持病の痼氣があまりました。左様
てなくば其ませ者。致し方が御坐る者。儲〜こまつた物だ。ト思ひかけ無く。此
彌次郎しよげ返りて居る亭主胡麻汁を始め。皆〜先刻より彌次郎か。振舞ひ合點ゆ
かぞと思ひし所扱はと心付こいつ。ばけの皮あら。してくれんとたがひは袖を引あ
ふ茶が丸 何と先生コリヤ面白うとが抜けました御不快では御坐りませうか。是非共
其似せ者よ。いあひなさるが能ふ御坐りませう 彌次 ハテ扱こまつたをまつしやる
垂れ安 イヤ時よ先生の宅の江戸表で何所で御座り舛な 彌次 されば何所か御座

つた。チ、夫、鳥羽か伏見か淀竹田かゆき山崎の渡しを越て與市兵衛とお尋ねれ
 があさやアがれハ、胡麻汁イヤ酷あきた方のお笠江江神田八丁堀彌次郎兵衛と
 書付て有りあつたが。其彌次郎兵衛様と云い。たれさんのことじやいな彌次ハア聞た
 様名だ誰でかあつた。チ、聞た筈だ。わしが實名を彌次郎兵衛と云やと胡麻汁ハ
 、ア常よや參らぬ鳥々渡參らぬ彌次郎兵衛で御座ると云は。あきたのよで有さか彌
 次左様、茶が丸。時彌次郎兵衛先生其似せ者の一丸をいんま連てこまるかい彌次
 イヤわしはもう出立致そふ。胡麻汁何せ今頃何時じやと思ふて最ふ四ツじやげあ彌次
 さればのことわが痴氣のかばつたこと此様よかまこまつて斗りおると段、悪
 く成。いつも夜分外を歩行て冷さへすりや。直よ能くなるから胡麻汁ハ、ア夫で今立
 ふと云のか。そうさんせ、嘘こあさんが。居ようと云ても爰よやもう置やせんのだ
 や。早う出てぬかんせ。ようも人の名をかたつて。だまさんまの彌次ナニのつた
 とハ胡麻汁ハチかたつたわいさ。はんまの十返舎先生の名古屋の川並連中から狀が

着てきてありや。ちかひなるが。たれ安。初めからとあさんの不都合だら。こ
 ちるなどであると思ふた。とちのらほからかし出されぬ内よ。ちやつと出ていか
 んせ彌次。何だほかまだそコリヤ面白。北八コレサ彌次さん。りさんでもはじまらね
 へ全体か前への思ひ付きが悪るサア爰を出て何所ぞ木賃も泊りやせう。コリヤ何
 方にも眞平御免なさりやし。ト北八が段々のわひと。喜主の腹の立どもおかまも
 出行ありを見送り家内の者共手を打た、きどつと笑ふ彌次郎のまじ。
 うふくれ顔をして。りさみかへり出行くおかしさ北八跡よししたかひ。
 いとはまし通り一遍旅の恥。書捨てもく扇子短冊。
 斯よみて跡の笑ひを催ふし出かけたれど。最早亥の刻過たると見へ。家并に戸を閉て
 ひそまりかへり。何れと旅籠屋ども。見へ分たを泊るべき方も無してうかくと。た
 どり行程よわはや軒下の犬共が。かき立て吼掛れ。彌次郎兵衛さよろ。まてエ、此
 畜生めらア悪くふささやアがる。ト石ころと拾ひて打ちつくれ。北八のまいなさんな
 犬迄が馬鹿よしやアがる。チヤ彌次さんおつな手付をしてお前へ何をす。彌次イヤ

犬は取巻れた時の宙へ寅と云ふ文字を書
 て見せると犬が退げると云とだから先刻
 から書て居るがねつから退げやアがらぬ。
 此奴らア皆無筆の犬だとうな。トシツ
 トどうやらこうやら追散かして行彌次
 共無しと思ひす此面を出はあれて
 コリヤつまらねへ者だ。ま、よ北八夜通
 し歩行こぞやアねへか。さつゆこたアね
 へ。にらかせく。北八 ね前とんだとを云
 まだ九ツよやア成めへ又何所へ泊りて
 へ者だ 彌次 夫だとして今頃よれきて居る
 内いなし。イヤ有ぞく。遙向ふに火が見
 へる。アノ火を目當に行て宿を頼まふ 北



八チ、サ。夫が能く。然し提灯の火じやアねへか 彌次 とんだとをいふ。戸の透間よ
 りもれる火だ物を 北八 ほんに家の内で煮火だ何ても是非あそこを頼んで泊やしうや
 ト足にまかせて急ぎ行く願てそこよ近付きたるよかの目當 彌次 ヤアくくく
 の火のわのれと段々先へあゆみ出して行く体よ。おどろき
 あの家かどうか歩行て行様だ 北八 ほんよなア。こいついおかし 彌次 イヤおかし
 かい氣みが悪何所の國よか家が歩行と云ふい只事じやアねへ 北八 ナニサ是も赤坂
 の泊りくらゐで皆な狐めがとる事だろふ。よはみを見せると直附け上りがとる。かま
 う事アねへ。さつくと歩行みなせへ トわざとりさみかへつて足早よ件の火よか
 の車なり。小屋の内よて火を焚。茶をわかしながら車を押して行の也。ふたりいお
 しくこゝをそぎ行よ。折節月の出たれども草木もねむる真夜中のうを淋しさ。跡よ
 も先よも只三人。上はべいがまんよつよ張ても心の至てのおくびやう者こわくた
 どり行跡より一人来る者あり彌次 振り返り見れば小山の如き大男長脇差を腰よ横た
 へ来るを只者なら我々を目掛け 彌次 コウ跡からおかしな奴が附て參る。ちと急
 附来るあらんと北八よさ、やきて
 きてやらかそう ト足ばやに走れば 北八 待なよ呑口がはづれそうだ ト小便をすれ
 跡の男も又はしる トこはく云は彼の男存 其男も立留
 り待て居るゆゑ モシお前い今頃何所へお出さる トこはく云は彼の男存 其男も立留
 彌次郎聲を掛け

私しの松坂へ。もどりある者じやがな。夜さら一人りこはふてくモウとらしよ
 んなど思ひおつたところへ。お前方が通らんすゆる。コリヤ能連じやと跡からお二人を
 心便りも参じた見いな。北八 イヤおめへ。なりよの似合ぬよはい音を出しさる。そし
 てそんな長いやつを差して居ながら。彼の男 ハ、ア是かいさ。コリヤ跡で拾ふて来た。竹
 切じやわいな。ト腰からぬいて。彌次 ハ、ハ、ハ、脇差ではねへの。わつちらア又お前
 へがこわくつて。先刻にからコリヤひよんな奴に見こまれたと思つたが。マアお
 前へおくびやう者でわつちらも落ついた。北八 もうく。是から二人と云もんだから大
 丈夫だ。男 イヤ。此先にとつとゑらら事有がな。彌次 何かゑらら。男 聞んせ。わまや
 今日江戸橋迄いて。歸りにさつう遅なつてさ。いんまの先此松原よさかつたところが。
 何まややら向ふよ大きな白の物が立てゐおつて。夫が何方へいたり。こつちやへ来た
 り。ぶらうりくもうくく。見しやこはふて。コリヤ死ぬかと思つたわいな。そじ
 やものどうして向ふへ。いかれる者で。コリヤあらんわいと跡戻りて。どうぞよい連

がやしいと思ひおつた所へお前方は行合たのじやわいな。彌次 エ、其白い大氣者者が
 居たと云の何所らよ。男 イヤじつさよ此先じやわいな。北八 エ、何が出る者だ。おいら
 だ先へ行く。おれに附て来な。ト打連て此松原を一彼男 アレ。向ふよ。ア、コリヤ。たま
 らぬく。トがた。震へる二人もあやしくはるか向ふを月明りに透き見れば何共
 是の何だろうと先へも。す、まを立留り見れば又さくゆるようにはつたり無く。彌次
 あるうと見れば又そつくりと立大きく成たり少く成たり其形ち見からず。
 ア何だろふ。北八 裾がねへから亡魂違へね。男 ア、あれじや物どうして先へ行れ
 ましよいな。彌次 性体がわからにやア。猶氣みが悪のコリヤ行れぬ跡へ戻ろふ。男
 もお前方を便りに又参じたが。どうもこはふて行れんわい跡へ戻つて又連の人が出
 来おつたら又爰迄こうわいな。二三度もそあるよ。いたり戻つたりしおつたら丁度夜
 がわけふわいな。彌次 何でも白装束だから何ぞの亡魂違へはね。北八 アレ。青い
 火が見へる。男 エ、どうかこつちへさかるといふじや。彌次 コリヤどうしよふ逆も先へ
 行れぬ。ト三人乍ら色青ざめてぐたぐたふる。唄戀の重荷を。つんだら。お馬よ
 ぶ折のら向ふより人の來るとみへ。

へ。いく駄あろるやらしれぬくひナアント唄ひあがら来るの彌次モシくお前方まへがた
 ア何所どこから來きなさつた人足ひとあしハアわえらア此この近在きんざいじやが。役やくも當あたり居あて津つ迄まで行ゆけるの
 じやわいお彌次ソリヤア能いがこ、へい。さうしてさなさつた人足ひとあしハテこそ人ひとハ其その役やく
 で津つへ行ゆのじやと云いの彌次ただしのお前方まへがたも幽ゆう霊れいじやアねへか。どうも人間にんげんなら
 爰こゝ迄まで生せいてこよふ筈はずがある。人足ひとあし何なに云いんすやらねからはからわらんわい。北八きたはちイヤ向むかふ
 化ば者ものが居ゐるよどうしてれめへ方かたア其その前まへと通とほつて來きなさつたと云い事ことさ。人足ひとあしコリヤこな
 さん達たちハ三み渡わたりの藤とう九く郎らう狐きつねが。いこいたのじやなハハハハ北八きたはちナニサ向むかふを見みせへ
 人足ひとあしむこに何なにが居ゐるぞい。北八きたはちアノ白しろい物ものがアレ人足ひとあし白しろい物ものどいあれかくあり
 や道中みちなかで。おまの靴くつや草鞋わらじがもれてゐるが。其その煙けむりが月つきようつ、て白しろなつて見みへるのじ
 やわいお彌次ハ、アそるかハハハハコリヤ有あ難がた御座ござりやとト人足ひとあしよ別わかれて三
 をつき打う笑わらひッ、頓とんて其所そのところにたどりつき見みるよ成なり程ほど草鞋わらじ靴くつなどを積たかさねて火かを付く
 もえたるよて其その煙けむり白しろく立ち登のぼり見みへたるなり此この所ところを過すて松まつ坂さかよ至いたりまぐ夜よ深ふかければ
 道連みちづれの彼かのの男おとこを頼たのみ寝ねる斗とりのとなればわたりまへのえたごを出ですもつひへス斯かくて。
 成なりと町まちの入口いりぐちよ木き賃ちん宿しゆくを世話よせわして貰もらひそこに泊とどりて一夜いちやをこそは明あかしけるス。

月落つきおち鳥啼からすなきて時ときの鐘かね明あ六むッを告つ渡わたるに彌次やまじ郎らう北八きたはち。早はやくもおき出いで。此この所ところを立た出でるとて
 驚おども輪わよ成なりて舞まふ日ひぞ旅人たびひの踊おどり出いでたる松まつ坂さかの宿しゆく
 右みぎの方かた小山こやまの薬師やくしを打う過すき櫛くし田でと云いよ至いたるこ、よお勘かんお紋もんと云いる二に軒けんの屋や茶ちやあり餅もち
 の名物めいぶつなり
 旅人たびひばいつれに心こころうつるやと。お紋もんおのんが賣うれる饅まん餅もち
 夫それより稜はら川がはを打う渡わたり。齋さい宮みやうを過すて明あ星せうが茶屋ちやよ休やすみたる時ときこ、よ上方かみかたもの見みへて。
 て帳面ちやめんと風呂敷包ふうぶしひらを脊せおひたる男おとこモシくお前方まへがたア其その荷にを付くてお一人ひとりり此この日ひ那なと
 馬うまのねを付くて居ゐたりけるが馬士ばし上方者かみかたものお前方まへがたも大方おほかた參ま宮みやうじやある。わしも古ふる川がは迄まで掛か
 二方にほう荒あ神かみも乗のらんせんかいお上方者かみかたものお前方まへがたも大方おほかた參ま宮みやうじやある。わしも古ふる川がは迄まで掛か
 取とり行ゆさかひ。一いっ所しょに乘のりなされ咄はなしもてゆこわいお彌次いか様さま夕ゆふへの夜道よみちで大おほつ
 かれた北八きたはちおらア乘のつて行ゆぞ北八きたはちそんなら此この荷にを附つて貰もらふト此この所ところにて馬うまのそら談だんが
 方かた荒あ神かみで馬うまヒインンく上方かみかたお前方まへがたお江戸えど乘のりじやゆるお彌次左ひだり様さま上方かみかた江戸えどは。ゑ
 出で掛かるトいどこじやなア。わえや去年こぞいて。ゑらい目めよあふたがなア江戸えどよ似に合あはん。何なに所ところへ

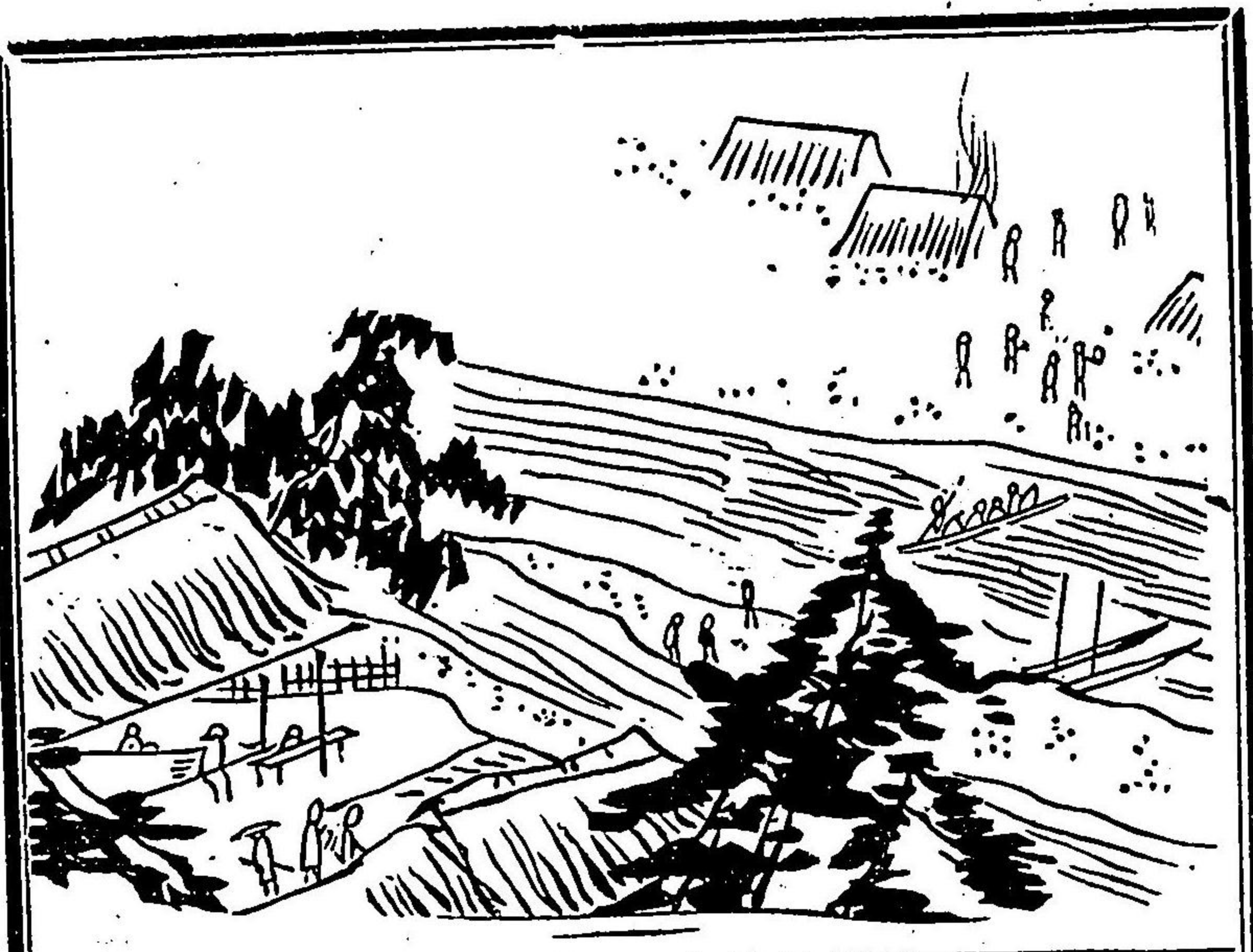
○非鈴カ
森面尿
々漏

ぬても手水場が。とつともうゑらひむさくろきふて。私や百日程かる内。とんと手水よいたとがあいがな。夫から江戸を立て。鈴ヶ森たら云とこへ来て。ヤレ嬉しや。こ、てこそ小用迄てこまそと。海のなのへ溜々た。小用を一さに三斗八升斗り。さおつたがゑらふよかつた。あまこは奇麗でゑらい大きき小用たごであつたわいな。ハハハ。彌次。京では小便と菜と。とつけへこにするると云事だから。小便も大切るもんだよあめへ海の中へおしい事おした。其二斗八升で取替たら菜が馬よ五駄や六駄は。くるたろふよ夫だから京では。屁をひるよも出をうよ成とちつやと。裏の畑へかけて行て。はえてある。大根や菜の上へ屁をひり掛ると云事だが成程是もこやまよ成たろふ。上方。そうじやさいさ。其屁をひり掛た菜を。能ふ刻で土よ交て壁を塗るが。京では其土を。へな土と云わいな。彌次。そう体京と云ふ所へあだじけねへ所よ。前度わつちが行た時分の三月で花見のさい中。てんでんよ幕を打てけつこうさ。高詩繪の重結なんどを取りちらした所の能か其重の内よ何が有と思へば。かくやの香の物よ。だらぞ

○彌次
不レ説ニ解
語花ニ取ニテ
江戸ッ兒
身ニ遺感
多シ矣

の煮た奴つのおそれる。上方。イヤ夫よりかれ江戸の衆が吉原の櫻のゑらふと。いこう自慢せらる、さのいで。とまやわさ。吉原へいて見たが。何の櫻のありやせんがな。彌次。そりやれめへいつ頃いさあすつた。上方。としがいたいたしか十月時分。彌次。なんの十月櫻が。有てたまるもの。上方。ハアそうかいさ夫でも京の小室や嵐山よは年中櫻がちんどもあるがな。彌次。そりやア木斗りだろふ。花の年中有やアしめへ。上方。さよぢやわいな。イヤ又江戸衆の長唄をよう唄ふてじやが。京の宮園や國太夫の又格別なもんじやわいな。彌次。國太夫と云の。どの様に唄やぞ。上方。國太のこうじやいな。トまじを張上げ。上方。頼てわたしが年明けて。お前と夫婦よ成るらば肩を裾へはまだな事足て國太夫。を耳にかけて成共をひませう。彌次。イヨ。面白へ。ナントとつちよ。トくさりおしへて。くんなさらねへか。上方。そりや安い事じやわいな。わしよついでやりなされ。ト此内北八の細長き。竹一本を拾ひて。上方者が。おまりよかうまて來事を心知。上方者。上方。チンチリッ。やんに女子のまうねんの深いと云つ。夢中よなり又國太夫ふし。

うそじやある死ても阿責の夜叉羅刹。杖振わけて丁と打。トいふ所まで北八手を延ま
 まをび。上方。ヤア。コリヤ。どやつじやい。人の頭まへ磔うちおるが。彌次ハ、もう一ツ
 ぺん今の文句を。上方。やんに女子のえうねんの深いと云。うそじやある死でものしや
 くの夜叉羅刹杖振上て。又びつしや。上方。ア、イ、タ。どやつじやい。どめつそうあ。あ
 らふ磔。うちくさるがな。トふりのへり見れ共北八のちやつと彌次郎。彌次。面白いが
 どうも。ふしが六ヶ一いもう一遍やつてくんせへ。上方。ソリヤ何ばでもやる。やる
 が又つむりをうちやまよまいの。彌次。ナニサわつちが見て居よふ。上方。そんなら。ま一
 度やりましよかい。死でものえやくの夜叉羅刹杖振上て丁と打。ト此度の北八うろ
 たまをひしや。彌次。ア、タ、タ。北八。おれた。コリヤどうする。上方。ハア先刻のら私がつむ
 りをうたんだたのも。こちさんじやな何として打んだ。北八。私に打た覺へいある。上
 方。ナニ無とは云しやせんといさ。北八。ハテおいらアまらねへ。いけしつこる。野郎めだ
 い。上方。野郎とは何じやひる。こちさんいあるらぬ。おとがひた、かんすな。北八。何だ此べ



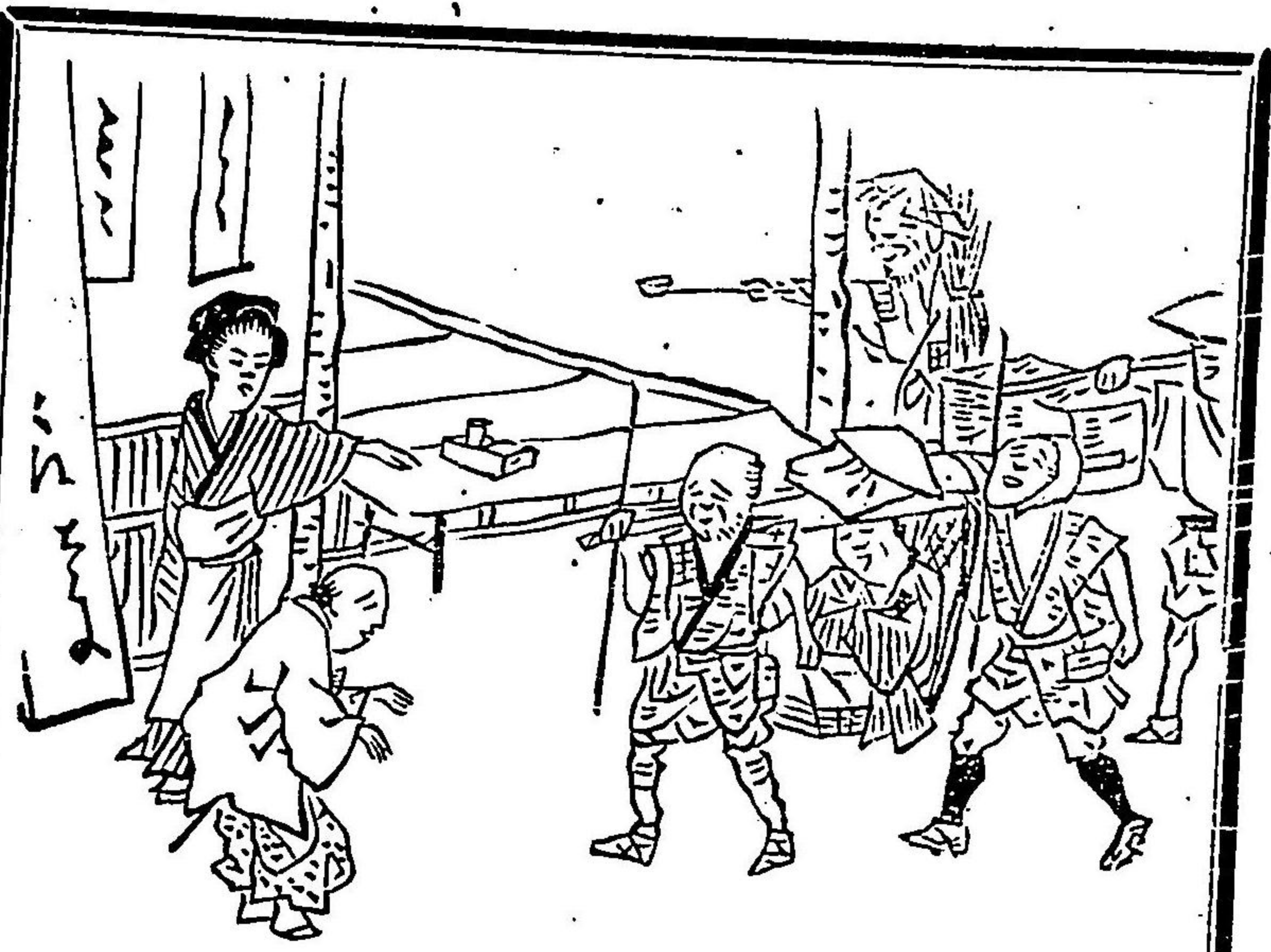
らぼらめさつきから。そうてへ氣は喰は
 ねへ野郎めだ。あんまりだは言つきやア
 がるど引せり下すぞ。上方。面白いサアある
 して見やんせ。北八。ム、まつ逆様はかつこ
 どしてやろう。ト馬の尻をびつしや。上
 方。ヤア。たまらん何するのじや。彌次
 コリヤ。どうぞ。馬
 れもたまらん。ト此内新茶屋の
 士エ、畜生めドウ。ト此内新茶屋の
 幡まつく此所より馬をおりて三人。コレ。
 共茶屋に休む上方者北八は向ひて。
 おまひの何として。私がつむりをうたんだ
 した。彌次。もう能よまなせへ。おたげへに
 旅じやア色々事があるもんだ。了簡しきせ

へ。わつちが一盃買やせう。モシ女中何ぞ着があらへ愛へ一盃出ーてくんさト是酒盛どかりて上方ものも一ッさトコリヤゑらふ酔たわいさ。コレ彌次さんとやら。わしやおまるがゑるふとさじやが。此わろいかんぞや。とんといかんけれど。お前の連じやまゝ事がある。かうまゝじやあるかい。是から山田の妙見町よ一所泊つて古市をおどろかいさ。日々やあこでと。ゑろうされるが千束屋の鼓の間。柏屋の松の間。私が案内するさかい。いかんせんか。どうじやいさトやたらよ大そうちと斗りだてあけて遊ぶつもりよト奇妙〜どうぞお供致てへの。上方是から世古の松坂屋で支度まで妙見町の藤屋とまよぢやあいかいさ。サア〜。もういこはいさ。彌次トリヤ出掛やせうトこの酒代を拂ひ立出る此町のではト宮川や神に奇縁を結ばんと。すくえる水の影のまらゆふ是より中河原を打過。堤世古を打越して山田の町に差し掛りける

○追加

○ 噎子
不 能 言 言
故 出 看
板 元 之
者 歎 呵
々

川崎音頭。伊勢の山田を歌ひしは。和名抄の陽田と云るより出たるよや此所十二郷有て人家九千軒斗り商買るらかを並へ各々質素の莊嚴濃として神都の風俗自から備り柔和悉鎮の光景は。余國より異なり参宮の旅人絶間無く。繁昌さらにいふ斗りなし。彌次郎兵衛北八の彼の上方者と打連此入口に至ると兩側家毎に御師の名を板し書附用立所と云へる。看板竹草の如く。爰に袴羽織引掛たる侍。何人どなく馳達て往來の旅人の御師に至るを迎ふと見へて一人の侍。彌次郎兵衛に近附き。お師の手代。モシあなた方は何れへお越で御座り舛な。彌次。えれたと太神宮様へ参りやす。手代。イヤ太夫のせれへ。彌次。太夫の竹本義太夫殿さ。手代。ハア義太夫と申すは何所元じやいな。彌次。其義太と云はさ。大坂よりの道頓堀北八。京は四條お江戸の。吹屋町川岸よ於て永とく御評判預りましたる。手代。かたは者のお前方で有たかいな。北八。たはことぬかそとひつぱたくぞ。手代。ゑららあどじやなハハハ上方。ちと休んでいこかいな。北八。愛らら。きたねへ所だ皆御師の雪隠と見へて用立所と書て有る。彌次。おきやアがれハ〜ト三人共或る



二百四十六

茶屋へ這入。暫く休む此内向ふより上方同
 者大勢い揃ひのありで女交りに聲張上げ
 唄御座れ夜見世は順慶町の通り筋から
 レひやうたん町を。ヤアとこヤア。よいと
 さア。チ、ハ、ハ、チ。とけんぐめきは阿波座
 の鳥。ツリヤサかわひくも。ヤアレ格子
 先ヤアとこヤア。ヨウいとヤア。ありや、コ
 ノなんでもせ。チ、ンチ、ンチン。ト此
 通り過たる跡から太々講とみへて廿人斗
 り何れも御師より向ひの駕と打乗り来る
 が御師の手。サア、ハ、ハ、ハ。是じや、先ど
 代先よ立て。サア、ハ、ハ、ハ。是じや、先ど
 ろた様も是で御休足なさりませ。ト駕は
 茶屋の門に下り此太々講は江戸を見へて
 何れも小袖ぐるみみ短いお太刀をさめた
 手合銘々駕を出て座敷と通る。ト此内一人の男彌次郎を見附てイヤ是ハ

どうだ彌次殿。貴様も参宮か。ト聲を
 きて彌次郎びつくり見れを町内の米屋
 太郎兵衛ちり江戸をたつ時此米屋の拂ひ
 をせず立たる事なれば何と。ハア太郎兵
 衛様か能お出掛さいますし。然し爰であ
 きたよ。お目よ掛つて。画面目無。太郎。ナニ
 サ。くわしも仲間の太々講で其くせ講親
 と云者だから。よんどころなく出掛まし
 たが。いひ所で逢た旅へ出て。兎角同國
 があつかしい奥へ来て。一盃やらつし。彌次
 ありがたふ御座いやす。太郎。連ハ誰たハ、
 アまんざらぢらぬ顔でもなるナント貴様
 たち。さいはひのとだ太々講おがまぬの。



夫も飛入と云アちつと斗り金が出るから無難ながら。私らが供よなると一文も入らず。大分馳走よなつて。おがまれると云ふものだから。どうだろ。彌次 夫願つてもなる有難ことで御座いやと。然し夫がでさやせうかね。太郎 ハテわしが講親だ者。どうでもある。マテ何よし。奥へ來さつし。彌次 ハイ左様ならモシ上方の。ちとこ、又待てくんなせへ。連の上。能はいの。いてごんせ。太郎 サア。ふたり共さつし。兵衛よいさ。あはれ彌次郎も北八も草鞋を取て奥へ行と。上方者。ひとり見世先。酒など香て待て居るうち奥の太々講のとすれば御師の馳走にて。さいつあさねつ大かさの上方の太々講と見えて御師の手代。先よ立て。駕かき。ホウよい。さつこらさつさ。茶屋は這入る。手代。御案内。茶屋。お早う御座りませ。奥へお通りなさんせいな。此内皆々駕より下りて奥へ通ると直よ酒肴を持出し太々講。二々組の大さはき座敷の洒落色々あれ共。余りくた所よなりどさくさして奥より出と江戸組の御師の手代。はな立て奥より出て。サア。お駕の衆是へ。何方もサアお召なされませ。此内上方組の御師の手代も同乗じく駈。こちらのね駕は是へ。兵衛なき酔とあり彌次郎が手を取りて。

○此則
彌次郎兵衛
駕籠

彌次公。貴様己が駕に乗て行ねへか。彌次 イヤとんだとをかつしやる。太郎 ハテわしは是から歩行のるさみだ。貴様洒落よ乗て行かつし。彌次 左様なら。へ、こりや奇妙。ト駕に乗むサアお立去やと兩方の駕が一度にかき上げこんざつして。彌次郎も附をさつさどかついて行掛るどさくさ紛れに人も夫と心附ねば段々と急ぎ行程よ山田のまん中とぢかひといふ所まで江戸方の一ト組の内宮の御師なるゆゑ左りの方へ別れ行上方組の外宮の御師みて此所より右の方へ別れ田丸街道の岡本太夫の方に着く。門前の箒き目盛砂よ水打清め玄關。此時彌次郎兵衛も駕かきのぞ、うにて上方を講中皆々駕をおりて玄關より打通る。此時彌次郎兵衛も駕かきのぞ、うにて上方組の中へ紛れ込み爰よ來たれど十四五丁も有る駕どれがどれやらわからず彌次郎駕を出て同じく座敷よ打通りそこらをう。彌次 ハテ合点のいかぬモシ。米屋の太郎ろく見廻せ共皆しらぬ顔斗りあれは。兵衛様の何れよお出ささり升。居た男。何じやいか。太郎兵衛さんとはこちや。えらんわいな。そしておまゐり。ねから見ん顔じやが誰さんじやいか。彌次 ハイわつちん。ッレ太郎兵衛さんの間内の者じやがハテどうの違つた様か。北八いどうした知ん。トむうにらろく。きよろく。とまごつさあるけば。皆々さをもつぶし。たがひ。コレ。に袖引合て荷物あどかたよせ。さ、やま合。内此講中の内二三人立向ひて。こなさんはみなれぬ人じやが誰じやいな。彌次 ハイ。講中。ハテこなわろの何をさよ

ろくさんそすいな誰じやと云のに彌次イヤとつちの米屋の太郎兵衛さんにお目にか、ればわかりやと講中ハテそかいな人。こちれ講の内よえ無もせぬもの。何じややら氣きたの悪る人じやわいな御師の手代ハアこそ人のあなた方のお連では御坐りませんかいな講中さよじやわいな手代イヤ夫はどした者じや。とつと、出て行んせ。ゑらい。へげたれじやな講中道中じらであるぞいあ。ほり出してやらんせ。あたけたいあ彌次エ、そんな云さるとアねへ。ほり出すとは何のこつと。途方もねへ講中ハ、アお前のものいひはお江戸じやあ夫でよめたどのいんまのささお江戸の太々講と一ツ所で。落合ふたが其時お前の乗らんした。駕がこちらの中へ紛れ込で御坐んしたのじやあ彌次あるやど左様そんならとつちのいく御師殿何所で御坐いやすあ手代ナニお前のいくとを誰がしろぞいあ講中めんくのいく御師殿をまらんと云事があるかいな。コリヤ我さまの。態どこちらの仲間へ走り込で太々講を喰たをし。まようであ講中皆々エ、けたいあ奴じや。のうてん。どやうてこそまかい彌次イヤ悪く酒

落らア手めへたちの太々講。丸ツまり喰倒したところ。たかかまれてゐる。あんまり安くしやアがるな江戸ツ子だは。おれひとりで太々講打て見せようトどつさりそ手代さをも。ナニお前がおひとりでかいな。こりや。でけたくみんとお前が彌次まつぶして。多少にやア依めへ。是で頼み舛トうちかへの錢二百文紙よ包みハ、ハ、太々講の安うて金拾五兩もださんせんけりや。でげんわいな彌次ナニ是でハなりやせんか手代さよじや。彌次太々講があらまば是で蜜柑講でも頼み舛講中ハ、ハ、ベつが講よさんせ。ハ、ハ、手代イヤおどけたお方じや。ハアよめたお前のいくところの造に内宮の山莊太夫殿じやわいの。先刻の手代がわこのじや程よ是から妙見町を直よ古市の先へいて尋ねさんせ彌次ハアそうか。コリヤありがてへ。やんよあやかましう御座いやした講中ゑらいあほうじやハ、ハ、ト手を打笑ふ彌次郎はらたて所を立出ると鉢植のだい講にあらね共。宙よぶらりとありし間違

夫より彌次郎兵衛の元の違筋は出。妙見町を差て行く道とがら北入のいか、せしや。米屋太郎兵衛と打連て御師の方へ行しか但しは上方者と妙見町に泊りしうと思ひわびつ。たどり行程に廣小路に至ると「此所の若お泊りかいな宿を取てかんせ彌次コレ妙見町と云の未よつ不ど御座いやそかねの女宿屋」イエムんま少し此先じやわいな彌次ソノ妙見町よア、何屋とか云た道連の上方者が泊ると云たの、夫よ「ト色く藤屋と云をわされて」ハテロへ出るようか何でも柵からぶら下つたよう名であつた若々妙見町にぶらさがつてゐる宿屋は御座いやせんか「そあよ」ナニぶら下つてゐる宿屋のこちやあらんわぬのそないなと云てのえれやせんか彌次成る程こ、ふでたづねてのえれめへ。最ふちつと先へ行てたつねやせう「ト夫よりこ、を過て急ぎたかんばん妙見町山原七右衛門と云るを見て借こ彌次「どり行程よこ、は萬金丹のそ。爰が妙見町ならんと思ひ往來の人を呼留て」モシこ、らよ何でもぶらさがつてゐる様赤名の内の御座いやせんか「往來の人よ」あんじやいあ。ぶらさがつて居る内とは何屋じやいな彌次宿屋さ 往來人 其家名ないな彌次家名をわされたからのと

往來人 イヤ夫いふて。かんせにやアえれぬくひしいの。何じやると。ぶらさがつた内と云てのハ、アむこの門よ人の立てゐる。内へいってとふて見やんせ。あこの去年首縊りがあつてぶらさがつた内じやさのい彌次イヤそんな者の。ぶらさがつたのじやア御座いやせん 往來人 ハテマアいてとふてかんせ。あこも宿屋じやあるわい彌次ハイ左様あら「ト走り行くうち。彼家の門よ立て居た人もどこへか。つゝと行て」彌次モシ「仕舞ひ。さつぱりえれなくなり間をくして。ある内の前よ立て」彌次モシ「ちとものガたづねさう御座いやす。去年首をれく、りなさつたの。あなたで御座いやそか」此内の亭主居合せさ「イヤ私や首つウたといあるがな彌次そんならとて御座いやす 亭主 こ、らよ首つウた内はあらんがさ此二三軒先よ柵から落た牡丹餅喰て。咽をつめて死だ内が有が。若夫じやあわかいな彌次 いか様なア何でも柵からぶらさがつた様赤内て有た「ト又二三軒先へ行」モシ柵から落た内のお前へじやア御座いやせんか「トとんだ事をいふ此」イ、エナリたしが内は。元から爰でつゝ柵へ揚て置たとはおませんといな彌次 ハア外よ御座りやせんか 女房 コリヤお前さ、ちが

ひじやあろぞいな。山から落た内じやあませんかいな夫じやと相の山の。與次郎の小
屋が此間の風で谷へ吹落されたと云とてお升が奇。大方それじやあろいな 彌次イヤ



夫でもねへが「コリヤア」困つた者だ何だのか
だか。さつぱり分らなく成て。もともこも
うしなつた様だ。目つちも先刻から尋ねあ
ぐんで。もう「が」つりりと。くたびれや
したどうぞ。「ふく香して下さりやせ」此
見世さきよ腰を掛る亭主氣の毒「亭主サ
そらよ煙草盆を提て奥より立出」
ア「ふくわからんせ。一体お前。何處
を尋ねさんそのじやいな。参宮じやあろ
がおひとりか。但まのお連でもお舛かいな 彌次
左様さ道連どもに三人のところ。目つ
ちは其連よはぐれてこんなこまつたとア御座いやせん 亭主
イヤ其おふたりのお連ハ

おひとりのお江戸らしいが今おひとり京のお人で目の上にこのくらしい赤痰瘤のあ
るお方じやおませんかいな 彌次さやう「亭主 それじやとちの内よお泊りなされ
たさかい直よね前様へのね向ひをぶしましたといな 彌次 そりややんとうにか「ヤレ
うれしやそしてお前のごい何屋と云やす 亭主 アレ御覽なされ掛札に藤屋と書てお
升が奇 彌次 ホンコ夫々棚からぶら下つた様だと思つたが其藤屋よ。そうして連のや
つらのとこよぬやす 亭主 ツレ奥へお連様がお出たよ。云てかんせ「ト此聲を聞くより
の上方者と「コリヤようごんした定めて。そこらうち尋ねさんしたで有こちもえらう
尋ねまふた事ちやあぬわいのマア「奥へ 彌次 是ハ。お世話よ成やと「ト直に奥へゆ
入ハ江戸組の太々講よ附て御師の方へ行しが彌次郎見へざるゆゑえらぬ人ばかりよ
て手もちなく色々聞合せても。わかたせせんかたなく其御師の方をいで。尋度も當ど
なく兼て妙見町の藤屋へ泊らんと云たることも承知のことされば大かた尋て参るで
ゆるふ儲こそ此所よ泊りて待受しなり彌次郎ハ太々講の駕が間違ひたる一五一十を
物語り大笑ひと也ける北ハ髪結「マア「おたげへよ別條無て目出たひ「
彌次 イヤもうとんだ目に逢たと云ふを己が事よ時よ髪結さん其跡でわつちも一ツや

らかしてくんぢせへ 北八 お前マア湯又道入てきなせへ 彌次 そんならそうよ (ト彌次
よ入よ行く北八) 時よ髪結さんかいらが髪にくつと根を詰ていつてくんぢな。あんだか
罷をそり掛りて) こつちのはらの髪いたばが出て鬻があつよ長くてもんだ氣の氣のねへあたまつきだ
そして女の髪もむうせへよ大きく結てなんのここのねへ筑摩の鍋のふりといふもの
だ 髪結 その前はりお女子のとつとされひでおまじよかな 北八 奇麗にいゝが立て小便
するには誤る 髪結 イヤお江戸の女中も大きな口をわかんして欠びさつそにねのら
色氣がさめるがな 北八 それでも女郎又江戸のとど江戸にい死はりがあるから面白い
此方の誰がいつても同じとでねつららふると云ふ事がねへから信仰がうぢひ様だ
髪結 イヤ此方のはうではお前の様あお方が行んしても。ふらんさかい夫でゑいじや
おませんかいあ 北八 實様己れを安く云あコレやんの事だが 髪結 ナットあをのかんす
とされ升がる 北八 イヤさらあくつてもごうせへよ痛へ髪剃だ 髪結 痛ひはづじやせい
な此髪剃の。いつやら研だま、じやさかい 北八 エ、めつそうあ。なせ剃たひことよ研

ねへの 髪結 イヤそあるよ研と髪剃か。へるさかいハテ人さんの頭まの痛のい。こちや
三年もこらへるがあ 北八 どうりこそ痛くて。一本宛ぬく様だ 髪結 あんばいとい
とて。たかで命よさばるとい。無があ 北八
エ、そりやアまれたことよもうく月代
の能かげんよしてくんぢな 髪結 おまへ逆す
りのおきらひかあ 北八 エ、其剃刀で逆剃
よやられてたまるものか頭の皮がむける
だろ。もうそこのいひからぐつと髪を
つめて結てくんぢな 髪結 (ハイ) くら
ふけじや此ふけのどれる事がお升がな 北
八 どうぞと、れる 髪結 ぼん様にあらんとぞゑいがな 北八 エ、いめへまーひとをいふ
髪結 根のこなるでようお升かい 北八 イヤくもつと引つめてくんぢな兎角此方の方へ



くると髪へたくそだ根を堅くつめてゆふとをきらねへ無器用な髪結さよふら是で
 いどうでね升ト此髪結これ見たかといふ程ぐつと根を詰ると月代も三ッ程ひだが
 程痛けれ共まけおし出来て目の上の方へ引釣るくらゐは堅く引詰られ北八髪の毛が抜る
 にて顔をまかめながら是でよし〜ア、能心持ちだ髪結ナント夫で。好御座りまま
 よがさ北八 あんまりよきで首が廻らぬ様ト此内彌次郎湯髪結サアあなた髪を
 されませんいな彌次 イヤどうか湯に入たらぞく〜よきで風でも引た様だ私にマア
 わしたのとよしやせう髪結 さよなら御機嫌よふトでてゆく此内女膳を持いで名々
 ひ居たりしがドレ飯喰をかいさ女今日い。まけでお肴が何もおませんじひさ彌次 是
 おきなをりて御馳走サア北八どうぞ彌次さんわつちが替りどこにある彌次 エ、此男のッレ膳よ
 つゐてほらア北八 どつてくんどうもうつむく事がならぬへ彌次 なせあらぬへマヤ
 手前への顔のどうまた目がひきつツて狐つきを見る様たせ北八 わんまり髪結め
 がこうさよ根をつめて結やアがつたア、タ首をいさかそ度にめり〜と髪の毛が
 抜る様だ上方ッレお前お汗が顔れるわいの。アレね飯の上よお汗枕を置んよさかい

○有の崇
障髪結

アレ顔たわいの。コリヤもうどつとやくたいじや北八 彌次さんどうぞふめてくんな
 彌次 いめへましい男だ。そしてマアうつ向けぬ程に。なせそんな堅く結はせよ。も
 うちつとゆるくすればい、よ手前へ大方髪結をいぢめたるふから上方 そじやさかい
 そきいあめよあはんしたのぢやあるぞいな北八 イヤもう物を云ふさへわたまへ響け
 てならぬ彌次さんどうぞ此難義をたすかるしようのあるめいか彌次 ドレ己がちとゆ
 るくしてやろうト髪の根を持ていよと北八 アイタ どうぞる〜彌次 是で宜かる
 う北八ア、ちつと首が廻つてきた。エ、とんだめよ。あはしやアがつた
 あなどりしむくひの罰が當りまへ。油断のならぬ伊勢の髪結
 自ら斯よて打笑ひつ、支度ままひはや膳も引けたるに何れも打くつろきて咄しの
 序に上方 ナント今宵是から古市へいこかひなまだ宮巡りもせぬ先にもつてへねへよ
 うだが。儘の皮やらのしやせう上方 行見やんせ私やあこで。年々捨た金が千や貳千
 のこつちやあるさかい何んばなと。もしがうけこむじや。サアはやういかんせんかい

な彌次 エ、そんなら己も髪月代すれをよかつた 上方 御亭さんく鳥渡きておくれん
 かいあ 此宿の亭主 ハイく御用でお升かいな 上方 お江戸のお客が是から山へ登ると
 いさ 妙見町のつうげんよ古市亭主 能御座りまえよ。お供えて参りましょ 上方アノ
 牛車楼か千束屋にしよじやなるかひあ 北入 太鼓の間とやら何屋ふ有りやと 亭主太
 鼓じやおません鼓の間の事かいあソリヤ千束屋でお升がな 上方 其千束屋が能御座り
 ましよ ト皆仕度するうちにはや日も暮て時分好と亭主と案内として三人とも出
 の三味線いさましくうかれ 東屋と云るよ至れば女共皆々走り出 よふ御座んぞた直よお二階へ 藤屋の 藤屋の 藤屋の
 てもひひかいあサア彦案内致しましよ ト亭主を先各々二上方 時彌次さんこう
 しよじやなるかいあ。お前方をお江戸でゑらい大きな店の番頭衆よ。まよまやあるか
 いあ 藤亭 そなるおとが能御座りまえよ上方然し訛らんしてのあかんわいの上店と云
 もんじやさかい京談で遣んせにや。工合が悪かるが。どうじやいあ 彌次 そんな事持
 てこいだ。すつぱりとわつちが上方でやらかしやせう。コレくお女子衆く鳥渡さ



ておくれんのいな私やなんじや、ら。と
 つともうはや。ゑろう咽がかわくさのん
 茶々ひとつ。持て来ておくれんか 女ハイ
 く 彌次 ナント京談ゑらいかくへ、畜
 生めが 上方 イヤきよとる者じや。でけた
 ト此うち女酒肴を持出し進める藤
 屋初て段々に廻ると上方人引請て
 コレお仲居お山さんいとうじやいあコノ
 お方いあ。お江戸のゑらい。れ店の番頭さ
 んじやさかいあんじやろとおやまさん
 ありたけ出さんせお氣よ入と百日も二百
 日も御逗留でお金のゑると根のらはか
 ら。とつとおかまひあるお方じや 藤亭さ

よじやわいお私が去年お江戸へ参じたときお店の前を通りました成程えらい御大
 家じや。あまたの御支配ある方は。兩替へ店と見へまえたが是も大きかお見世でお
 舛更いの彌次ナニサ格別えらい見せでいなわいの。間口がやつと三拾三間ぼつて
 佛の數が三万三千三百三拾三人くらしやさかいえらい賑やか事いさ藤亭京のお
 店の儲か六條數珠屋町であつた彌次 サイノわたまがと、さんが、さんえさや案じ
 てゐさんせじやあろよ。こゝろよお山ばかり買ふてとつともふ。えらいやくたいじや
 女 是いし皆お出んかいさト呼立る聲に何方様もよう御座んした彌次ハ、アド
 れもえらい出来じやあ 上方 番頭さん盃を。ちとあつちやへさ、んせ 彌次 アイもて一
 ツあげうかいト其中で壹番うつくしひ奴北八 かいらの太鼓の間が見たわがどうだ
 上方 又太鼓の間といはんぞ鼓の間じやわいな 女 鼓の間よ是もお江戸のお客さん方
 が子供衆よせて踊らせてじや。アレ聞んせ此内奥の鼓の間に踊がはじまチテチレ
 チ、ハ、トテ伊勢お鈴風や塵も拂ふて木陰の池も浮かべる月の顔化粧の里の色
 チレト ンと唄 鈴風や塵も拂ふて木陰の池も浮かべる月の顔化粧の里の色

無聊 ○北八

々よヨイヨイヨいやさア 上方 イヤア奥で踊りを初めあつたそうじや此方もコリヤ
 面白成てきたちと大きな者でやろむな 彌次 そうさとなだおつに浮流て来たもう京
 談も何も面倒よあつたヨイヨイヨいやさア 上方 イヨトテ 又奥 目たつ淨名
 も面白き和らぐ唄や三味線も足もえどろまたちかへり又も今宵の約束ハヨイヨイ
 よいやさアトテチレ 上方 コリヤえらいト時にと下拙の私しめが相方のお山さん。
 コレお前名の何と云ぞいの何ぞやお辨わりがたいの誰あるふ勢州古市千束屋のお辨
 女郎と云ふ美しくしひ可愛らしい女子の辨才天女様の添けあくるも尊くも京都千本通中
 立賣ひよれと上るところ。透栗屋與太九郎様の相方じやちとねき。よらんせんかひの
 ト手を取引寄る此京の人の酒も酔と何でも叮寧よくと云事か。くせよて段々く
 だをまさ掛る彌次郎の初よ我が盃を差たる。お山故自分の相方と思ひ居たし京
 の男我か相方の様よ 彌次 コレ京のお客ソリヤわしが相方のお山さんじや 上方 イヤ
 いふ故やつさとして 何いはんぞいの。コレ女中のお仲居お前名の何と云てじや 女 ハイ金と云ひいさ上
 方ソレ 勢州古市千束屋の仲居お金女郎又京都千本通中立賣ひよいと上ル所透栗

屋與太九郎が先刻なる〜引合て置たアノ美しくしひ可愛らしひ辨才天女のお辨女郎
 といふお山さんの則ち京都千本通中立賣 彌次 エ、やのましひ千本も百本もゐるもの
 かへ何でもから初手つぺんよ己が酒盃を差て置たト云ハ江戸よてハ。女郎の座敷に
 ひれ共。此邊よてハ左様のとい無く只内々よて茶屋の女房あるひは女などよさ、や
 きてあきば誰。是ハ誰と相方を極めて置ゆる京の人先刻仲居へ渡りて此中よていつ
 ち上たる物を自分の相方と定め残りを彌次郎北八と己がさりやくして極めて置た故
 彌次郎ハ其事を一向しらす江戸のかくよて盃を差たるお山を我が相方と思ひ居た
 しゆる儲こそ此いさくさあて 是ハいさアノお山さんハ。此人さんの相方お前さんハ
 こちの島田番さんじやわいな 彌次ハ馬鹿ア云ナ。此中でアノおやまが目につゐたのら
 夫で己が酒盃を差したよ違ひハなる。そこでわしかね山かひさ 上方 ハテ悪ハがてん
 じやわいのこなさんハアノ江戸ハ何所じやいな 彌次 江戸ハ神田の八丁堀枋面屋の彌
 次郎兵衛様と云ちやアちとひねくつた奴様たア 上方 其ハ江戸の神田八丁堀枋面屋の
 彌次郎兵衛殿と云ひねくつた奴様ハ京都千本通中立賣ハよと上る處邊栗屋與太九
 郎が相方のお山勢州古市千束屋の 彌次 エ、何を拔しやアがる邊栗屋ハ與太九郎もあ

○北八 無聊

されらア 上方 イヤ此ハお江戸神田八丁堀枋面屋の彌次郎兵衛殿京都千本通中立賣上
 る所。邊栗屋與太九郎を京都千本通中立賣上る所。邊栗屋與太九郎殿と云バまだしモ
 夫と京都千本通中立賣上る所。邊栗屋與太九郎と呼捨にさんしたのそこで持てから
 に京都千本通中立賣 彌次 エ、喧ひよくしやべる野郎だ 北八 おらアそんなとより太鼓
 の間か見てへ太鼓の間ハ何所だ〜 女 太鼓の間ハあんじやいし鼓の間のとかひな
 北八 ナ、其鼓〜 上方 イヤ鼓 じやあるが。あんじやあるが。此邊栗屋與太九郎が
 相方じやわいの 彌次 コレ悪く洒落るホ。なんでも鼓の間ハ己がのだ。悪ハ敵ハ役じや
 アねへが。いやでもおふでも抱てねる 藤亭 ハ、あの廣ハ鼓の間をかいか 彌次 ヲ、
 廣くてもせまくても頓着はねへ己が者だ 上方 イヤ〜〜〜〜〜 こそりやさ、んわひ 彌次
 さ、んとも有もの誰が何と云ても京都千本通中立賣枋面屋彌次郎兵衛様が相方だ
 ハ 上方 イヤ此ハお江戸神田八丁堀上る所邊栗屋與太九郎が買ふたのじや 北八 ハ、お
 前へ方は何を云やらどつちがどうだかさつぱり分らなくなつたホ 女 として此ハ方は

○彌次、
濃中京、
談所が歎、
非常感、
一生懸、
命俱不、
載天テ之、
仇耳

京のお方じやと云んしたよものいひがいつの間よやらお江戸じやないか 彌次べら棒
め此いそがまひに京談がやつて居られるものか 女あんまりお前さん方々かふて
じやさかいッレ見さんせお山さん方は皆逃ていかんしたわいな 彌次 いめへましひも
ふ歸るべい 女マアようお升がな 藤亭 モシこうまよのひな是から柏屋の松の間をお目
よかけふわいな。但し麻吉へれ供しよかいな 彌次 いやだく巳らア是非歸へるく
藤亭 ハテ能御座り舛 彌次 イヤとめやアがるか。いめへましひ
色々あゐるさつし留ても留らまふりはなし 是いしあんじやいし 彌次 とめるなよせへ
出かけるところへ相方のお山初江立いで 初江 お前さん斗りそなるよやア歸るくと云はんそが
かいし 彌次 イヤそうでもねへが爰をはあせく 初江 わしやいやいし ト又かけたま
引どらへむり無休 彌次 イヤ羽織をどうするよこせ 草入を取られる
サ巳らア歸るく 初江 じやうのこわぬ人さんじや 彌次 コレ
じまたる越中ふんどしをまめて居たりし故裸にされて 彌次 コレくもうかんよ。ま
いたまらぬと大きにへさるさ着物を両手は押へて

てくれ。初江 そじやあから。こ、よ居さんとか 彌次 ゐるともく 仲居 初江さんもう堪
忍してやらんせ 藤亭 サアく能御座り舛是へ 元の處は引きさへる
面白く 彌次さん斯もあるふか
むくつけき客も今宵の持るあり。名は古市のおやまなれども
此一首に皆々笑ひを催ふし藤屋の亭主仲居共がそこら取片付て夫くよ座敷を設け
酔倒れたる上方者を引立て案内するよ北八も俱も出行けの跡に彌次郎一人残りたる
よ女 サアくお前さんも。ちと彼處へ 彌次 ド行やせう。どこだく 立てゆく此彌
次郎至て見へものよて彼のよしめたる如き。ふんどしをまめたるが殊の外氣よか、り。
ひよつと見付られたら恥のふき揚ならんとふところの内よそつとはづまけんじの窓
より庭の方へはふり出し跡先を見廻し人 斯て夜も更渡るに奥の間の川崎ねんども
おのづから鎖り旅客のぬびきの聲かまましく鐘の音もはや。七ツ響て雞のこゑ。万戸
に鳴ひ夜もまらみか、る明り窓の障子に驚き起きあがりて目をこすりながら 上方サ
アくどうじやいさ。起さんせもういのわいな 北八 彌次さん日が出たア歸らねへか

ト兩人彌次郎が寐て居る
 所へ來り起と彌次郎起て「ヤレ〜。ぐつと一寢入よ。やらかきた。おやまは。是いし今日も居さんせ。彌次 とうらもねへ歸る〜」ト皆〜したくして出かけるお山ども送りの方を「是いしくアレ見さんせ庭の松よるもじが掛つて有わいなア。彌次郎の相覗き」のいてかんせほんよいやるな誰じやいな 彌次 ハ、アこいつのおかしひ。羽衣の松じやアねへふんどし掛の松も珍らしひ 北八 彌次さんお前のじやアねへか 初江 ホンニ夫のしあのさんの禪じやあるかひな ト彌次郎が顔を見て笑ふ彌次郎の宵まれんじより居るをわかしく思ひあがらさ 拾たるふんどし庭の松の枝に引掛りてぶら下そが夫とも云れそへるきよて ナニ遠方もねへあんききたねへ。ふんどしをナニ己らがするものか 初江 そじやて、ナ夕べ私や此お客さんの着物をぬがすどてなアよう見たがあなひな色の禪じやあつたわいな 上方 チ、そうじやあるぞい 彌次 馬鹿ア云つせへおらア木綿ふんどしひさらひだいつでも羽二重をまめて居る 初江 「ヲホ、」虚やのあれじやいし 北八 いかさま己らも見覺がある儘かよあれだろふ夫が虚なら彌次さんお前へ。いま裸になつて見せねへ。今朝ア宿入の奴様で振て居るよ違へそねへ 初江

そうじやいし「ヲホ、」是いし久助殿其の禪の。お客さんのじや取下んせ ト庭よそう男を呼びかけ差づすると此男たけぼうきのさきにてかの「さあらばふんどしを。参らふんどしをつ、かけてとりれんじの前へぐつと差出して」 北八 「ハ、」彌次さん手を出しなせへそうソレとらんせどうじやいな 初江 チ、くさい 彌次 エ、あさけあることをぬふ己がのじやアねへと云に 北八 そんら。お前へのを。まくつて見せあせへ ト彌次郎が帯を解又掛れば振 皆々「ヲホ、ハ、」ト大笑ひし三人共此所 彌次 エ、いめへましひ北八めが已に赤恥をの、しやアかつた 北八 松よ。ふんとしのぶらぶがつたもめづらえひ
 ふんどしをわすれて歸る淺間嶽。万金玉を古市の町
 斯て妙見町立歸りたるよ其日は空の景しき。いと長閑なれば急ぎ。内外の宮巡りせばやと支度わらままよして立出るよ行程なく今戻りし古市の上り口よはや見せ出して各々小屋よひきたつる。いにしへの。お杉れ玉が面影をうつせし女の二上りてうまペンペラ〜チャ〜トむせうよ引立る唄のきやうがいかんとも分らる往來の 彌次 旅人此女の顔に錢をあげつくるを夫々顔をふりよける

あつちらの新造か磨へぶつ、けてやるふト錢二三文なけるとち、やつとよけて當らせ、ベラベラ、北八
 ドレ己が當て見せようハア是のしたり、上方何としてお前方がどるゐるはより附さんし
 ても。的ら當さともんじやなわいの、彌次今度の見なせへハア是のいな、北八チヤ
 差くるみやらかしたな夫でも當らぬコリヤ仕様が有。あんまり顔が憎いトちい
 ころを拾ひてあげ付るとかの女ばちよてちよ彌次アイマ、北八ハハハハ、こいつ
 ひと受なげ返せば彌次郎の顔へびつしやり彌次アイマ、北八ハハハハ、こいつ
 いおは笑ひだ、彌次ア、いてへく

とんだめに相の山とや打附し。石返したるあとぞおかしき
 斯て爰をうちすぎ中の地藏町に至る。左りの方に本誓寺といふ勝景の地あり又寒風
 と云る名所もあり五知の女來。中河原。様々あるすよ追おし。夫より牛谷坂道に掛れ
 の女乞食共。けはひ飾たるが。往來、錢を乞ふ又十二三れ女共。紙みて張たる笠の
 色どれるをかふりて。やてかんせ。お江戸さんじやあるのいな。先島さん花色さん
 頬かぶりさん。やてかんせ。やふらんせ、彌次、やかましひ附あ、乞食、アノいはんきと

いさお江戸さんじや。ちやと下んせ、北八、エ、ひつ張あツレまくぞくトよいかげん
 錢をふり出せば、よう下んしたやトひとり、禮をいふ此先、又七八歳斗りの男
 乞食共各々拾ひて、の子白き鉢巻をきて袖あし羽織、立付などをは
 きたるが手よさいはひ扇子などを持踊、ヤレふれ、十鈴川ふれや、千早振神の
 後、網笠着たる男さ、らをどり、お庭のあさ清めとるやさ、らのゑいさら、ゑいさらとソレ、天中、や張ひぢじやや
 てかんせ、北八、ソリヤやてかんぞぞ。まかも四文錢だ、乞食、四文錢あら釣を。三文下
 んせ、彌次、こゝつ虫のいひとをいふ時に此橋を宇治橋と云のり、上方、さよじやアレ見さ
 んせ、網で錢をよう受てじや、北八、ドレ、ト橋の上より覗き見れ、竹の先よ、上方、彌
 次さん小錢があらはちよどかさんせ、ト彌次郎が錢をかりてさつ、上方、ゑろふ面
 白いあよう受くさる。もちつとはつてこまをかい。コレ北八さんお前もちどかさんせ
 ソレ又ほるぞく、ハハハハ、彌次、コレ京乃お人お前人の錢ばかり取てなげ
 るちとおめへの錢をもあげさせへ、上方、よいわいさお前方の錢じやて、。私が錢じや
 て、かはりやせんわいの、彌次、それだどつてあんまりわたじけねへ、上方、ナ、私が此前

參宮した時はな。きかんせゑらいわはじやあつたわいさこ、で錢五貫か拾貫得つた
わいのあんまり面のよくなる程よう受けあるさかい何じやろと今度の網やぶつてこま
そと。ふところよ丁銀が一枚あつたを。つひどはつてこまきたら。矢張。網で受くさつ
たさかいコリヤどうじやいさ。丁銀やつたら網が破りよかと思ふたよ。ねからたわ
いじや。どして網留りくさつた。まらんと云たりや。下よあるやつめがソリヤ留る
はづじやとぬかしくさる。なせじやと云ふと、テ網の目に金留るじやと。ゑろうわし
をへこましくさつたわいの。い、い、い、サア、い、こ、い、さ、く、

なげ錢を網よ受つ、往來の。人を茶よとる宇治橋の元

是より内宮一の鳥居より四ツ足の御門猿頭の御門をうちとき御本社よぬかづき奉つ
る是天照皇大神よて神代よりの神鏡神劍を取て鎮座きたもう所ありと

日よまして光り照そふ宮ばしら。吹いれ玉よ伊勢の神風

爰よ旭の宮。豐乃宮より初めて河供屋。古殿宮。高の宮。土の宮。其外末社悉く。記す

に暇なし風の宮へ掛る道よ。みも裾川と云ふあり

引せりて幾代かわとをたれたまふ。御衣裳川の流れ久しき

そべて宮巡りの内自然と感涙肝よめいじて有難さよまじめとありて洒落もさくむ

だも云ねをまばらくの内よ。順拜おはつて元の道よたらいで頓て。妙見町に歸り爰

みて。かの方上者と別れ。彌次郎北八兩人のみ藤屋を畫立として外宮へ參る。是則豐

受太神宮なり。天神七代の始め。國常立の尊と申せし御神なり。神璽の宮。寶劍の宮。

其外數多の末社を拜み巡りて天の岩戸よ登りたる。彌次郎いかしがけん。まきりよ

腹痛みて。あやみけるゆゑ早々よ此所をかりたち。かたをらよ休みて丸薬をど用ひ兎

角そるにたねがたけきを急ぎ廣小路よ至り宿をからんと其所此所を見廻り内ある宿

屋の亭主。モシ、くお泊じやれませんかいさ。北八。アイ連の者が少し虫がかぶりそうだ

から宿をお頼みややを。亭主。サアお遣入りあさんせッレお鍋奥へおとせませんかいやい

女能うお着でお升。北八。サア彌次さんあがんあせへ。彌次。アイタ、北八。エ、きたねへ

顔をそるお前へ「コリ」何々の罰が當つたのだ。彌次「ナニサ罰を喰た覺へはねへ大方今朝の飯が當つたのだらう。亭主「お飯も。あがりつけささらんと當る事がおまじよ。北八「エ、コ「いくちのねへ事たサア。奥へ。彌次「アイッ。ト北八よかゝるは通る亭主も。さぞ御難儀でおまじよお薬でもわかりましたの。さるひわたくまのこの妻が今月臨月でお升がさ。昨日からちとどぐれませんのでいんま醫者様を呼ぶ参じたがあちたも見てお貰ひさせんかいさ。彌次「夫はどうぞお頼み申安。亭主かしてまりました。ト勝手へ立ておく彌次郎の。北八「どうだ湯でも茶でも酒でも呑たくいねへか。彌次「馬鹿ア云さ。アイタ「むせうふ腹がさる。さる北八雪隠の何所にある尋てくりや。北八「お前何所よ置た袂でもねへか。彌次「わはうつくせナニ雪隠が袂にある者だ何所よあるか見てくりやとぬ事よ。北八「ハアそうかドレ見てやろう。あつた。アレン。椽側の先ふ落である。彌次「まだぬかしやアがる。アイタ「ト漸々の事よ立上宿の女勝「ハイお醫者様がれたわいさ。北八「サア。是へ。ト此内近所の醫者の手より出「ハイお醫者様がれたわいさ。北八「サア。是へ。弟子と見へて。こげ

茶の木綿紋付は黒縮緬の肩の「エヘン。是の不順を天氣わひで御座るドレねみやひける羽織を引掛たる坊様。ト北八のそとよとわり北八「北八「イヤ私では御座りませぬ。醫者「ハテ達者か人くを。が。みやくと見ようとする。の脈から見くらべねば。病人の脈がわからんわいの。まづ貴様を見せさされ。ト北八とりしを。ハア成程貴様はさんどもさる様じや。北八「左様で御座り升。醫者「お飯のどうらく考へ。ハア今朝程飯を三膳汁を三盃食ました。醫者「そうである。平は大方一ツじや。北八「ハイ今朝程飯を三膳汁を三盃食ました。醫者「そうである。平は大方一ツ盃じやある替てい参るまい。北八「左様で御座り升。醫者「そうじやある。この脈休でいどこも何んどもさるよふじや。北八「左様で御座り升。醫者「ナントよう當りましたら凡と醫の意ありとやて脈休をもめて勘考致す所が第一で御座る氣づかるさひ最早お暇致そふ。北八「モシ。病人を御ろうじて下さりませ。醫者「ほんにそうじやあつた。私のかはつた癖で兎角病家へ参つても病人の脈を見ることをどうもわすれて成ん。いの然々見せともさる事やが。次手よ見てまじよ病人のいづれに御座る。北八「ハイ只今雪隠へ参つており升コレ。彌次さんね醫者様が御座つた早く出させへエ

○彌次
而有三此
醫者一是
自然良
能

ト大きな聲をすれば「イヤ未出られぬお醫者様どうぞ是へお出下りませぬ」北八
「彌次郎雪隠の中から」イヤ未出られぬお醫者様どうぞ是へお出下りませぬ
エ、めつそふお醫者様がそこへ行れる者か無頼かことをいふ彌次「そんなら今で
トやうく雪隠よりいづれは醫者」ハ、ア貴公のコレヤ血の道じやわいの兎角
臨月さどよのおこるものじや彌次「イヤ私に孕んだ覺へは御座りませぬ」醫者「ナニ懐胎
で無ハテめん様な」イヤコレ「わしか師匠が悪い廣小路の伊賀越屋から呼よおよこした
が。わこの病人の産月じやさかい大方血の道がおこつたのじやある。其つもりで藥
盛かい、とお教ておこされたが。そりや貴公の事でのあかつたわいの。北八「左様で御座
りませよ血の道の愛の内儀の事で御座りませう。此男のそれでい御座りませぬ」醫者
「さよじやコレヤわしが間違ひじやないの。然しあんから貴様も夫にして置かんすと
藥盛よも一所にして面側にあらうて能うか」北八「成程コレヤお醫者様のおつしやる通り。
彌次さんお前へも血の道として置がい、ぬ彌次「とんだ事をいふ男に血の道があつて
たまる者か」醫者「イヤ」外の病氣も面白る。何も私に稽古の爲や一休貴様は何

病ひじや彌次「私は先刻から虫がかぶつてありませぬ」醫者「大方コレヤ腹の内をかぶ
るじやある」彌次「ハイおつしやる通り腹の外では御座りませぬ」醫者「そらじやあるコレ
女中。供の者も藥箱をこせと云て下んせ」女「ハイ」かしこまりましたイヤもし
お供の人は見へませんまいか」醫者「見へん等じや連れてこんさか藥箱のわしがもつて
来たわいの」トさげてきた風呂敷包「女中、おのし。あかたは竹のじて煮豆盛様よし
ておやわいな」北八「ハア聞へた職醫者様だからそこで竹のじをお遣ひささると見へた。
そしてあなたのお藥袋よの繪が書て御座り升がどう致した事で御座り升」醫者「イヤ
れ尋で面目赤ひが生得手習を致した事かあるさかい」北八「ハ、アあかた無宿者なア
醫者「左様」かゝるもく字かよめぬ無宿じやさかい夫で此様は藥の名を繪に書て置升
じやて」北八「是は面白い左様なら其道成寺の繪は喜んで御座り升」醫者「コレハ桂枝じや
て北八「あんま様を大方大黃で御座りませうがコレ犬が火に當つてあるの」醫者「陳皮
」北八「コレ産婦の傍に小便して居る」醫者「あれたと山梔子」北八「印判は毛のはへた

は 醫者 半夏 北八 鬼が尻をひつてゐるの、 醫者 夫の根強 北八 ハ、面白く時よお
 藥の 煎じやう常の如し生姜は一トへぎか入なさい 北八 わさびでいわるふ御坐り
 升か 彌次 馬鹿ア云な是の有がたう御坐り升、ト此内何や勝手のかた俄のよさどが
 てし、コリヤ、お鍋やい、とりわけ婆々殿へ人をやれ、久助は湯をわかせ。はや
 めはあるか早う、トさはき立内こなたよ、又彌、アイタ、北八 彌次さんどう
 した、 醫者 コリヤたまらん、病人のそむいられぬ、トそう、のけだして
 レ取り上婆ア様のお出と下女のお鍋がうるたへて婆々の手を取是、是はしたり寐て
 へ、と彌次郎か布團かぶりて寐て居る所へ連れてくると取揚婆々、是はしたり寐て
 居さんして、のあらんわいのサア、起さんせ、ト彌次郎を引招起、アイタ、婆々
 さんほうさんせコレそこち人扱、どうじやいお、 彌次 アイタ、婆々 そじや、ト
 婆々もうるたへたうへいつたい目が少しうと、サア、皆さんせんがひさ此、ト
 く内の産婦と間違ひ彌次郎が腰を引立、トせき立にぞ北八のあされかへり
 爰へ来て誰を腰を抱て下んせさア、早う、トおかしくこまやどうする知んと
 とほげた顔て彌次郎、彌次 コリヤ北八どうするア、痛へ、婆々 そなるな氣のよは
 が腰を抱て引立れば、

○此見
 長頭無
 耳目鼻

いとでい成んわいな。ぐつといけません、ト彌次 あ、でいけんでたまる者か雪隠へ
 行てへ。はあした、婆々 こうかへいてい成んわいの、彌次 夫でもこ、でいけむとこ
 、へ出る、婆々 であるから行まんせと。云のじやわいの、ツレウ、ン、そりやこそもう
 頭かでかけた、 彌次 アイタ、そりや子ではねへ。夫をそんなあ。ひつばらしやんあ
 ア、痛へ、トもかくをかまはず婆、い、エ、此婆々アめ、ト横つらをはりと
 コレ、痛へ、つとひつれば彌次郎腹を立、トばす婆々あされて、
 此血違ひ、トむしやぶりのさか、るさはぎのさむちう勝手、おぎやア、婆々
 そりやこそ生れたイヤ爰じやなる何所じやい、トうるたへ廻るうち彌次郎も
 りこむ亭主は勝手、コレ、婆々様先刻よから尋てゐるにもう生れたわいの。はやう
 よりとんで来り、ト婆々を引たて連行は勝、目出たひ、三國一の玉の様な男の子の生きた、ト悦
 の聲共、亭主よ、コレ、ハお客様おやかましふ御座りませう。先わたくし妻も安産致
 ました、トいふ内彌次郎、さて、お目出度わしも今雪隠で思われ安産したらはわそ
 れた様よ心よくなりました、亭主、夫はあなたもお目出たひ、北八 お互へよ目出たひ、

ト是より悦びの酒汲かはして取り揚婆々の間違ひやら何やら
らかやら咄まわひて大笑ひとなりける目出たしく

〇六編

諺云ふ旅の恥い書捨てゆく落書の國所の欄干に。と、まりかのづから往來同國の
人の目を慰さめ被り行脚の笠印の態と己れひとりの心をよろこばしむるも皆ともよ
驛路の業ぐれ相ひ宿の木枕は結ぶ縁へ出雲の帳外。二方荒神の隣り同士の長屋附合
の外よして其心くも出る儘をしやべりあくまでに喰ひ掛取道連にせざれば晦日の
愁よわはせ米糶脊負て出ざれば鼠追ふ世話もなく。名にしおふ東男も薩芋に髪を
あで。花まださ京女郎も團子の串は顔ををかき。えらぬ火の盡そたはけに欠け落し
て走るあれば雲井路の道草喰ひ。遊山旅の。のろつくあり並松の根は腰打掛けて金比
羅参りの樽を開き。街道の真中よ。ひよくり出して諸社順拜の鈴口を振る藪中のあ
り様まよ命の洗濯もの引ばり股引草鞋は何國迄も足よまかそる雲水の樂しみるも
云れを爰よ東の都神田の八丁堀邊んよ住む彌次郎兵衛北八と云る二人連のあまけも

〇悪量
〇着想
〇妙

の神風や伊勢参宮より足さ累の大和路を廻り青丹よし奈良街道を経て山城の宇治よ
掛り。爰より都よれもむかんと急さける程よ。やがて伏見の京橋よ至りけるに。日も
西にかたむき。往來の人足早く下り船の人を集める船頭の聲々やかましく。サア
今出る舟じや乗んせんか大坂の八軒屋船じや。乗ていかんせんかい 彌次ハ、ア是が
かの淀川の夜舟だかナント北八京から先へ見物とる積で来たが。いつそのこと此舟
よ乗て大坂から先へやらかそうか 北八 夫もよかるふモシ乗合も有りやぞか 船頭 ぞふ
さのゐの。乗なら早う乗んせ。いつさに出さのい。コレは草鞋とゐて乗んせ。ゑら
ムへけたれじやな 北八 エ、何をぬかしやアがる氣のつゑ、べら棒だ 彌次 コレ北八手
前の包も一所よ已か風呂敷よ包でおこう 北八 船頭さんコリヤア何所へとほるのだ 船
頭 ところ坊様のねさへ割込んせ 彌次 御免なせいヤアゑいとな 問へ割り込みとせる
乗合 コリヤゑろふつめくさつた船頭さん布團一ツかさんせ 船頭 ソレとらんせ。サア
皆ろいひかひさ下に居て下んせ苦ふくさか 商人 錢買なされ錢はよござり升かき



商人 水からさとう餅〜商人 かん酒よど
 ざり升かいあめんばいよま〜
 船頭ども舟よ若をふるて〜舟の追風よ帆掛て。走
 任舞ひ掉差出て唄〜
 我の。こがれて身をあせる〜ソサレソレ
 なんぞいコリヤゑるふ空が悪る成たふろ
 かまらんわい 乗合せんゆうふべりちう
 まやう島じやある。精進が悪るい。さかい
 コリヤ雨じやあるぞいの。ハハハ時よ何方
 もじよらかゐて居あさらんか今の内味能
 せんと後よ工合ひか悪るさかい 商人コ
 レお前ちと退てかさんせ襟の上よいしか
 つてじやわいな 大坂の人 コリヤ無調法免

かく乗合のお互ひも何じやるとふ〜やうしてくれなされ 京都能わいあお前大坂の何
 所じやいあ 大坂私や道頓堀 京都かい道頓堀の衆は皆藝子じやナント爰で何なと一
 ツやりあさらんかいあ 長崎の人 コリヤよかたい。船中の寐ふり目覺しにわきた衆。
 一ツ宛藝能やらじやつたら〜のたい。うんども長崎の者じやが。能毛川島の南瓜枕
 で。弁さしぱつさりでもやるふはいよま 越後の人 コリヤゑいとんし。しどもり。越
 後のものだが長崎の兄やさが。やらしやつたら。わしも國風のおけさ松坂でもかたる
 べいと事 北入こゐつり面白〜マア長崎のお客から始あせへ 長崎人よか〜是してや
 ろふばい 手を打た〜唄 お前よかばた。わしよ振て、大分。色女どちぎらんすコ
 リヤ蛙が飛あら桶かぶせ夫でも飛ぶなら。きねおけ〜。コリヤ〜
 やいな 乗合イヨ〜ゑらでけじや 越後人 私どもやるべい皆あ夫からトコトとはや
 してくれさつしやい 長崎人よか〜合點あろふ 乗合皆々手 手を打た〜トコト 越後人お長
 な長久かんだ豆出たかれ長な 乗合トコ 越後人 新潟一番水牛の櫛を 乗合トコト

越後に主にさつくれべいと六百文で求めた乗合トコ彌次ハハハ面白く京都
 イヤ江戸のお客きやくは何ぞ所望しよぼうしよじやあゐかい 彌次ソリヤもう琴三ことしやみ味鼓あじこ何なんんでもち
 と宛つづりやそが愛こよやアそんな物ものねへからはじまらねへ 京都 お前まへへのこうせき
 ではこはいろ。聲色こはいろがでるじやある誰たれなど江戸役者やくしややりなされ 彌次こはいろ。聲色こはいろも二十や。三十ばかり
 は遣つかひやそか誰たれにしよふ源之助げんすけか三津五郎みつごろうかイヤ高麗屋こうらいやにまやせう然しかし江戸役者やくしやを
 お前まへへ方かたよやア。分わからねへから。つまらねへ 大坂 ハタゑいわいの一ひとッやりあされ 彌次
 味あじ増まじやアねへが聲色こはいろの江戸でも一番いちばんといふ男おとこさ誰たれでも後あろを唄うたふ人ひとがあるときつ
 はりやつて見みせるがなア 京都 後あろ唄うたふとは呼よび出しのとかいさ私わしがやろわい口三くちやみ弦ひじ
 やチ、ツ、ン唄うた。是こはお江戸の堺町さかいまちや吹ふきや町まちも名なも高たかき役者やくしや聲色こはいろのどうじやいさ
 誰たれじやいな松本まつもとの幸四郎こうしろうでせへチ、ン。乗合まつもと。彌次まんまとうばい取とりた此
 一いっ巻くわん是こへありやア出世しゆつせの手掛てがり大願成就たいくわんじゆじゆ添そじけなる 京都 コリヤやくたぬじや。私
 や江戸は五六年居ねんて此間このあひだ。戻もつたわいさ高麗屋こうらいやはとあるさ。こうせきじやなるもせん

○彌次 二十八番

もの大坂わし一ッやろわいな 京人 是このねつからでませぬ借父次かきの役者名やくしやな誰たれじや
 いな 大坂 やつぱり今のじやト此大坂者この江戸も居ゐて聲色こはいろもまんままんままと奪さひ
 取とりた此一卷このいっかん是こへありやア出世しゆつせの手掛てがり大願成就たいくわんじゆじゆ添そじけないト無調法むてうはう 乗合まんまとうばい取とりた此
 屋やア 京都 コリヤきよといト大坂おさかのお方かたのが。やんまぢや。お前まへの。高麗屋こうらいやとの聞きこ
 んんいいな 彌次きこへん答こただコリヤア信州松本しんしゆまつもとの者もので幸四郎かうしろうが弟子でしの胴四郎どうしろうが聲色こはいろだ
 京都 そんなこつちやあるぞいさハハ、ト船中彌次郎ふねちゆうやじろうのへこんだのをあかしが
 内船うちふねハ早はや彌次やじ時ときに北八飛きたはちとんだ事をわすれた船ふねに乗のりて小便せうべんすれば。よかつた者を例
 淀よどと過あて 通とほり船ふねでいどうも。あぶなくつて。まよくゐこまつた者ものゴレ船頭せんとうさん鳥渡船ちやうとふねを附
 て貰もらひてへの 船頭ふねあわがるのかいの 彌次せうべん小便せうべん。船頭ふねあエ、船ふねべりへ。ちよちよくこ。なつ
 て。ひよぐらんせト。彌次ふねあ夫おとこがで出いさりやア云い分ぶんのねへア、もうく出いさらうに成なつて來き
 たト。前借切まへかきとして十二三の前髪連まへかみづらたる隠居かくいらしさぢる様宵やまゆより彌次郎やじろう北八きたはちと咄はなしな
 どして居ゐたりける先刻まへときより布ふ隠居かくいモシく。お前まへ小用せうようよお困こまりなら。おし付つけながら見
 圓まるのふりて寐ねころひ居ゐるから

○桑名 船中有

小便事
今又綴
小便、禮
話、余、爲
一、九、不
取、

しがまびん借てあぎよかいさ。コレく長松よくイヤこゐつ。もう寐くさつたそふ
 じやモシそこらよあろぞい。だんぢ。そつちやいもてうんせ 彌次 夫ありがたふで
 ざりやぞ トくらがりまぎれ、隙をさくり廻せ、箱火鉢の後、土瓶あり上方よてハ
是をまびしよと云、今江戸もたまさか見へたり彌次郎是をまびんと心
 とり出して 御座りやした。こゐつハじんじやうぢ。まびんはハ
心へ前に當がへど
 ハアこ、に モ穴なけれはさては口はこめてあるせんが奥の方へ引こんだ者であるふと、びを入
 てつ、まはす内、さりよ小便がもる様、なり心のせくふたの落ちたをさいはひハ
 ハアこ、まも口が有と上の方か ハ、いありがたう御座りやした
置、隠居、頓て起直り
 らシウくど小便をしてしまる コリヤゑろふ寒あつた長松起て火、いともさんかい酒をどやろわいコレ目、いさまさん
 コリヤゑろふ寒あつた長松起て火、いともさんかい酒をどやろわいコレ目、いさまさん
 かくコレヤやくたいぢや トそこらさぐり廻して火鉢の火と。附木よりつし 隠居
ヤアコリヤ何じやゐハ、ア茶を焚つてもりで水かゑ入て置あつたそふじや ト云つ、
 らまびしよを出し彌次郎がしこんだ小便を川の中へ打あけ 隠居 モシ江戸のお客酒
 て仕舞すぐに樽の酒をあげて彼の火鉢の上よかけあゐら 一ト口どうじやいな 北八 コレハおたのしみで御座りやすね 隠居 もうでけたそうじや
 一ト口どうじやいな 北八 コレハおたのしみで御座りやすね 隠居 トさいろろの煮しめな 隠居 ドレおかん見ましよかいイヤ是ハけたるぢ香が。そるへ
 ど出し隠居少しつゐで



ツくコレヤ酒が悪るあつたのか。よもやそじやあろまい一ツお前香で見て下
 んせ ト北八へ 北八 ハ、いは ト引請てぐつと香で仕舞ひまが何とやら攪
ばゆきよふにて變な匂ひのする酒だど心よ
思ひあがら胸をわるく ハ、いいたたきやし
してなでさそり た 隠居 お連のお方へ上て下んせ 北八 そんな
ら 彌次さんソレ ト盃をまわそ彌次郎ハ先
思ひなんでもあれハ已が小便をした。まび
んだが夫で酒のかんをそると云いどうした
者だ但しハ已がそ、うでしびんと思て小便
したのか何よしても飛んだとをしたら心
内よふたりが顔をまかめるを見ておかしさ
こらへられす夫としらま、あの内の酒を北
八が吞たるを吹出と程おかしく。ト 彌次
つとこらへ居りま所へ盃を差ければ
イヤおらア御免だ。なせか今宵ハ酒か。吞た
くねへお酒盃はのりハイ夫へ上ませう 隠居 あがらんのかいな 北八 ナニあびるくらゐ
さ彌次さんなせ香ねへ酒と云と一番咽をぐひくそるお前がコリヤア何でもへん

○此是
酒々日
迷惑

ちさだハへ 隠居 ハ、アきこへたと有わいの。今そつちやのお方が。くらがりてしび
 んと間違へて此中へ小用迄やさんせんかいの。どうも小便喚ると。思ふたがコリヤ
 お前とじやさかい呑んのじやあるぞい 北八 ソリヤ知やせん。桑名乃渡までも此人が
 船の中で小便迄て大さはぎとやりやまら。其位のところういまか糸人さ。エ、またね
 ヘゲエイ〜 隠居 どうりこそきびしよ何か一はいあると思つたが。私や又此童め
 が水入て置れたと思ふて川へはつたがどうても小用のおどもりが残つて有たもの
 じやあるぞい 北八 とんだとた胸がむか〜とる 隠居 ア、こりやゲエイ〜 長松よ脊
 中た、おてたもやア、むさやのゲエイ〜 彌次 是はお氣の毒をモシ何ぞ薬でも上り
 やし。然し小便の當つたよは何がよかるかまらん。モシ〜 何方ぞ丸薬でも御所持な
 ら少下さぬましお 乗合 ハイどうも小便の當つたよよは薬は持ませんぞい 彌次 ソリ
 ヤアこまつた者だ 北八 彌次さん苦を。ちとまくつて。くんち 彌次 どうする 北八 小便を
 彌次 とるのか 北八 はくのたいな 彌次 ドレ舟べりへ。ぐつと顔を出して遣つし己が

かまへて居てやるふ夫由か 〽引 〽とふだまだかエ、川の中だから犬がいねへで
 わりぬ 北八 ナゼ犬か居るとどうとる 彌次 手前小便をばくに白 〽コイ 〽コイ 〽と
 よんでやるは 北八 エ、馬鹿アつくそゲエイ〜 〽此内隠居ハやう〜にはひて仕
 隠居 どうじやそつちやのお方ぬかひの 北八 どうやらこうやらよく寄りやした 〽口
 をそ、ぎてまじめな顔彌次郎ハ心の内のおかしさを 〽隠居 イヤもうおたがひよとゑ
 かくまて居る隠居けつこう人と見へて格別腹も立老 〽 〽燗をとる者があふつた。ど
 らぬめよあつた。こつちや口直しよ。跡の酒やりたぬが。燗をとる者があふつた。ど
 うせうぞいの 長松 としたらこつちやにあるほんまろしびんで酒のかん致しましよか
 い 隠居 ホンニそうむや。やんまのまびんのほうか奇麗じや。藤の森で今日買て来たま
 、で。まだ一度も小用せんさかぬそれでかんせふぞい 北八 めつそうあわやまりやそ
 ね 彌次 馬鹿ア云々茶は土瓶の茶が味し酒のかんはまびんのとだは 北八 ナニまびんの
 酒が呑るものか 彌次 そんならモシ御隠居様矢張いまのまびしよとやらよ。あさぬま
 せ 隠居 きびしよ川へ得つたわぬの。まびんのほうか新らしひさかい奇麗じやわい

ト樽の酒をしひんよも隠居長松そこ茶碗をこせ。サア、くゝんまの酒じやッ
 けて火鉢の上掛て。ト茶碗を差出を彌（彌次）いただきやせう。隠居虫のゑいお人じや着わけ
 しお前方さそか。ト次郎ちやつと引取。ト是は何で御座りやと。隠居ソリヤ鯨の油取た
 よかい煮殻わがるかい。彌次ハイ、是は何で御座りやと。隠居ソリヤ鯨の油取た
 跡の身じやさかい煮殻と云わい。彌次い、物で御座いやとね。サア北八さそうか。ト
 八へ茶碗を廻しまびんを取てつ々新らきまびんと聞て。北八小便の交らぬ酒は又
 かるほどだ。いじもゆるまいと一盃引受つと香で仕舞ふ。ト北八左様ならお隣りの
 格別だハイ上やせうか。隠居皆乗合のお衆へ一ツ宛上て下んせ。ト北八左様ならお隣りの
 ト次居た越。越後ヤレふとつ。いた、くべいと。ト茶碗取ある北八しび越後ソリ
 後の人よさと。トヤ小便のとる焼たごじやア御座らなるか。北八ナニ此しひんの新まひから奇麗さ。ト
 いでやればぐ。越後ア、ゑいとん。トサア長崎の貴兄飲つしやるか。ト茶碗を廻はせ
 つどはして。トサア長崎の貴兄飲つしやるか。ト長崎の人受り。ト長崎
 ナイコリヤ氣のどんくうちとばよ。ト隠居だん、くそつちやのね方へ上て下んせ。ト長崎
 然らあんだへさんじ舛たぬ。ト其次の人へさと是は病人と見へて色の青さめたるめ
 斗り借切よしてかゝるはうの病人。ト私や酒はいかんさかゝるこさん一ツ頂戴かんせ。ト供
 親父と二人り連よて居るが。

○因果
應報

父よのづり先刻よりしびんの奇麗ある親父モシ、く。はばかりかから其まびんこつ
 ことも聞ぬたる事なれば一向かまはせ。ト此親父酒すきと見へつ、けて二盃やら
 ちやへ下んせ手しやくにやりまじよかい。トかし段々茶碗をもとへ送りかへせば彌次
 郎兵衛取。彌次サア隠居様わけませう。隠居イヤお前ま一ツ香でおこさんせ。彌次ハイ
 りつぎて。ト左様からモシ其まびんこちらへ。ト病人の所。トハイ、それへ。トしびんを送り戻
 へちみ、く。どつぬでやる彌次一。彌次エ、く。こりやとんだこつた。トゲエイ、北
 ト息よぐつと香で茶碗を投出と。ト彌次どうした所か。トコリヤ酒じやアねへ小便だ。ト親父ハ、ア是
 八彌次さんどうした。ト彌次どうした所か。トコリヤ酒じやアねへ小便だ。ト親父ハ、ア是
 いしたりそ、うしましたとしらが所の御病人のしびんと取違へましたサア、く。酒の
 は爰よあるソレ取替て下んせ。ト北八ハ、く。是つ大でさ。ト彌次エ、もうどうしたら
 よかろう此位へあら己が小便を呑のまだしもアノ病人めがエ、わる喚のゲエイ、く
 ベツ、く。ト北八ハ、く。あの病人の顔をみろ瘡と見へて頭から首筋の當り迄迄
 く。ト彌次エ、く。もう云てくれるな咽がさける様だ。ア、くるまひゲエイ、く。ト北八
 兎角お前の小便がだ、る舟でいもう禁便にとるかい、そこで一首浮だがどうだ。

小便を人ふ吞せし其むくひ。巴も吞でよいきひしよあり

此騒動に船中各々寐むりを覺し。大笑ひとなる内。舟にはや平方と云る所ぢかくあり
たると見へ商ひ船。爰よこぎ寄く。商人飯しくらわんかい酒呑んかいサア。皆起
くされ。ようんさるやつらじやあ。ト此舟に附て。遠慮なく苦引きひろげめき立る
人のしるところ也實言乗合。此商ひ舟は。ものいひがさつよ云を名物とすると
ばよ買ことばなれば。コリヤ飯持てうせい。えい酒が有るかい。北八いか様腹が
へつた爰へも飯を頼み升。商人我も飯喰かッレ喰へ其所やのわろは。どうじやい。ひも
じそふな頼してけつかるが錢なるかひ。彌次イヤ此べら棒めら何をふざきやアがる乗
合。此汁の無味替りねから。ぬるうていゝんわい。商人ぬるかア水廻して喰ひかれ。乗合
何ぬかぞうい。そして此芋も牛房もくさつてけつかる。商人其筈じやえい所の皆内で
焚て喰て仕ふたわぬ。長崎イヤこやつ。太膳奴よヲ。いかな。ちうつるばつてん。その
ぬしかよふをい。越後頭部。よやして。やつくれべいか。商人ちよこざぬかさと。早
う錢おこせやい。コレそこな親父錢どうじやい。親父此奸盜めら。たつたいま取

○蒲鋒
目三食
小屋

さつてコリヤ早ういぬやい。定めしおどれが女房妻の晝の袖乞して生米かな喰らふ
さかい今頃いふつくと腹ふくらまて白い泡吹て居よぞい。商人チ、我れが内は大方
四條の蒲鋒じやある雨が降そふじや水の出んささ早ういにくされ。彌次イヤこいつら
ア云はせておさやア途方もねへやつらだ。横顔ア張飛ばとぞ。乗合コレくお前腹立
さんすなアリヤ爰の商なひ舟であるよ。ものどんざいよ云のが。名物じやわいの
彌次夫だどつてあんまりな。商人ワアイあやうよ。トこき出彌次コリヤまらあが
れあはうたア誰がこつた。ト一人。りさんで思はせ立あがるひやうま。アイタ、
わらが膝頭ふんだ。長崎うんどもが頼。ふう。大分うつた。アイタ、彌次コリヤ御免な
せへ。トやうく。斯て船のひら方過たるころ雨催ひの空。俄に暗くなり降出まわは
やと見る間も篠をつく大雨とあり。とまを漏れ乗合の上を下へと。さわぎ立船頭も斯
ていはたらき自由やら頼て堤も船をこぎよせ。としばらくか、りて見合せけるが。爰
ハ伏見と大坂の半途よして登り船も降り船も皆落合混雜し。がたひしど。岸に寄て今

やと露を待居たるに。凡そ一時余り過たるとおぼしき頃。漸く雨やみ雲されて月の影
 八幡山よさし出たるに船中各々勇みたち彌次郎北八も苦ひさわけ顔さし出して。此
 景色をながめ居たるが彌次ハアもう何時だろふな時に北八又こまつた事が有わい雪
 隠へいきたくあつた北八エ、きたねへ事ばかりいふ彌次 どうも舟でいできぬ。イ
 ヤさいはひ爰にかゝつて居る内。ちよくり土手へ上つてやらかまてこよふ北八
 ニ余所の船でも人が手水よ上るようぞだ。早くそうしなせへ。イヤわつちも相伴が
 したくなつたモシ船頭さん鳥渡上つて来たいが能かねへ船頭 用たうにあら早うめて
 こんせわえらが今飯くて仕舞ふと直し船を出ささのい彌次 草鞋何所だ北八 ナニサ
 はだしてわがるう乗とさ足をど、けば能よト兩人舟より彌次 ナントい、景色だな
 何所らでやらかそふ北八 チットそこには水溜りがあるもつとそちらへア、なるやど
 い、月だ

一刻を千金づゝの相場あつ。三十石の淀川の舟

斯口をさみて思ばと勝景にみとれ居たるが此内岸よの、り居たりと舟ども追々漕出
 す様とよ北八彌次が乗たる舟も今でると見へて船頭共。もやひ綱をとさ棹差のべて



よや。押合へし。相たがひよ足をやり違ひとなし寐たりけるが彌次郎北八も。開がり
 紛れそこらさぐり廻て手さむりよく。似れはとて人の風呂敷包を。我が包と心得引
 寄て直よ夫を枕として打ふと夫よ。去程よ舟は右に棹さし左よ綱ひき登るよ早くも
 り前後もしらむたかむひさあり

二人を呼立るよ何れの船も乗合のうら土
 手よ上りたる者ども一度さにかりたち混雑

し彌次郎北八やうくのとよ人を押分飛乗
 たるは大坂八軒家の登り般也。此二人余り
 られて大きよ。狼狽。今迄乗て来りし。伏見
 の船と心得其次よならびて掛り居たりし大
 坂の登り舟よ飛乗たるが苦の内くらく間違
 たる舟ども。心附を殊更此舟も。乗合の内
 堤に登りたる者ども二三人あれば夫らかと
 思ひて舟の中にもたがひに顔も容ちも。知
 れされは是をとがひる者もなく其内舟の出
 るよ任せ。各く宵ひより咄えつかれたる

八幡山崎を跡よな一淀堤を打過夜も明ヶ近くあつたる頃伏見よこそは着たりける苦
 もる影も白く鳥の聲告渡るよ船着たりと乗合皆々目を覺し立さわげは北八彌次郎も
 苦打ひらきて笠風呂敷包を手よ引提船頭が歩板を渡とを打渡りて岸よ登り舟宿よ至
 るよ乗合の人々つゝひて爰よ來るを見れば見えりたる顔一人もあし是はふしぎと。
 そこらうろく見廻しあがら彌次 ナント北八あゐら酒を呑ませた隠居殿のどうし
 たの北八 されむの。そまてアノ長崎者や越後同者どもい來そうあものだか大方爰へ
 よらま行たと見るねららぬるりと爰で支度して出掛様とト元の伏見よつゝた
 舟宿の女 どなたもお支度おぎよりいゝ彌次 ナイ爰へ二膳頼み舛女 ハイ〜
 飯よ八配い豆腐の平を付て持て來る是は伏見の舟宿のお定り也此兩人彌次今日
 初めてあれこれな事い知らせ素より大坂へ着ると心得平氣に成て
 から致と是から長町の分銅河内屋とやら云ふ宿屋へ行てあれも大和の初瀬の茶屋で
 よこした書付の所だからあそこへ泊て直に芝居でも見ようじやアねへか 北八 あゐら
 アまだ新町とやらを早く見てへ彌次 ナ、夫もまんざらでねへのツ、ハ、ハ、ハ、業的さよ

○伏見
 千万所
 洒落

あつ汁だべつ〜
 此傍にも舟上りの三四人 太郎衛さんお前虎屋の饅頭いど
 したぞいの 太兵衛 六兵衛さん聞かんせけたひあこつちや。昨日態々あこへいて。買て
 來てとんと大佛屋にわされたわいの 連人つゝ一ト走り行取こんせ爰からわすか十里
 やかあるもせんもの 太兵衛 ハ、ハ、どう云てもくれんがよひハ、ハ、ハ、
 次郎ふま モシあなの方が今云あつた虎屋といふは。惜か大坂で御座ぬやすね
 衛さよじやわいの 彌次 其虎屋の饅頭わすれとあつしやつた大佛屋とやらは何所で
 御座いやす 六兵衛 コリヤ新町橋西結を南へ行とこじやわいの 彌次 其新町橋南へ行所
 迄爰からいくら程御座いやとね 六兵衛 爰からの十里じやわいの 彌次 はてなア大坂
 い思ひの外廣い所だノウ北八 北八 ナニサ、い、かげんは聞ひて居なせへ。わつちらを
 ひやかすのだはあ爰の十里あつてたまる物の途方もねへ 太兵衛 イヤお前此を何所
 じやと思ふてじや。爰の伏見の京橋じやが彌次 ナコ伏見ゴリヤ北八がいふとや
 り貴様たちやア人をばぐらゐとあ。あゐらアタバ伏見から。船よ乗て來たのだから

太兵衛 何いはんすやら。桃山の狐よかぢ。つま、れた。もんぢやあるぢい。皆こち退て居やんせ。北八のひて居るもどぞまじい。としてあるらと狐付とア何のとた。江戸つ子だず。つがもねへ。トいさくさ半ば此大坂者の何ぢやい。何せりあふてぢや。そんなことより。こちやどちらひめふ合たわいの。こつとらが包を舟でうぢぢふたさかい。いんまの先まで。其せいらくしてあつたが。根から。葉からぢれんわいの。ト云ふ内ひ郎が傍にゐる。イヤ權助さんあこよ有わいの。どぢやさがい。どしがいふまひを先包を見付て。イヤ權助さんあこよ有わいの。どぢやさがい。どしがいふまひを先へ上つた衆を問ふて見やんせと云ふとぢやさいかい。權助 ホンニ是ぢやわいの。ト取りは彌次郎ぢや。彌次 コリヤ何ひろぐ此包のゐるらがだり。權助 ナニぬかしくさる。おどつとひかへて。彌次 コリヤ見の風呂敷のはしよ。こちの名が書てあるわい。ト云はれて彌次郎びつくりまよく。彌次 ホンニコリヤ間違がつたツレもどぞぞ。おるらぢの。何所にある。權助 あんだらぐせナニおどれらぢ包を誰のぢるぞ。彌次 こゝつ。つまらねへ北八どうした。北八 お前へ己がのも。取て一ツ所に包んで側

よ置たぢやアねへかどうしてゐるらがぢるものだ。彌次 ハテめんよふぢモシいよ。爰の伏見は違へねへか。皆々ハハハ、何ぬかしくさるやら。アノ類見やんせ。けたいな類ぢやな。北八 イヤこいつら。ふてへ奴らだ。權助 太いも細いも。入ることぢやあるわい。たかでおどれら。奸盜もの包みも別條ぢるさかい。ゆるしてこます。とつと、出ていよ。彌次 コリヤアとんだめあふが。さつ張目からぬ北八どうしたの。ごろう 北八 さればわつちもわからぬ。ぜんてへタへは何日だつ。彌次 ム、こうと夕べの自分よ月が出たから大方廿四五日あたりだ。北八 今ヶ月の大か小のふは何の日だ。彌次 されのこうと此間ソレ何所か泊た時。甲子だ。云ふとぢやアねへか。北八 ツレ、あの茶飯は味かつた。彌次 平の牛房の大き。あいつは珍らまひ。皆々ハハ、コリヤどうでも。てさらは本氣ぢやあわわい。ト腹筋をよつて大笑ひらく考へて。ハ、ア聞へた事があるわいの。成程もんまりのしまうも見へん。わる達ぢや。さか。人の物を。てまへるほどの。働らさうありやせんわい。コリヤこうぢや。コレ

其なわろたち夕べ伏見から乗んきて途中で
 舟のか、つたとき用達よかな堤へでも上ら
 んきた事があるが、彌次左様で御座りやと
 大兵衛ソレ見やんせ。こつとらが乗た舟に
 もあの時わがりあつと人が大分ありあつた
 が頼て舟が出ると云と皆うろへて乗あつ
 た。其時。こあんたちへ下り舟と上り舟を取
 違へてめんくの乗て来た舟と心得こちらの
 舟へ乗んきたものでかなあろぞい。北八
 左様で御座りやせう。わつちらも。舟に乗
 た時くらがりでの有し取違へたといえらぞ。
 どうやら居所も違つた様で御座りやしたぞ。



○ 不包
 隠疑惑
 判然

乗合のとだからま、の皮とそれありは草臥紛れにツイ寐てまひやした今朝爰へ來
 て見りや乗合の衆の内に見しつた顔が一ツもねへいふしぎなと云ていやしたの
 さ彌次さういへは成る程今のさき舟の上り場でハテ見た様を所だと思ひやしたが見
 た筈だやつぱり初手の伏見者ハ、必竟夫ゆるお前方の包をこつちらがのだと思
 つて鹿相致しやした。北八是でものがさつぱりわかつた。彌次イヤわかるこたア。且か
 つたかおゐるら包いどうえたるふ。太兵衛夫もわかつて有わいなお前方の乗んした下
 り船は包斗り残つて今頃ハ。おさかの八軒屋に。風呂敷包がうろくとお前方を尋て
 居よすいゐハ、北八とんだ目よあつたいめへましい。彌次ま、よどうするもんだ金
 の胴巻よ入れて持て居るから高が包の手めへと己が替替りだ。うつちやつて仕舞
 へそこらは江戸ッ子だ。トおまえけれ共先方かく是から又舟よ乗て大坂へ尋よ行も
 出れば此人々も夫く爰を立出けるよ北八彌次郎。馬鹿くしひとすぐよ京へ行つもりに相談ん極めてたち
 氣ぬけした顔付よてぶらりくと京街道に差掛り。伏見出て淀の車がまたあどへ廻り廻つて來たは何事

夫より伏見の町を打過ぎ黒染と云る所に差かゝりける。爰は少しの遊女あつて軒毎に長簾のけ渡したる内より顔のみ雪の如く白く。青梅の希子は墨天鵝絨の半襟までかしろい。べたく付たる女走り出て彌次郎が袖をとらへ女も一な這入なされ。ちよどあそびんかいさ彌次 ちんだよせへく
 北八 こうぞやいな トべつかこ女 ナ、すかんちちやんな 北八 いやいな三郎義秀でも泊らんだエ、はなしやアがれ 女ヲ、こは トおつばなし彌次 ハ、ア爰が跡でさひた墨染たな

墨染のおやまの顔の眞白さの。石灰藏のねづみころも。深草の里の家毎よ。焼物土細工を。商あふ見ゆれを やき物の牛の細工を買ふ人も。誕たらして見とれこそそれ 斯て藤の森に。至りけるに

稻荷山松のふぐりにかゝれるハ。ふとしのさがり藤の森のさ

爰は稻荷の社をふま拜みつ、北八 ナントそこらで一ツぶくやろうじやアねへか 彌次 能かるふく トよしきたて掛けたる 茶見世は這入て彌次郎 ナヤ醴酒が有の婆アさん一盃くん 婆ハ、ハイ ぬくうしてあきよわいな 北八 コウ彌次さん爰の婆アさんがお前へは氣か有と見へてアレまつち斗り見ておかしき目付をぞらア 彌次 馬鹿アいへ婆アさんどうだ早くくんさ。婆々 まちつと待ておくれんかいな。 トい、つ、此婆々彌次郎の顔を見てハ 彌次 婆アさんどうぞしたかお前へ目が悪いのね 婆々 わまやお前の顔を見ていこうかなしふてならんわいな 彌次 ソリヤどうぞ婆々 ワアイ 北八 こゝつわおかしひ 婆アさん何かかあしひ 婆々 わまや此あひだひとり息子をうしなうたが。 其息子よアノお方が似たところを云へく 彌次 ハアおゐらふ似たとかへ夫じやアお前への息子もい、男であつたらふよおしひををきた 婆々 ソレ其どうまん聲のもの云からお前の襟よやつとあらいみつちやが有て色が黒うで鼻の獅子鼻とやらて目のいつかい所迄が 其ま、じやわいさく 彌次 夫じやアわつちが顔の悪るい所斗りがよく似たの 北八 悪る

いどこばりも氣がつる、いどころのトツもねへもせんものを 婆々 それ斗りじ
 やあるまいの。アノ片小鬘の兀さんまた所までが。あなるも似るものかいな彌次人
 の顔の店おろしが濟んだら其醴酒を早く呉な 婆々 やんよとそれたわいな ト茶碗二
 汲で差だすふたり 北八 ふうぎようする醴だ 婆々 うすうもありましたじやある。とし
 なから是を呑で 婆々 やかあしうてツイ涙を其中へおとしたまいか 彌次 エ、とんぶとを涙ばかりあらま
 だしも。見りやアお前へ氷鼻をたらして居るが夫も此中へ落やせんかね 婆々 わしや
 見なさる通り三ッ口じやさかい鼻水とよだれをトツと其中へおとしたまいか 北八
 エ、コリヤあさけあるとを云こつのもう呑ぬ 彌次 おらアつる呑で仕舞たいめへま
 しひサア行ふ 北八 婆アさんいくらだ 婆々 ハイ六文宛下んせ 北八 水鼻のおまけだの
 イお世話ペツく ト愛を立出てふ
 縁事と涙を交て水鼻も。ど、りこんだるうばがあまざけ
 斯てふたりは足にまかせてたどり行程と段々都近くあつて往來殊と賑敷人の風俗

も自然と温順として然も衣裳の花やぎさる女の衣裳ようつ、ぬかえて見とれ行うち
 早くも大佛前に至りて 北八 ヲヤ、どうせへあか寺だアレ山門の上から佛様が覗
 てゐる 彌次 ハ、ア是が彼の大佛だはへあるほど咄しと聞たより、どう敵な物だそま
 て此石を見やれらうい

大佛の淨堂は雲よ入とてや、是の大きな者の天じやう
 斯よみて山門の内へ入やかて御堂と登りける。大佛殿方廣寺本尊盧舍那佛の坐像御
 丈六丈三尺堂の西向にして東西廿七間南北の四十五間あり彌次郎北八爰に法施し奉
 つりて 彌次 ナント咄と聞たよりか。どう敵なもんじやアねへかアノどうして御座る
 お手の平へ疊が八疊敷るげな 北八 狸の金玉と同支事だあ 彌次 もつてへねへ事を云そ
 してアノれ鼻の穴からの人が傘を差で出らるゝと 北八 ソリヤアまだしも人が差で出
 るからい、が己らか方の棒ぐら八が鼻の穴からの瘡かひとりでも吹出したい 彌次 馬
 鹿ア云なお後ろへ廻つて見よふチヤお脊中と窓が明ひてゐらア 北八 あれの大方沙を



吹ところだろふ 彌次 ナニ鯨じやア極るめ
 へし 北八 チャア〜アレ皆なが柱の穴をく
 ぐつて居るは 彌次 ホンニこゐつゝの奇妙う
 〳〵此御堂の柱の元より參詣人のく
 共たはむれに是をくぐり 〳〵コリヤ面白い
 振る北八も同じくぐり 〳〵然まねらぬぐられるが彌次さんは太
 つて居るからぬぐられぬ 彌次 己だどつ
 てナニ是が 〳〵北八を引のけ四ッばひよ
 程はあり掛て一向ぬけられす跡へ戻ろ
 ふとそるゝ脇差のつはが横腹につかへて
 痛みこらへられぬ彌次 〳〵アイタ、アイタ、コリヤ
 次郎顔を眞赤よなし 〳〵チャアどうした抜ら
 ひよんお事をした 北八 〳〵コレ手を引はてくりや 北
 れねへが 彌次

北八 〳〵こゐつゝのかかしひ 〳〵彌次郎が両手彌次アタ〜 北八 よはひ男た。ちと
 しんぢうのそばい、彌次 〳〵わとの方から足を引てくれる 北八 〳〵承知〜 〳〵後へ廻り兩
 ヤアゑんさア〜 彌次 〳〵あひた〜 北八 〳〵ちとこらへなせへよつやと出かけた様だヤア
 ゑんさ〜 彌次 〳〵ア、まつてくれ〜 〳〵腰骨がぶれる様だ 〳〵コリヤやつぱり前の方から
 引出してくれ 〳〵ト云北八又前へ廻り 〳〵北八 やアゑんさア〜 〳〵コレ又こつちへよつ程出
 て来た 彌次 〳〵コリヤたまらぬ 〳〵アイタ 〳〵北八是でいいかぬ初手の様よ又後へ引戻して
 れ 北八 〳〵色々なことを云 〳〵ト又後ろか 〳〵ヤアゑんさア〜 〳〵彌次 〳〵まて〜 〳〵コリヤと
 うでも前の方から引て貰をふ 北八 〳〵エ、そんな前へ廻つたり後へ廻つたり引出さて
 〳〵引戻しいつ迄も果しがねへコリヤい、さんだんがある 〳〵トそばよ見て居たり 〳〵北八
 モシどうぞこつちかゝお前へ引ばつて下さいませとまがわつちへ廻つて足をひきま
 り出し舂から 彌次 〳〵馬鹿ア云な兩方から引ばつてゐ出る瀬がねへ 北八 〳〵でる瀬があくて
 も兩方から引ばると前へ廻つたり後へ廻つたりとる世話が無て能わぬ 〳〵參詣の人 〳〵イヤ兩

方からあのさんの體を引延したらッイ出られそな物じゃあるぞい 北八 コリヤい、
とがある酢を一升も買て來て彌次さんお前へよ呑せよふ 彌次 なせ酢を呑どどうする
北八 ハテ酢を呑と疲ると云どだりら **〔參詣〕** ハ、ハ、くそあるぞといふたて、いん
まの間に合ふこつちやなるさかい。こうさんせ何所をへいて棧借て來さんして頭を
跡れ方へ打込んしたが能わいの 北八 成程こつちが早い理屈だ然々夫でハ命が有めへ
參詣 さればそこはどうも請合れんぞいの **〔ト此内田舎〕** コリヤハア氣の毒なこんたア
のし。もしはハア遠國のもんざアから。あにもまりやさねへが人の難儀さつせるこん
だア愚意のう云つて見升べいか 北八 どうぞあの人のたどかる事が有あら云て聞して
くんなせへ 同者 ハア夫だアからのこんだアよ。あんでもあの人の足の先さを切割つ
せへて。山椒粒のう。はさまつせへたら。ふどり出よつんぬけべいのし 北八 ハ、ハ
、そりや蛇が女に見込んご時の事だろふ。どうせそんな事であらうと思つよ **參詣** コ
リヤ私がちるかそわいの。何じやるとあのさんの體を和らかよして引出すがよかる

さがいこうさんせ土砂とて來て掛さんせいの 田舎 すんだら土砂ノウぶつ掛と一番
の桶さア買て來あさる。手足をちと。へまおんまげたら。這入べいのし 彌次 エ、いめ
へままひ事を云。むむごころじやアねへ。北八 早くどうぞしてくれぬか 北八 待ちよハ
、アお前へ脇差の鏢が横腹へこたわつていてへのだ **〔ト手を差入てひねくり廻し。や
うく脇差をぬひてとる〕**
彌次 いか様是でどうかくつろぎが有ようだ 北八 ドレくイヤ時よどなたす前の方か
ら押出して下さるませ。ままか足をもつてこつちへ引出し舛から。ヤアゑんさアく
〔參詣〕 ツレ出るぞいの。まちとじや。いかません 彌次 ア、ウ、北八 ハ、ハ、出る奴がい
けむから大笑ひだ 彌次 ア、いてへく 北八 止めたぞゑんやアくソリヤ出たぞく
〔トやうく〕の事にて引出せハ彌次郎大珍 ヤレく有難へコリヤ何方も御苦勞で御
せをよきくやつと溜息をつきながら **〔ト座をよきくやつと溜息をつきながら〕**
座いやえた。わつちやア伊勢の泊りで。産をしやしたが産むよりの生れる身よつ程
せつねへ。コレ着物が摺切てあばら骨が今よひりくそる
うら差きて出るぞ鼻より柱なる。穴おそるしや身をそばめても

斯よみ興じて大笑ひとあり夫より御境内を廻り蓮華王院の三十三間堂よ
いや高き五重の塔に競べ見ん。三十三間堂の長きと



是より此御門前を北へさきて行は往來殊よ
賑きく。げにも都の風俗の男女共に何所と
なく柔和温順よきて馬士荷歩持迄も洗濯布
子の糊こはきを。折め高よ着なして。わのお
まやんと事わいさど。なまめきたるもわか
く。二人の興に乗じ目よ見る物毎も珍ら
まど。たどり行うち俄よ往來。騒立て。老若
うちまじり走り行人毎に。ホサホよい。く。
あつこらつとさホサホよい。く。あつこらつとさ
ヤ向ふよ何か有とさ。どままじい人だ。河で御座ぬやぞね。向より。あこにる

○ 不知
魚之置
腐

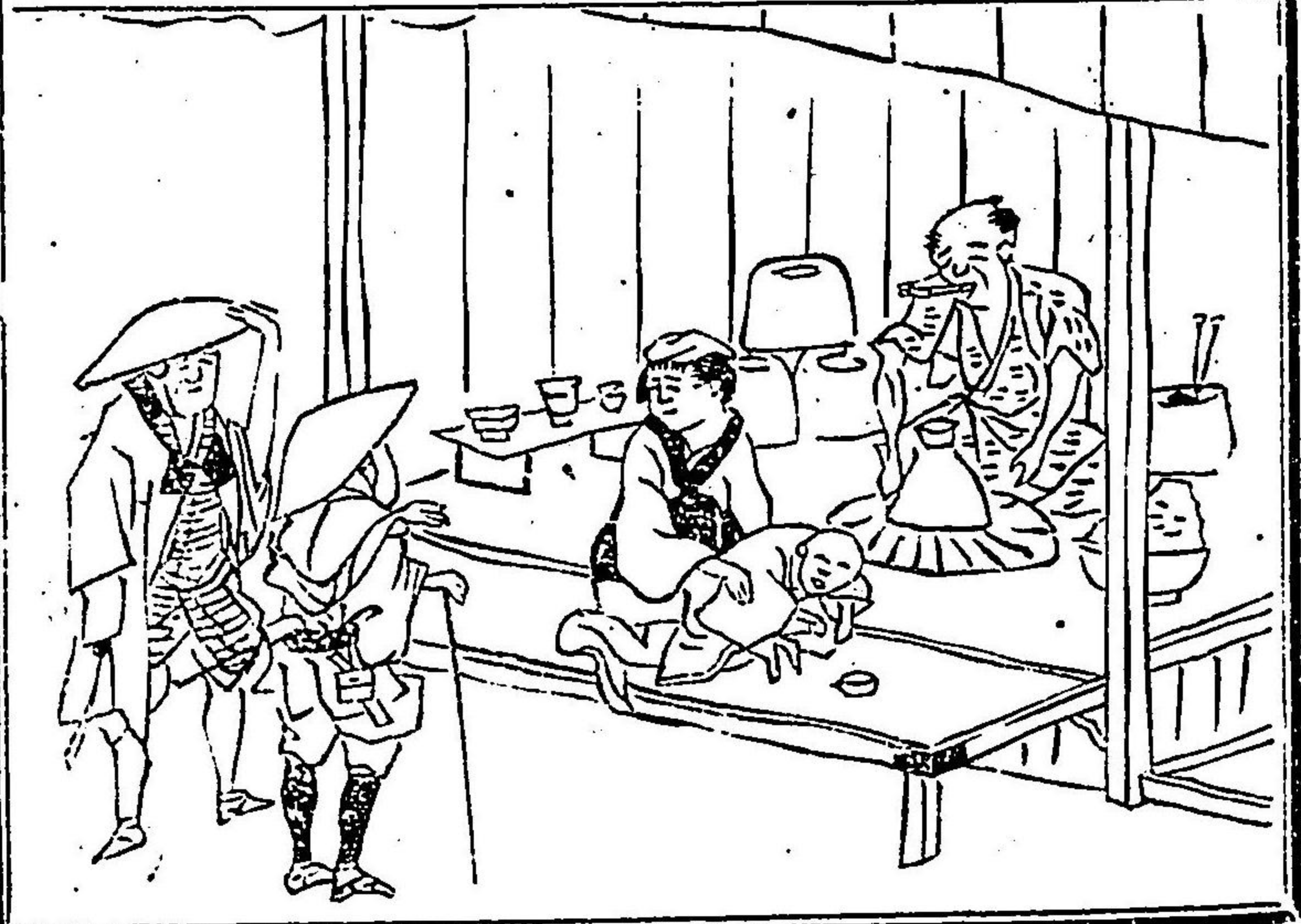
らる喧嘩が有わいの。北八。京の喧嘩も珍らしかるふ。如く往來もならぬ位よなるに二
人りの人を押分く。是を見れば彼の喧嘩の一人の肴屋と見へてそこよ半臺などある
まてあり相手のまよく人体の男いづれもくつきやうの若者なりされど都の人の心も
ゆうちやうよして喧嘩と見ゆれどさのみ頭からた。肴屋。コレイノわが身の方から行
いさ合もせせ日當りのよき所お二人り向ひ合ふて。當りくさつてそあるまこといふもんじやなわわい。己れ。のうてんを打てこまそかい
【相手】おさくされこあんが手のうこくのよ。こちやじつときて居やせんわい。ト云つ
ぐひをてぬねいよ。肴や。ようおどかひならず。わろじやな一体わりや何所のもんじや
折て鉢巻をきる。職人。おれかい。おりや堀川姉が小路下ル所じやわい。肴や。名り何と云ふん。職人。喜兵
衛と云わい。肴や。年いいくつじや。職人。廿四じやわい。肴や。おさくされ己れ廿四よしちや。
あらう若い虚つさくさるな。職人。なにいふずいやんまじやわい前厄でことし隼めを死
なまたしい。肴や。ソリヤあらい力落さ折たじやある。あゝ氣みさらしたあ。職人。イヤそ
ればかりじやあ乳のみくさる。かまめがあらうのら。あらい何んさなめよ合ふたわ
い。肴や。そじやあろわん己やわれよ。ニツ上じやわい。職人。そふぬかしくさりやわれも若

い内の何所じやぞい 肴や 一條猪熊通り東へ入所じやわい しばらく人かいやい。あこま
 盲で目の見へん寸伯といふ針醫があるがな 肴や ナ、針醫がありやどうせりや 職人イ
 マこちらの一家じやさかい己れ歸くさるなら云傳してこまそ 肴や いやじやわい。何の
 されが云傳誰が云をぞい。ゑらいわはめじやな 見物の人欠 十兵衛さんもういのか
 い 十兵衛 またんせ今に打合ふまやある 見物 イヤわしや内に客はつておゐてきたさか
 い 十兵衛 そしたら其お客連てごんせ序に。うすべりかと一枚くさんせんかい 又こちら
 又居る見物軒下よつ 見なされ。あつちやのわるが。どしてもゑらい。やつじやわい
 くばひ髭をぬき 見物 イヤあつちやの男もゑらい。頭じやわい 見物 ホンニ其願で。思ひ出たお家のどう
 見物 イヤあつちやの男もゑらい。頭じやわい 見物 ホンニ其願で。思ひ出たお家のどう
 じやいお痛所のゑいかひな 見物 ハイおかたじけなふ御座り升。とんとゑいようで有
 たが幸昨日からゑらう悪あつてツイ夕べ死ままざわいな 見物 ソリヤお前御愁傷ふ
 である御葬禮のいつまやいさ 見物 今ま出しかり升とこじや。おつたが。ゑらい喧嘩
 がある人か走るさかいわしもツイいて見て戻る程ふ夫まで待てと云てまたして置

ままたわいさ トおの 氣の長る者斗ゆうく コリヤヤイ まちど。こつちへ 據く
 され日向がなふなつて寒なつたさかい 肴や ナ、よつたがどうすりや 職人 おのれいま
 己の事をあやふと。ぬかし居たが。何で己があやじやぞい 肴や あほじやさかいわやじ
 やわい 職人 なよぬかしくさる。そう云れが。あほじやわい 肴や イヤこちやあほじや
 なる賢じやわい 職人 我が賢ありや己も賢いわい 肴や ヲ、我も賢いか。そまたら此喧
 嘩やめにせうわい 職人 サアひよつと。互ひにせり合て着物でも引さむたら損じやさ
 かい。やめよして。こまそふのい 肴や ゑらい遅なつた。もういんでこまそ 職人 己も我
 がいよくさる道じや程に連立ていんでくりよわい。今日のゑい天氣まやあつたな 肴
 や あた、かうてゑいわいやい トたぐひよあひさつして此ふたり連立て歸る。見物も
 か、彌次ハ、成程上方者の氣が長るわんる河のろひ喧嘩が何所よ有もんだ 北八
 あの中で損徳を考へてやめよしたから大笑ひだ
 公卿衆の居まそ都の自から。喧嘩止るも歌とよみなり

斯打興じはやくも清水坂に至る。兩側の茶屋軒毎よわをき立て立る田樂の團扇の音喧
 すきまで呼立てる聲々モシナれ這入あされ茶々上りておいでんかい名物難波うどん
 わがらんかいなお休なされ。彌次何ぞ喰てもい、がもつと先へ行てからの事に
 よふ。トほどおく清水寺にいたり境
 内をめぐり音羽の瀧を見て
 名に「おふ音羽の瀧のあるゆるか。登りつめたる清玄の戀
 本堂は十一面千手觀世音也。昔一沙門延鎮が夢中よ得る靈像よきて坂の上田村丸
 の建立とぞ。北八彌次郎えぼらく此の寶前にやすみあがら
 境内に植し櫻のそきまき。手も澤山な千手觀音
 傍らの小高き所よ机をひかへたる老僧參詣を見掛て當山觀世音の御影は是から出舛
 ず。誠よ靈驗ゆらなる事を言がものいひ啞の耳が聞へあるいて來たいざりがあは
 る一度ひ拜する輩は。いかある無病達者なり共。たちまち西方極樂淨土へそくひ。取
 んとの御誓願じや。何なたも頂戴てお歸りなされ。冥加錢を澤山にお心持次第御信

心の方の御座りませぬか。北八よくまやべ
 る坊主めど時よ彌次さん彼のうはさに聞ひ
 た傘を差して飛といふ此舞臺からだ。僧昔
 玄から當寺へ立願の方の佛よ搦ふて是か
 下へ飛れるが怪我せんのが有りがたゐとこ
 ろじやわいな。彌次、爰から飛たら身体がみぢ
 んよあるだらう。北八、おりく、飛人が有り
 やどかね。僧、さよじやわいな。ゑて氣のふれ
 た。わろ達が來て飛びおるがな。此間も若い
 女中が飛れたわいな。北八、ハア飛でどうしや
 した。僧、飛で落たわいな。北八、落て夫からどう
 またね。僧、ハテ根どひとるまろじや此女中の



罪障が深いさかい佛の罰て目を廻したわいな 北八 鼻の廻さあんだかね 僧 イヤ瘡と見
 へて鼻のなかつたわいな 北八 そして氣が付やしたか 僧 氣がつゐてんだいいな 北八
 いんでどうしたね 僧 さてくまづこい人じやそき聞ひて何さんすぞい 北八 イヤわつ
 ちが癖としてき、かけたとい金輪際聞て仕まはねば氣がすまぬといふ者だから 僧 夫
 なりや云てきかそのい。夫から其女中が全体其下地もあつたかして俄に氣が違ふた
 わいの 北八 ハテナ氣が違つてどうしたね 僧 百萬遍を始めたの 北八 百萬遍始めてど
 うまやまた 僧 鉦を叩て 北八 鉦を叩てどうしたね 僧 南無阿彌だん佛 北八 夫からどうた
 ね 僧 南無阿彌だん佛 北八 コレサ百萬遍のわいの。どうしやした 僧 南無阿彌だん佛 北
 八 そのわいのよ 僧 ハテ世話しある百萬遍まやわいの。マア念佛とましてのらのこと
 いの 北八 エ、其念佛百萬遍とひまで待て居るのか。渡方もねへ 僧 イヤあさん聞か
 けたとい根堀葉掘きかんせまや。ならんといふたじやあゐか。いまちと辛抱えて聞ん
 せいか退屈なりや。こあさん達も百萬遍手傳ふて下んせ 北八 コリヤ面白かるう彌次

さんお前もこけへ掛あせへサア 南無阿彌だん佛 僧 逆もの事な鉦入てやろわい
 ちを打ならして 僧 ハア南まいだア 北八 コリヤどうてきに面白くあつた南
 まだア 僧 わしや手水してくる内頼み升 北八 鉦をつきつけとこへや 僧 ハア南
 まだア 僧 チヤンチキチヤン 彌次 てめへ鉦の打さやうが下手だこつちへよこせ 北八
 ナニ如才が有もんか。チヤン 南まざア 僧 夢中にた、き立さわぐ
 此体を見て番僧 コレナ わぢりよ。たちの。どうまたもんだぞい。勸化所も上つて無
 肝をつぶし 僧 トしかられて二人りの 北八 ハア今の坊様の何所へ行た。また中回向も。とま
 作法を心付さきよろくして 僧 内番僧 ナニた事云のじや。爰を何所じやと思ふてじやうい 北八 ハイ爰の清水の
 つ盛さんの墓所とけつゐる 番僧 コリヤ己れ氣が間違ふておると見へる 北八 氣違ひゆ
 るよ此百萬遍 番僧 ナニぬかしくさるやら。とつと、出ていあんかい。爰の御祈願所。
 じやぞ トこの高に云ふ内勝手より棒つき出あひを 北八 づくまうめが。とんだめに。
 わはした

舞臺から飛だ咄し清水に冷かされたる身こそくやしき
此山内を下り。ゆくさき清水焼の陶造り軒を並べて往來の足をと、此所の名物
なり

天道の恵みもあらん陶物師大日山の土を製せは
斯て其日も早や七ツ頃とおぼしければ急ぎ三條の宿をとらんと道を早め行向ふより

小便擔と大根を荷なひたる男大根小便しよ〜北八ハ、〜唐茄子が笛を吹いた見
世物は見たか大根の小便するのり。つねと見たとかねへ彌次

○撒小便
便買大
根是非

直小便

と。どつけへはするのなるふ。こゑ取 おつきな大根と小便しよ〜
〜みたれの〜コリヤ〜わしら二人が爰で小便してやろが其大根三本。おくさんかい
男が二人り〜
あこゑ取 マアこち来てきて見さんせ。ト此所の辻へ二人を連れてゆく辻は江戸でいふ
らんと跡より付て。ある取 サアやらんせんかい。ト小便たごをある考。コリヤわし
行き立留り見れを。ト此たごの内へ二人ながら小便し。もうこれきり出のかひな仲間うちどめ
先遣でい。ト此たごの内へ二人ながら小便し。もうこれきり出のかひな仲間うちどめ

よ屁が出たからもう小便は夫切やわいな。こゑ取 コリヤあかんわいな一度よう骸を
振て見さんせ。仲間 ハテ小便くそねて置いて何せうぞい有りたげえたんでのけた見い
こゑ取 夫じや大根三本はようやれんわいな。二本もてかんせ。仲間 コレ小便いそく
ふても。こちどらがのり。品物がゑいわい。余所の茶粥はのり喰て。おるのどの違ふて
こちや肉升り喰ておるがな。こゑ取 夫じやて、あんまりじやわいな。仲間 ハテやかま
う云んす。内へ持ていんで水交りや三軒斗りには。なるろい。早う三本くさんせ
〜こゑ取 するあよくせ〜と云たて。是てくさるもんじやなわいな。そこら
へいて茶と呑で来てまちとやらんせ。トゆつかへまつ云て居と二人北八もし
〜幸ひわつちか小便仕度あつたから無様なから。お前へ方の上やせう是をたして
大根三本取あせへ。仲間 お必ざしはれたかたじけな御座り升が。夫じやお氣の毒様じ
やわいな。北八 ハテい、わあ。どうせわつちも有合せた者だから。余り輕少あれど。仲間
左様ならお小便頂戴さまよかいな。ト小便たごを北八の北八イヤ〜やつはり夫

れ置きせへわつちがのり。二二間つゝ向ふへ走り舛こゑ取
 コリヤ。さよとしく。イ
 ヤお前のは地ではあるわい。兎角小便は關東が能御座り舛地の薄ふて直打かな
 北八 もつちと早いとまだ出た者を。わつちは坐れ付て小便近いのら不斷小便桶を首
 と掛て歩行た男と仲間 そりやあうらやましひこつちやこゑ取 さよあらお前此桶を首
 に掛てお出んかいあわしや何處迄も供していごわいさ 北八 イヤ近頃の其様にもね
 へのさこゑ取 お連様も有とうじやモシお前も序よ手水してお出んのいさ 彌次 イヤわ
 しは前方は一度よ小便の壹斗や貳斗とる分はねから苦よも思ひあんだ者だがどうし
 たとやら近年の小便通りでさつぱり出ぬよこまど果るこゑ取 ハア小便づまりから
 ゑいとが有ていさ。いつまよ。ようさるこつちや彌次 どうとると能くさるのこゑ取
 ノ酒屋などで酒の樽の香口から思ふ様酒の出んところが。あるもんじやわいさ。そなる
 な時ハ樽の上の方へ雖もみして穴明ると直に下からシツツと酒がはしる者じやさ
 かいお前の小用の。つまらんしたのも。ひたへくちへ。雖もみさんきたら。直に小用が

通じるじやあるやいな 北八 ハハハ、こゑつゝ出来た時よおそくあつたサア行やせう

ト二人の引き分けゆく向の方よりカッギを着たる女二三人連れ流石よ都女 ヒヤア
 郎の風俗さあやかまて何れも色白く透き通る斗りの代物北八現をぬかして



三條の橋じやわいさ 男と見ると悪くひやかそ風ゆゑ五條橋を三條とおしへる
 ハイ是ハわががたう御座りやと 何もしらねば禮をい 彌次さんアリヤア何たるふ
 ト一体御所方の女中の人を何共思はせちときいたふうの北八
 ト頼てかの女中
 のがお尋やたい是から三條へは。どう参り
 やすね 見へて飛だ大へい也 我身三條へ
 いさやるなら此通を下りやると石垣といふ
 所へ出やる程に夫を左りへいさやるとツイ

つて行ふ夫で出来ば御縁が無ど。あきらめようさ女ト此内へ上ると女が二階へ案内する。屋根裏の低き二階まで彌次郎

北八夫でい、の丁度おやまさんも二人りあらア

頭をこあいた、と北八 どうぞた女 ホ、ホ、い、おあぶあふ御座んと トたばこほんを持

二人り一人名の吉彌。今一人の金五。いづれも太織袖編やうの着物。黒天鵝絨の半襟

梁りのつかへる程ひくき二階を。しやんと立て歩行くまろもの片手よ着物の裾を横

の方引あげて来りお北八 とんだ暗めあんどんだサアもつとこちらへ。よりなさら

んか吉彌 お前さん方何所じやいお 彌次 されは何所やらであつた 金五 ホ、ホ、六角の

朝市よこちぬお方かよう見へでじやが訛てじやさかい大方旅のお方じやあるぞい

お吉彌 六條様へ御出たのかいな 彌次 マアそこらの者よ吉彌 モシナさ、一ッあがらん

かいな 彌次 そうさ酒が早く呑てへの吉彌 そう云ふて遣かいお着の何よせうぞぬな

金吾 角の酢もじがおいまひじやなぬかいお吉彌 わしやナ。かちんなんばが。能わいお

彌次 餅でも家賃でも。とんちやくのねへ早く。してくんな吉彌 いつさに参じるわいな

ト此おやま酒肴をい、つけよ下へおりる跡は残りまおやまの此うち帯のあひだから鏡を出さ。あんどろの側へより頭を直す頓て下より銚子盃持出し大平が一人前に

○彌次
切大平

一ッ宛廣ぶたよのせ持あんだ大平を。人別割とは珍らしい京はわだまけねへ所だと

出と彌次郎肝をつぶしあんだ大平を。人別割とは珍らしい京はわだまけねへ所だと

聞たが爰らは又どうせへ北八 四百よの。安ひ物だト此二人りは酒も肴も揚代の四

どほ金吾 サア一ッ上りあされ 北八 始め様ヲト、平は何だハ、ア葱よ半べいの。聞へ

たがこつちでハ半べいを焼と見へて眞黒よこけていらア 吉彌 ヲホ、ハ、哥賃じやわ

いおト是は上方よてとる難波餅とて葱を入たる雑煮餅也此おやま下戸と ハア哥餅

見へて己が好物ゆゑ客よと、めて取寄たる也北八哥餅と云とをぞ知トハア哥餅

と云聞たともねへ。とんちやくだの 吉彌 ナ、せうし。餅じやせいお 北八 ム、體かド

レ、ヤアこりや餅だ、 彌次 おきやアがれ上方者は氣が氣かねへ酒の肴み餅とは

どうた是で酒が呑るものか 金吾 外のお肴云て。参じやうわいおトそぐよ下へおりた

物を持てくる。中にハ上方よ。はやる鳥貝のすしあり。北八 あんだコリヤ馬鹿のむき

此おやまときと見へて此すしを云つけ。やりたるおと

みをそしよつけたのだお 金吾 とりがひの鮮もじじやわいな 彌次 出物も、へんちさ

なものの斗りでもう酒も呑ぬ、ト此内むだも色々あれ共零と。爰は布圍と敷並べ腰

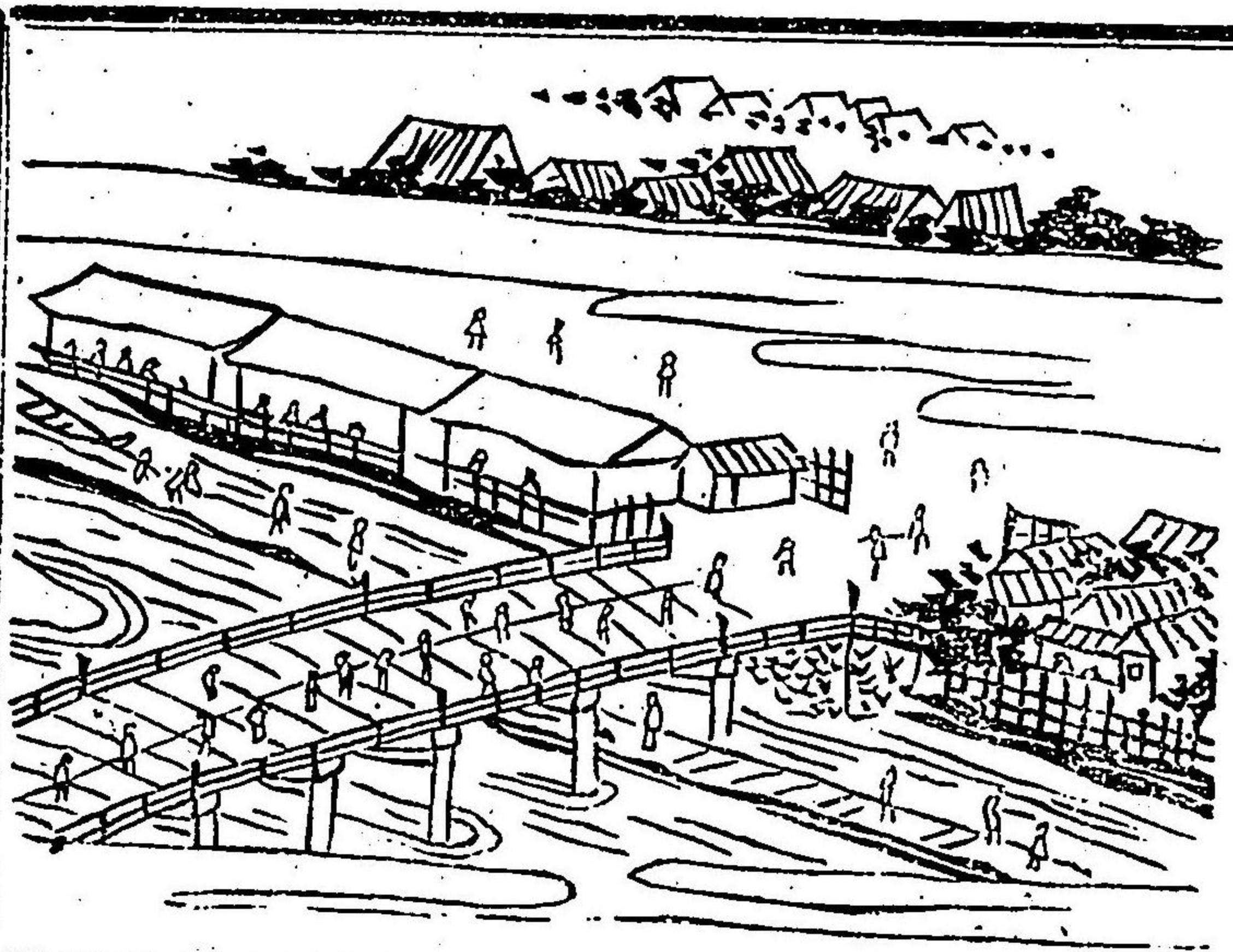
の女房と見へてつとめを、ねゆるしお 彌次 ナイたれた女 ハイお勤をいた、きに参じ

取にきたり屏風をあけて

ました。ト書附を出し彌や何なにだ四よ夕ゆ宛えん八はち夕ゆの揚あ代だいの聞きへたが四よ夕ゆ哥か餅ちんあんなば貳じ夕ゆ餅ちん壹いち又また酒さけも肴さかも揚あ代だいの内うちかと思おもつたコレこれ北きた八はち此この通とほりだ北きた八はちドレどレれ何なにだコレこれヤやか前まへへ方かたアあ且かつつちらを他た國こく者ものだと思おもつて酒さけ代だいを別べつ取とりさへあるよ。さうてきよたけへ物ものだ此この四よ夕ゆ哥か餅ちんあんなと云いふアあノ大おほ平ひらのとか。餅もちならたつた三さんッつ入いと葱ねぎのちつと斗とりさらへ込こだ物ものを壹いち夕ゆ宛えんと成なるほと京けいの物もののあだじけねへ氣きのいれた根こん性じやう骨ぼねだ蠟ろう燭そくまでつけることアねへ。こんなものいませにまで置おなせへさ女にヲやホほ、京けいの者ものを悪わるうおまやんお前まへさんがまゆみじやわいお五分ごぶん斗とりの蠟ろう燭そく代だいまけいのあんのとおまやんまことい。なるわいさ。そして皆みな食たりなされた。跡あとで高たかひのやすひのとおまやんしたて。あかんごつちやあるわいな彌や次じエ、めんどうなツレ壹いち分ぶん持もつて行いき端はしたくらぬいませへし。ト金かね壹いち分ぶんほふり出してやる女に房ぼうふしゆらら取とり下したへア、どんだ目めもあつたノウ北きた八はち北きた八はちまかしおらアおしくねへどうかおつよもてそふ

○逆さか拾しり珍ぢん

なあんをいだ。ト此こ内うち北きた八はちの相さうマ、まんきやの。あこよ私わたくしし一人ひとりり。おかんまて爰こゝよ何なにしてじやぞいおサアやとみんかいな。ト手てと取とりて己おれが北きた八はちコリヤこりや己おれが帶おびを解きてさうする。トわざと彌や次じは聞きへる様ようよ。よいわいお今いま宵よのいこふぬくひじやあるわいさ。お前はん。じつとして居ゐなされ私わたくしがわぢようとするわいさ。トまべて上う方かた筋すぢのら帯おびひもをといてうちとけたるてぬに客きやくをもてあそと定さだまれるおきての如ごとし中なかも此こ吉きち彌やの大年おほねん増まにてぢよさいのあき代しろしろ物もの北きた八はちは着き物ものをぬがせておふり出し已いまも帶おびを解きて北きた八はちに己おれが着き物ものを打うかけ。さあがら深ふかさあじみの如ごとく打う解きたる体ていよ。もてなしけるゆゑ北きた八はちうつ、をぬかして打うふしけるが夜よも次つぎ第だいふけ行いき、に犬いぬの遠とほはるもの淋しみしく時ときの太おほ鼓つづみも早はや牛うしの刻とき斗とり。モシナもしなくよう寐ねてじやな北きた八はちア、ム、何なにだん吉きち彌やわしや手て水みづも行いてくるぞへ。トあきわがりたるが枕まくらもとにはふり出で。お前まへさんの着き物ものちよと借かしておくれやわしやこれ着きて。殿とのたちの振あつて下したの衆しゆうを。だましてこまそわいな北きた八はちよく似に合あつた奇き妙めうく吉きち彌やつむりが是これじやあかんわいさ。ト手て拭ぬぐを取とりてうりたるが北きた八はちの夫おとこより寐ねもやらせて待まちてと暮くせど。かの吉きち彌やの一向いっかうに來きたらす扱あひ外ほかに客きやくても有あるにやどしはらく。待まち居ゐるよ早はや七しちツの鐘かねも程ほどあく夜よも明あくなんと。とるよ北きた八はちこら兼かしてむまやうよ手てをた、くと下したの女に房ぼう駭おどわがりて。とあたぞれ呼よびなさをたのいさ北きた八はちマ、爰こゝだくコ



レ私ちがおやまの先刻下へたりたが夫あり
 で顔だしもまねへ。ちよくり呼でくんなせ
 へ女房 サア其とで下り大さはぎで御座んを
 わいさ 北八 なせく 女房 アノおやまが男の
 きりもの着てはしつたさかい 北八 ナニはし
 けたとまよげたのがソリヤ大へんだく其
 男の着物と云は己がのだ 女房 かいさソリヤ
 又何としてお前へさんのを着ていたぞいあ
 北八 イヤ下へいつて皆んなをぐましてくる
 からかしてくれろと云たよよつて 女房 夫で
 貸なさつたのかいな 北八 そうさ時よ其おや
 まの欠落したのこつちやにアしらねへこつ

たから何ても爰の抱に違へゝあるめへ着物はせひども爰の内らどうぞしてもらひ
 よやあらねへから下へそういつてくんあせへ早く 女房 マア何よ致せそあるよや
 ませう 一ト下へおりて行と程あく此の亭主と見へて鬼太りのどてらを着たるでつく
 りとせま大男料理番共二三人引連どやくと二階へ来り亭主北八が枕もと
 に立は 一コレ吉彌又着物貸たといふ。わろはこおはんかいある 北八 マ、己だく 亭主 お
 どきかい。ほてくろしひ事さらしたあママ。起くさきドレ顔みせさせ 北八 イヤ。此
 さいろくめらひ。何で己を其様よぬかしやアがる 亭主 ぬかしたかどうすりヤア。おど
 れ吉彌め又着もん貸て欠落させおつたからはやくさきは。まつてけつかるじやある。
 ありてゐよ。はぎさ出くされ 北八 とんごとをいふ。あよ己がゑる者か 亭主 イヤくそ
 あるよ。ぬかしさらしてもわれが人は頼まれて糸ひさくさつたよ違ひは無わい 北八
 コリヤ貴様たちのおつよい、が、りをとるな 亭主 あどら、かそな。まよびさおるせ
 一ト皆々立か、り北八を手をめよとる此どさくさ 一コリヤ己が連だが。うぬら此男をど
 一ト目を覺し此てゐを見てはね起飛で出て彌次郎 一ト亭主をつきの 一イヤこそやつも同盗ぢやある。二人共よひつ絞れ 一ト何れも
 一とる 一とる料理番 一イヤこそやつも同盗ぢやある。二人共よひつ絞れ 一ト何れも

者共。彌次郎北八を兩方から引たて下へれる。何そひきをもつて。つゝに二人とぐ
 北八も今さらおやまに着物と貸たるわやまりをこころくはひし。うたがひうけたる上
 る面目あさ。殊も夜も明々はなれて近所の者共追々見舞ふ來る内よ。臺所の柱につかかれた
 是も此商賈やの亭主と見へて少々小口でも聞ふといふ男名を十吉。わしや今きひた
 が吉彌めがきよとることをさらうたげあ其手引した奴らはどしたぞい。亭主 あこよく
 つて置たわいの 十吉 店主呼で預さんせ 亭主 旅の者しやて、虚つささらしてほんま
 の家を。エムわんといの 十吉 ソリヤ氣の毒なもんじやわい。トふたりがしはられ
 レこあんたちの悪い合点じやまい。ソリヤはて友達づくなら頼まれるもんじやあ
 るが。最ふこなるに。ばれていよよとが無。有様よ云てめんくの。みぬけするがふい
 わいの 彌次 イヤ私らは。かたつきし何もきりやせん只此男が。本の洒落よ着物貸た斗
 りでうたがひ受たといふもんだから。どうぞ。あきたのおどりあしで目つちらを助て
 下さりませコレ手を合せて拜みたいても縛られて居るから足を合せて拜み升コリヤ
 く北八も頼をヤせ 北八 ハイ南無金比羅大權現様此災難を免れ升様よ南無奇妙頂

來く 亭主 コ、あよをぬかそぞひ。金比羅様。いのるなら。そなるなこつちや。聞んわ
 いさいはひおどれ裸で居から水あびせて。こまを。垢離とつていのりくされ 北八 イヤ
 目つちの。全体金比羅信心して。御座りやすか是迄願を掛やすよ人と。違ひて水を
 あびて寒ひ目していさ、やせぬ何んでも着物を。たんと着て汗にあつぐんと。ひき
 掛た上へ巨燵へ首つ切のたくり込で願ふと直は御利生が御座りやせから。責て着物
 ひきせとも一盃あつくして下さりませんか 亭主 エ、尻ねまりくされ 彌次 イヤ御尤も
 で御座りやす。わつちこそこの此男めがまさかへ。ほんの災難としてこんあ目にひひま
 とと持病の癩が差込でアイタ、 亭主 癩の痛いから胴中の繩をまちつとしかたう玄め
 てやるかい 彌次 イエく目つちか癩のじん句踊とあさまり升からどうぞ此繩を解て
 下さりませ 十吉 〽〽〽コリヤねからやくたいあ奴らじやわい勘太さんゆるして遣ら
 んせたかて。的等のゑらひあはじや成程吉彌めまたらされくつて。きりもん貸と迄
 のこつちやあるやいな 亭主 サイナそあるよ云んすりやいかさま賢ふも見へん目ろた

○裸不
道中
之
語至此
屬不用

ちじや。別してのとも有やせまい。いなしてやるかいな 北八 夫のわりかたふ御座い
 やすがわつちやア此裸のまゝでい。歸られやせん 亭主 いあれぞ。いなんすなくこち
 にもい、ぶんがあるさかい 北八 イヤそんなら参りやせう 十吉 サア〜いなんせ。あ
 たあほらしい乗じやわいな 〔ト二人りが繩〕彌次 北八手前へのおかげでとんだめにあ
 つた 北八 お前へよりかからア此通り着物を取られてハアくつさめマ、さむ〜亭
 主 〔ハハ〕あんまりかばひそうじや何など一まひくれてやるかい 北八 有難ふ御座いや
 すどんなも乃でもどうぞ頂戴かして。下さいやせ 亭主 エ、乞喰めがいふやうあとぬ
 かしけつかる。てきよ似合た様は納屋の拵一まひ持て来てやれやい 下男 イヤ爰まき
 のふの儀があるこれ着ていかんせ 北八 ナコ夫をきろとかエ、情あるとといふ 亭主 せ
 つかくの己が心差じや着ていなんかい 北八 ハイ有難ふ御座いやとが私しよ。やはり
 裸が勝手に御座りやと 彌次 げへぶんの悪い男だれいらが合羽を貸て。やるふ 〔ト彌次
 綿合羽を取て北八
 に打着せながら〕

爰ましやかゐたる恥も赤はだか。合羽づかしき身と成たれ
 果の大笑ひとなり二人りのやうくのとよて此所をのがれ立ちいでけるとなり

○七編

或人の句は。花尊都本寺くかなど。詠りしは實も寺院塔も。廣大無邊
 して其莊嚴靈秀なる。云も更なり殊花の春。紅葉の秋。東西南北名だ、る勝景
 の地有て加茂川名酒の樽と。ともに人の魂を飛ばしめ商人の。よき衣着たるは他國異
 にして京の着だをれの名は益々西陣の織元より。いで染色の花やぎたるは。堀川の水
 よ清く釜元のおしろい。川端のふまの粉は。雪をあざむき。御影堂の扇。伏見の團扇に
 風匂ふ草堂前の粽。丸山ある焼。大佛餅。醍醐の獨活芽。鞍馬の木芽漬。庭訓往來い
 ちじるく東寺の蕪。壬生の菜の名物。選に鼻高し其外名産。奇製の物品あまた有。都よ
 たま〜いりこむ騷客の兩人彌次郎兵衛北八とて。拔参りの刷毛。序よまぐれ出たれ
 とも淀川の下り船。門違ひして荷物を失ひ五條新地の一盃機嫌。早呑込して丸裸と

○ 非北
八北 恥

ありたる北八の名も似て同行の彌次郎兵衛が木綿合羽を借着せし程の仕合せをかる浴陽の地も面白からざうか〜と新地戻りの朝風身よしみ渡り。五條の橋よ差掛りたるは此所の古しへ牛若丸の千人切り仕給ふ處と有る北八ははくと打かたぶさてかゝる身の牛若丸の裸よて辨慶縞の布子こひしき斯て東へ渡りて河原院の舊跡。門出八幡も直通りとなして高瀬舟の綱よ引れてたどりゆく道すから北八思へば〜つまらねへとよなつた。どうぞ古着屋でも見附たららんと



あでも綿入が一枚はしむつ彌次さんい、ちゑねへかの彌次ナニ買はせともい、よしたがひひ。江戸ツ子の抜参よ裸よ成て歸る。あたりめへだは北八夫だどつて寒くてならねへ彌次そんならさいはひ爰よ湯屋があるナントちよくりあつたまつて行かねへか北八ホンニこゐつり奇妙〜彌次さんお先へわがりてへトいちもくさんにの暖簾をく、つてそつと這入りかけわがつて裸よあらふとそれはこの亭主モシ〜こゝさん誰じやいな。何さんそのじやくトとがめられて北八あたりエ、いめへましい湯屋かと思つた亭主ハハ、こち乃暖簾よゆの字があるさかい。それで洗湯かど。思ふてじやのアリヤ濟生湯といふ振出し薬の名じやないか彌次ホンニ此奴の大笑ひだ北八又一倍寒く成。いめへましいト小言云ながら行くさきに。しみたれの古着屋一軒あり見世先よふるぬの古給つるしわり北八彌次郎をくどきと布子一枚もどめんと。件の見世にたち寄りひねくり廻して紺モシ此布子いくらだね古手やのハイ〜こつちやへお掛さの布子を取て見され。コレお茶持てこんかいな。お煙草の火もなるわいな。赤いの一ツちやと。くさんせ北八イヤ茶も煙草も入やせんコリヤアいくらだと云よ亭主ハイ〜そりやだやう

とう御座り舛。お安うしてわけふわいな小僧。ハイお茶上りあされ亭主。長松そりやおぬるぬじやなるぬいさ。なせ暖かな。ちやく上んずい小僧。イヤお家様が朝の茶がゆじやさかい茶く焚などおつーやつて、御座り舛。夫のさのふ焚たまんまの茶くで御座り舛わいな彌次。いか様さのふのお蒸花やどあつて。頓と河童の尻の様だ。イヤ尻の序は尾籠から御亭主さん手水にいきたいお裏をちよと亭主。ハイく雪隠へお出かいさ小僧。雪隠ぬるうの御座りませぬ。ようわぬてじやあるぞいさ亭主。ニ雪隠を誰が沸したぞい小僧。夫じやて。いんまのささわたしが参じたさかいそぐいて見さされぼつぽと煙が出てじやある亭主。エ、むさるをいふ奴じや北八。そんなとより此の布子のいくらだへ早くきめてくんねへ寒くてこたへられぬ亭主。お寒くのもつとそつちやへよりなされ。そあるに。い、日がさしてじやわいな。きのふも着物買もお出たお方がコリヤさようとする。ぬくる内ぢやて。そこよ一日ひなたぼこじていさきました。其お方が。もう着物買ふて着居でもだんある毎日爰の内へ。日向ば

○布子
●襦袢
●高

こしよ。来いなど。こあるよ。ムふてじやあつたわいな北八。エ、じれつてへコリヤア賣らねへのかどうだな亭主。ハイくこうじやいいな北八。安くしてくんねへ亭主。紺のおひるじやさ。ト箕盤。三拾五匁。きりくじやわいな北八。高いくね。つちらの江戸ものが古着の商賣柄で。いくらも取扱ふてゐるから。やるもんじやアねへ本どうのどころを云ふませへ亭主。ハア御商賣柄とあれむお前様も古着屋なされてかいな北八。イヤわしの質商賣。亭主。質とあれは何かいなお取さるのり置きさるのかいな彌次。置のが此男の商賣。北八。夫だから質置時の費用からして掛らよやア買れやせぬ。此布子のどうして壹より外に貸めへから貳米斗に買よやア損がいく亭主。なよいふじやないな後家の質屋へ持ていても金壹分もの云を貸とわいな北八。とんだとを云どうして壹分かされやしやう亭主。ナニ壹分つけんとありやしよまいがある北八。夫ともお前へ直に受さるるか亭主。受るわいな北八。そういつてもわてにやアあらねへ。夫よりか此間の股引の出入のどうしなさる。そして裕の時貸もあるし夫

もれ前へ子供衆が瘵胃虚してわづらつてゐるうへ。喉様が疫病で。死あれたけれど。佛抱へて葬禮を出し工面が出来ぬと。達ての頼みゆる。貸てあげたものを義理の悪ひいつそのと此布子の其裕のかたよ只取て置やせう亭主ア、是申し。どつともう。厄たにもなる事云ふてじやわいな。わしが喉いつ疫病で死たういな。あたけたる事いはんそわいな。ト亭主おやきよ立。どうも此男の口が悪くてなりやせん了簡しあせへ。そして何角とめんたらな其布子も壹貫よまけてやりあせへし亭主。よう御座ります朝商ひじや。まけてあきよわいあしヤン。北八。まづの布子よわりつゐた。ト彌次錢を拂らはせがの布子を着て木綿かつばを彌次郎よかへし。此の内ですて。のきんを見れば虎屋と有ると思ひよりて。和藤内三貫あまりのふる布子。老一貫よもどめこそそれ。夫より北八のたちまちよ元氣をゑてナント彌次さん。とさままかろふ。古着屋めをちやらほこで。はぐらかして壹貫に見おとしの安い物だ見なせへし。まだ襟垢もつかねへものを。彌次。紺の看版と見へておゐらがお供の様で丁度。の北八。時よこ、らり

○紫帽
野郎曰
申童

○着恥

何と云どころだの。どうてまよひさな。たばがちらく。とる。彌次。ハ、アむらささばうまの野郎どもか見へるからおやかた宮川町と云けんとうだ。北八。来ぞ。美しくしひ娼どもがくる。能時れぬらア着物を買てよかつた。まんざら。はだかの上よ其木綿合羽じやアあつらよそれ違ひても外聞が悪ひ。トよはが又襟かき合せて見へはりな違ひ通れば一人のれ娼。初音さん見あませ。彼人さんの着りもんよ大きな紋が付てじふりかへり北八を見て。初音。ホニニあやらしい人様じやチ、好んやの。チホ、や。打笑ひ。うちとぐるゆ。ト。北八。手前への着物を見や脊中の横つちよに大きな紋所がくつ、ゐていらア。北八。とこよ。ト。ふりかへりて能見ればのぼりを紺よ染わたりへ出るとお博き紋。北八。コリヤ大變。彌次。ハ、ハ。裾の方よの鯉の滝登り所ありくとそひて見ゆる。北八。エ、古着屋めがとんだめよわばーやが見へるらこゝろの幟のはぐらかし物だ。北八。エ、古着屋めがとんだめよわばーやアがつた。とうりや安と思つと。ぶんのめして来よ。彌次。ナニうつちやつて置やれ皆手前へがべらぼうだから起たとだ先は商賈だ者を。仕方がね。北八。エ、いゆへまー

い、トまじ目よなりてつふやきながら四條通に出れば名にあふ川東のきつとい。きお名代。看版花やかよ對のはでもやう音。サア、評判ぢや、今々三五郎の腹切じや飾たる。東西の木戸番まはがら聲よて



引連て芝居へ這入二階へ上ると機敷番さたり二人をむかふ坐。ト二人を兩方しきの前側へ入る。もつとモ幕の内よて中賣り商人の聲々よ。水から宇治山、彌次、こらうい、かい茶アあがらんかいな茶々どうじやいる番附繪本、彌次、こらうい

此跡が嵐吉と友吉が所作事評判、トよびたてる江戸て火あはどいふ、は京大坂にては皆女あり北八彌次郎兵衛が女、モシナ、お前さん方、ト幕、み袖を引て、お出んかいな、北八、いか様、ナント彌次さん京の芝居も、一きりみやらじやアねへの彌次、面白かるふ女中いくらで見せる女よ、御座り升わいな。またしが。どうあどするさかいマアね出なされ、ト二人を兩方の手よ引ばり

○權兵衛下卑 兩個遊三舎

大入だ然し江戸の芝居の半分でもねへ、北八、ア、たわくつた一盃吞たくあつた、彌次、おらア腹がへり間の大根だ菓子でも買て喰ふ、商人、水から宇治山、彌次、何ぞ手づからうつちやる勝手よさつせへ、商人、饅頭どうじやいな、北八、こゝろつがいつちわかつて居るコレ、饅頭三ツ四ツくんなせへ、商人、ハイ、三文宛で御座り升、隣座敷、コレ、饅頭やさんとした者じやない。こちらの辨當。へしつぶしじや、商人、ハイ、お許しなされ、彌次、アイ、タ、どうぎに足を踏だ、商人、ハイ、是はモシちとおゆるしなされ、北八、コリヤどうじやアがる人の頭のうへを、金玉を引きつて、通やヤがるエ、きたねへ、隣、お見物太郎、兵衛、チ、權兵衛さん何買ふてお出たぞい、權兵衛、太郎兵衛さん。まつてじやある私や今わこの機敷でお氣疎。味の物喰てじやさかいソレ見てゐて。おそ成たといおサア、こあるおもんじや、ト竹の皮、太郎、ハア、鱈の酢もじかぬか。コリヤ氣疎、其飯は辨當の替りよして肴へがして酒の肴よさんせ夫がい、わいな、權兵衛、さよじや竹の皮、持いで草履の鼻緒、てるわいな。イヤ時に一盃やろかいさ、取り出し風呂敷に